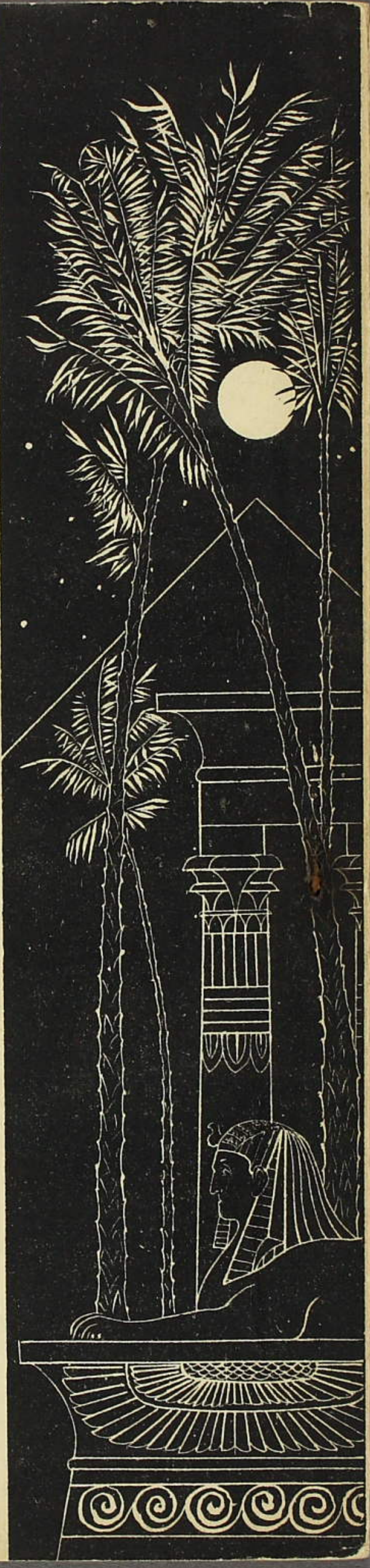
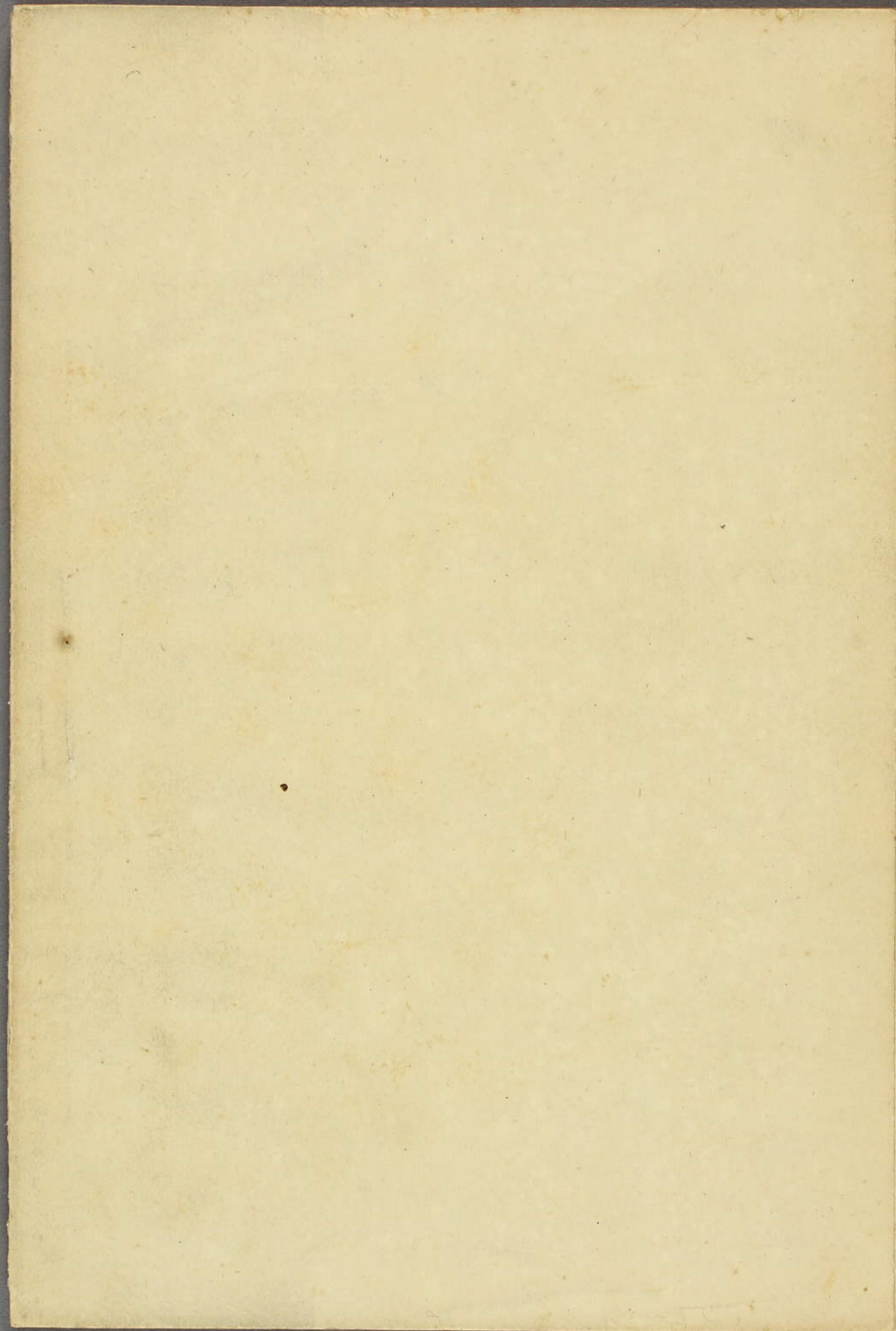
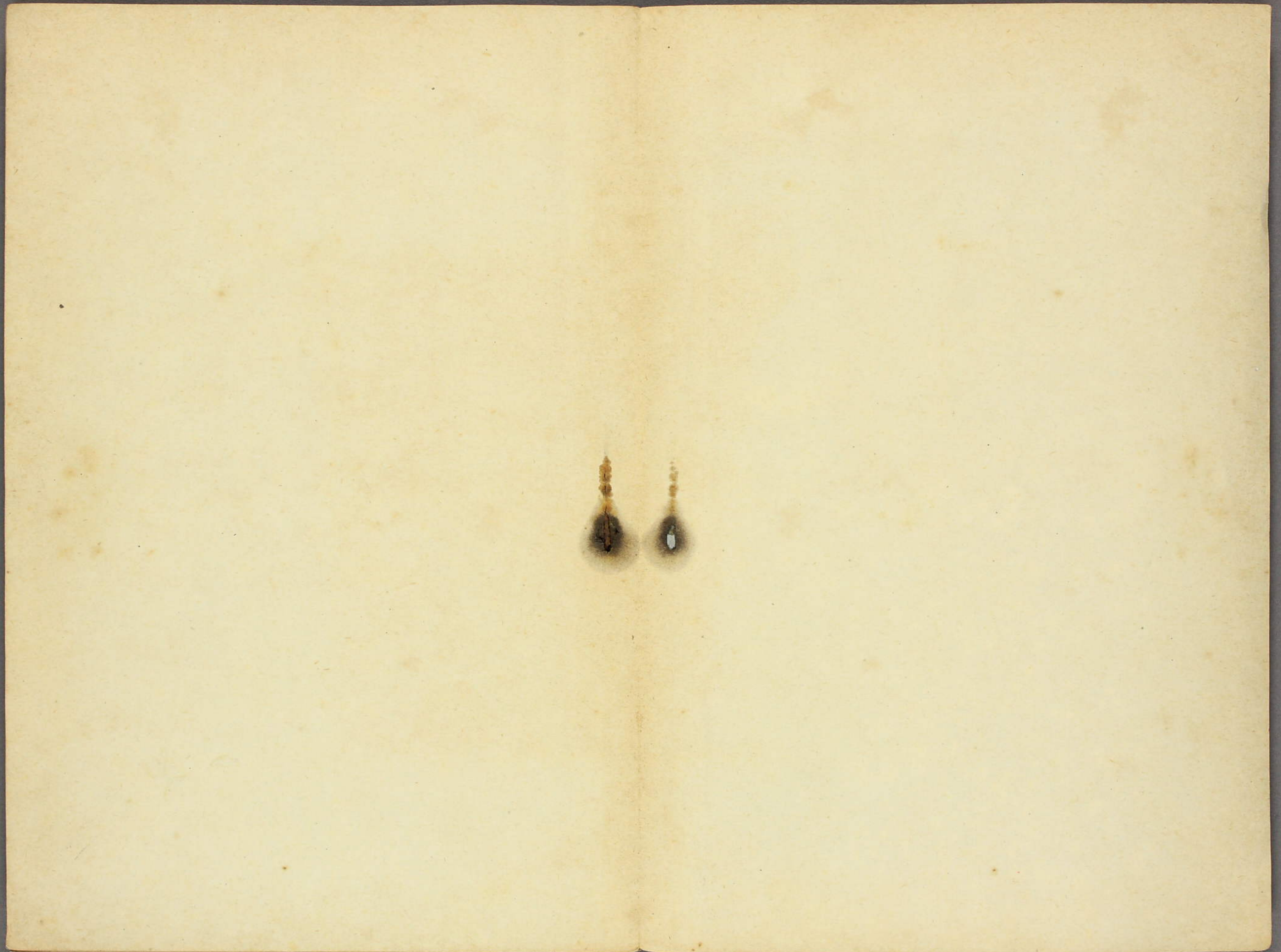


有暇

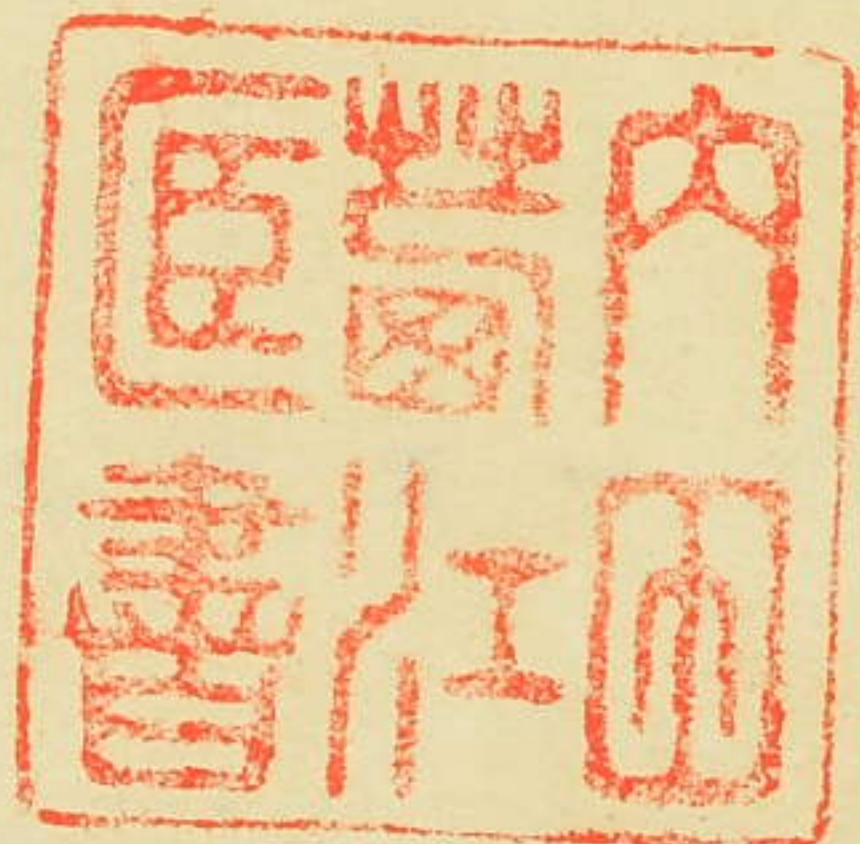








曉風殘月を吹いて、せゝらぎ水
の嗚咽するあはれさは、我がこ
の巻のえとゞめぬところ。なま
じひの賞翫はあたら衾を霜に
冷して、やゝに消えゆく西のそ
らのみぞ、長きうらみに残るべ
きよ。



目 次

廢園……………一
 寫生山水……………五
 元旦の田舎……………六
 立待月……………九
 匹夫の悔……………一二
 即興……………一四
 妙義の秋……………一四
 新情人……………一五
 廣寒殿の秋……………一八
 浪……………二〇

多し
 どのまき見きりしふし野山
 命しアヤシク世よもく西の
 じこの有清はあはれいさふ麻
 〇春のまよひはあはれいさふ
 〇即興ふるふはあはれいさふ
 〇即興ふるふはあはれいさふ
 〇即興ふるふはあはれいさふ



流水無情	七八
ぬかり道	一〇九
ねくたれ髪	一一九
花一枝	一四九
雲がくれ	一五八



常陸へのかへし	二〇
秋思客	二三
あらぬ浮名	二五
とこよの關	二七
我がイ、ゼル	二九
菩薩面	三二
鏡の淨玻璃	三四
鑛脈	四六
垣間見	五四
貧書生	六一
山百合	六六

有明月

瀧澤秋曉著

廢園

(1) 園

かくと見るより、飢ゑたる余が眼は嬉しさに明を増して、瞰み下みす彼方かなたは空氣の色さへ異なるやうに覺え、よきもの得つと思ふ心は中々に半秒の躊躇をも身に與へず、いきなり寫生帖を懷に捻ぢ込み、添ふて立ちし半朽の椎の根方を這ふて僅かに崖頭がけあたまを下りかけしが、幾年月人間の臭ひ嗅がざりしかと思しきばかり毒々しく繁り立つたる熊笹の藪は、音もなく余れを抱かかへ下くだして寸歩も動かすまじき氣色なるに、昆虫の殻や朽葉の切れやは縦横にかけ渡したる蜘蛛の網に載せられてフハリと余が頭より袖にかゝりて顔さへ蔽ひぬ。かなぐり棄る違もなく笹を披きてひた下れば、思ひもかけず藪は盡きて濕り果てたる軟壤の會釋もなく吾を投げたり、起んくともがけどもそこには便るべきものもなき悲しさ、七轉八倒していよく迂り行く先きに、山かゞしといふ赤きくちなはのツルくゞと這ひ行く、かくて漸くに池のほとりに

つきぬ。

崖の中ほどにいつの頃か朽ちて倒まに梢を池に蘸せる何やらの木あり、嵯峨たる枝は潜り抜ける余れを支へしが脆くもバリ／＼と飛びぬ。漕に繋る名無しの草は小さき蔓をなして塘を這ひ下り、そこにはまた莞の小太きが一様に頂を北に向けて、水面と四十度ほどの角をなし、纏めなば二た坪にも餘るべし。西の側は風にや揉まれし、折れ目長く短く、きたなくも去歲の宿莖さへ見せて、そのていたらく頗る狼籍なり。このあたり池は遠淺にして、河骨の花逞しき菱に苛まれ、あるかなきかの如く、水はまた件の菱に隙なく上を閉されたれば、其の清濁を知るべうもあらず、しばし廻りて池頭どもおぼしき處に出れば、そこには削り成せる巖を聳かしてこれを正面にし、横さまにさし出でたる大小の岩組面白う、いづれも厚やかに苔を被ぎて、それには枯松葉の刺りたるをかしさ、ほどり何となく濕り深く、例の蔓めきたる草を杖もてかき分るに、泉のさゝやかに湧き出るさまなり。蒼き木々の諸共に枝さし下して宛がらそこを包むやうなるを、何ぞと見れば、すべて羅漢柏にして、なまじひ曲りたるはつくりし昔しのあればか、根なしかづらのひしと纏ふて、趣きは深けれど木は五月蠅くやあら

む。此のあたりよろづのさま瀧めきたり、げにさもあらむ、巖の上には故らに窪みつくりたるも見ゆ。それも昔しは蔽ひつらんが、土や墮ちけむ、石や飛びけむ、愚かなるわが目にもあらは過ぎてぞ見らる。築島に續くバナマの地峽を過ぐれば、右手に沈める恠しものにお玉杓子とかいふ色黒き蛙の小冠者のひしとつきて樂しげに尾を掉るあり。なにぞと見れば、悲しや、さまは變れども正しく、其むかし殿の寵姫をのせて手づから篙をあやつり淺妻舟の浮名や流しけむ、いみじき畫舫がなれの果てにぞありける。憎きは此の小冠者どもなれど、觸れなば解けん危さに空しう立ちて眺め過しぬ。鳥には態と山林の趣きを見せて、檜の立木さへあり。稻荷か、辨財天か、鳥居の奥に叢祠ありて、裡は空しう風を通はすのみ。礎歪みて草に陥り、社の屋根は鳥糞を載せて夢にもいかめしからず。春水氾濫の跡か、鳥のめぐりは土名残なく洗はれて、紳もあはや既に池中のものたらんと見え、稀に泳ぎ寄る無主の魚の根啄くあはれさ。紅蓮孤り水に清けれをも、徒らにたゞ相馬内裏に美服の人を棲ますが如くして却つて疎まし。鳥を對岸に渡さんと欲すれど、橋朽ち果て、板の狭間に薄を生じ、欄干よろめきてしかも止るもの少く、雨の痕か、橋下の水點々として雲間の星の如くに覗けり。

嘗て『かたはづし』に、高島田に、窈窕婀娜たる大奥の子女の此上に掌を拍て鯉を呼びけんや否や、橋上復た庭下駄の跡を貽さず、抑々またこれ何くにか原ぬべき。危さに道を迂廻して橋を後ろに見、落葉散り布く松が岡をのぼり行けば、雜草離々として足に惱ましく、土の崩れに小さき穴の數々あるは蝮蛇の家か、紅き葦の半ば朽ちたるが草を抽きて一ツ二ツ見ゆるさへ淺まし。松に聲ありといひけむ、それは秋、これは夏の初めながら、宿葉網をなして大方は緒く、徒らに風の揺るを待ちて逝^ゆなんと欲する哀れさ。折りしも雀のたゞ一つ崖のかたより落し來て、檜の梢に怪しき音をたてつ、其まゝまたいづくか翔り去りしが、跡物靜かなるからに心中々に澄まず、却りて毛虫に襟元を傳はるゝも知らぬほどにうつとりせるも半日の疲れなるべし。歸りて懷ろなるスケッチブックを改むるに、何事ぞ、半頁の略寫すらあらなくに、あはれかゝる場所は材料得んとて行くべきところにあらざりけりと思ひ返して、遂に悔いずして止みぬ。

寫生山水

こ、は木立なればや、殘雪尙路に存して半は氷化し、輕脆爽かに裂けぬ。路盡んとして一曲、片袖に食はる荊茨を筈に薙ぎて一步前めば、杉檜また茲に終りて身は斜めに陽に面せり。一囀耳に鋭く、溝鶉鷄の一群藪を上下して走るところ、忽ち見る、斷崖凍崩して直下幾十尺、牙の如き氷鍾乳逆まに懸り、崖僅かに谿をなすところ、氷塊盤結、狹、々を以て應じ、潤、々を以て迎へ、斷えんとして斷えざるもの二三所、層々接續崖盡くるに及びて甫めて終る。縦匍横匍、佛頭の如く、累珠の如く、蜿蜒長きところ幅丈に達す。其の佛頭の如きところ黝石の巨大なるものを銜む、少しく下腹を露はし、底に及びて空然一大洞穴を爲す。棍大の氷鍾乳一は大に、二は小に、短長妙に吊懸し、乳尖融けて滴々聲あり、軀を屈して洞を覗けば、輪々迂曲して、窈冥の裡幽かに樽を覆すが如きを聽く。水漏るゝあたり、礫累々、蕾露其間に點在し、山芹尙半ば緒く、水其叢を潜りて行くところを知らず。風一過、崖頭の疎林其潮紅せる梢を拂はれて、徃々戰慄すれば、曝露せる鬚根亦我を忘れて土を攘ふ、頰又頰、土襖

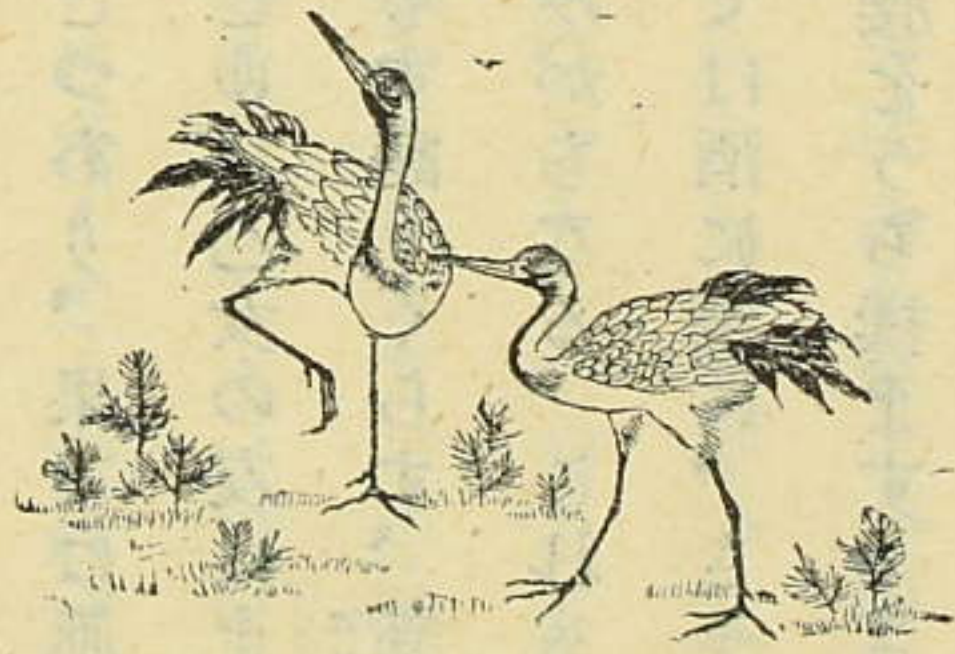
枯葉を載せて、七馳麓に達する頗りなり。此佇立の趾水に埋れて冷を覺えぬ。

元旦の田舎

きのふ見し花の山、楓葉の岡、いづれも白き衣をかつぎて、新たにさしのぼることしの朝日をうけて、いやきらびやかなり、田は凍り、畑には心にかゝる草もなし、疎らに立てる草の舎に立のぼる煙り豊かに、門松の飾りはさまでにあらぬど、積みし俵の多かるこそ見よけれ、翁は昔しながらの袴うち着て、扇とる手もいかめしからず、家々に強ひられし屠蘇に酔ひて果てはまだ待あぐめる家の多かるをも忘れ、暮るゝまで古ごとを語りつゝけて、心まで若やぐめり、媪は流石に出でず、來にける人の袖をおさえて、片手には早や杯さしつくるもにくからず、さらばとて受けつ、若き男の妻子あるほどなるは、村長が家につどひて、ことしの祭りには如何せまし、さちよくて米も藪もいと多くとりたれば、相撲まれ、はた花火まれ、いかでにぎはせむ、力つくしてんなど語るあるべし、それより若きは、鎮守の社に詣で、石

などあぐめり、たゞ一とせなるに力はかくこそ加はりつれど、人もなげにいさむあれば、まだこれをだもあげえざることの口惜しとかこつあり、果ては風さむきに肌おしぬぎ、相撲とりなどず、晝餉の頃なるに、まだ鬨の聲聞こゆ。乙女の友はまた乙女なり、鄙ながらさすがに歌留多も雙六もありて、しめやかに日ぬもす語りくらす、新嫁は親のあとべに畏りても言もはかばかしからず、はなじろみ、かゝみがちなる、これもよし、年経たるは、朝のうち、家の内、庭の掃除、門前の清め、人來ては酒に茶に、さまざまのもてなしに心も身もせはしく、暮れては勞れに勞れて、子等に肩腰をうち揉ます、さてまた、愛らしくも、憎くも、面白くも、さてはうるさくも、さうさうしきは、四ツ五ツ七ツ六ツ頃のうなゐ子等なるべし、めでたき折には寂しからざるこそよけれ、家に在るかと思へば外に走せ出で、出でしよと思へばまた走せ入り、座敷をうちめぐり、庭に走せ出で、凧をやぶりてはうち泣き、竹馬より落ちてはわめく、呼べども耳にかけず、罵りくるひ、歸るを見れば、早やゆうべ裁ちにしあざ衣も、しとし濡らし、泥をまぶらし、事どもせで、姉にすがり母にまつはり、菓子を乞ひくだものをねたり、盡れば獨り餅をさがして火にかざせど、これは覺束なし、外にて友

の呼べば、それさへ捨て置きてまた出づ、跡にて母のかぎ知りてあわてふためき、とりあぐれば半ば過ぎは焦げたるらし、うち腹立てと及ばず、やがて日も入りぬ、きぞの夜まで耳なれし、葉うつ音も今宵はなく、燈火ともしびいつになくあざやかに障子にうつり、山も畑も皆うち笑みてあけなん、日をぞ楽しめる、年ごとに來る田舎の元旦こそ、いつもかゝるものにはありけれ。



立待月

流りする火のまた消えて、
暗こそ残れ海のつら、
呂宋の風の棕櫚の葉に、
戦きて歸る夕潮に、
さく流さましもの思ひ。
* * * * *
義にこそ勇めますら夫が、
荒波寄する高砂の、
沖の小島に旗たてし、
五千に足らぬ小手こてはこ矛に、
鏑さりしも久し思のもと。
萬里に餘る中國を、

醜しこのえみしに荒されて、
月こそ宿れ洞庭の、
み屋形船は來る秋に、
何を載するや駄舌けつせつの。

長白山のこなたより、
崑崙かけて四百州、
水もつ峯はさはながら、
忘れず果つる朱氏の恩、
君を奠まつらむ閻伽あかもなく。
* * * * *
井筒につぎふうなぬ子の、
さだかにそれき覺えれど、
忘れはかれし古ささの、
山はたなびくうすかすみ、

櫻句はす敷島や。

流れは早き高潮の、

源遠し大八洲、

波間に浮ぶ島山に、

ゆきかひしぬる高麗島の、

羽搔につきぬ思かな。

* * * * *

世にいさ惜しきあたら名に、

援け求むる女々しさも、

神ころ知らぬ成功が、

耻し忘れてものゝ夫の、

大義に急ぐ苦しさを。

磯うつ波の音に聞く、

君子の國さいふなれば、

八萬尋の和田津海も、

濁りつきぬる末の世に、

たゞかれをこそ頼みしか。

* * * * *

なきさねさづる朝ごらの、

何を傳ふる根なし草、

空につらなる山河の、

廣さ怖るゝ不覺をぞ、

やまこ心を聞くべきか。

波路遙けし松浦鴻、

肥前の國にかりねして、

時し待ちたるわが父も、

やくなしごころ悟りては、

さすがにからず藻鹽草。

忘れはせしなたらちねの、

今は世に亡きわが母が、

いまばに見せし姿こそ、

ゆゑしかりしな女郎花、

聞きも及ばれもろこしの。

黒かみ長きをみな子の、

帝釋天は泣かすとも、

松に蔓しも生えるれば、

何にかはせむしら濱の、

いさこの中の珠なるを。

* * * * *

かたぶく運さあらばあれ、

骨を曝さむ椰子が原、

武勇の鬼さなりなんを、

やまこ夷の膝もさに、

ひれふしたりしくやさば。

吹く風さへに嘲れば、

遠に浮るゝ雨雲を、

非情のものさ知らずして、

あこがれたりし芭蕉葉の、

葉ばたきしつゝいかるとも。

* * * * *

思ふがまゝに胡沙吹きて、

曇りころすれ春の夜の、

こゝはあやなき高ごのゝ、

強ひてし笑ふわが聲は、

よも達とかたな月の宮。

流れは早き高潮の、

源遠し三千里、

浪間に浮ぶ島山に、

ゆきかひしぬる高麗鳥の、

羽搔はにつきぬうらみかな。

匹夫の悔

くはし少女にたゞかれて、

氣疎き音は立るこも、

忍びはかれて捨石の、

折にふれたる涙をも、

苔の雫さいふかさよ。

玉のさかづき底ぬけて、

まなこは白く世を見れば、

戀に病みもし死にもする、

人のこゝろの脆きをば、

笑ふて語る我身がさ、

君やは思ふかりちめに。

さゝやかなれど此のうちに、

血しほもさすが沸くべきを、

生れてこゝに三十させを、

送り迎ふるそのかみに、

わがこの胸に簪り焚く、

衛士の一人は見えずさや。

音にこそたてれ色にこそ、

薄紅梅のかんざみの、

かけてもそれと見せれども、

幾ひさせ秘ひめしさいめこそ、

目ならで送る秋の波。

氷室の裡に身を焼きて、

悶え悶えし愚さを、

彌勒の世にや償かへすべき、

つくろふ面おもさうらうへに、

心や戀を耻らへる。

誠か君も戀知りて、

わがむくつけき顔ばせを、

映して胸のま鏡の、

早くも曇る五月晴、

明まで過す女々しさも、

君はをみなのもあらん、

かくいふわれの男の子こそ、

かたちばかりの髻ならめ。

君さわれこの心根の、

通はざりしを今更に、

啣かつこそかは神々に、

今宵ばかりの此世にて、

君はよみちに鹿島立。

人目の關の繁ければ、

君がいまほの枕まくらべに、

握りかばさん腕かひなにぞ、

わが世君が世さりんぐに、

これを限りのま心を、
籠むるべきさは願へども。

壁にうつたふ縁言の、
甲斐はなくともせめてには、
豫譲が衣を裂きしとき、
裏子が膚も痛からば。

即興

野山にしほし風なきて、
筑波の峯に笠ぐもの、
一ひらかゝる夕まぐれ。

入江に浮ぶ高ごのい、

浴上り膚寒からで、
月にかゝれり松の上。

鹿島の浦に小網引く、
海のさつをの許しなば、
漕ぎてや出ても潮がしら。

妙義の秋 (鳥水が遊)

秋風通ふ關の戸に、
いばゆる駒は古の、
武藏野わたり露白く、
笛吹風すさびては、
寒かるらめや旅衣。

信濃路近き山々の、
朝な〜に霜あらば、
煙りは深き金洞の、
峯のみぢ葉なごてにか、
からくれなぬに染まさらむ。

鎌倉山に跡ふりし、
つはものごもの夢路をば、
ものゝ夫ならば弓杖の、
筆もて辿るまめ人に、
見えざらむや立田姫。

硯が窟ふみびさの、
しほしの筆を待ちつけて、
さながら寫す岩々の、

それにも靈の聲ありて、
仰げば高し石の門。

叩きて聴きれこゝにまた、
嘗てはめぐる峯々の、
奇しく壯きく恠しきに、
折るゝ我慢のまが角の、
短かきかひな断たまくこ、
愧ぢつ恨みつ悶えけん、
なにがしなのこなかりしかこ。

新情人

くれなぬそむる東雲の、
かなたにこゝろはせぬれば、

白波さわぐ「ばるかん」の、
出づまに夢はのこしつゝ。

* * * *

雲井はるけし「おりんばす」、
「ぎりしや」の山に跡たれて、
千こせふりぬる島々の、
みろらに花も降らしし。

翡翠のまなこ清らけき、
美き技士のかひなには、
そゝぎてさらす橄欖の、
油にかゝる鑿のあき。

かれがかなづる「ばいをりん」に、
荒れたる獅子をしづむまき、

さされ五百重の雲のへに、
興をもちせる「ぐえなす」を。

* * * *

さすがかはらぬわだつみの、
むかしと残る浪模様、
春はしづけき水こりの、
うきぬの夢もやすからで。

野に生ふまゝの民ぐさの、
朝夕すゝるましみづに、
おつる濁りもしげれば、
もつ花さへに十悪の。

紫にはふあやぐも、
かきやみだせる神のみ座、

月はつこめて澄みぬれど、
いづこに影やおそすらむ。

こさゝが洞に爪をさぐ、
魔獣がまなこ輝けば、
千代に一たび現化する、
星も下界におりかれて。

何を汚すかかないでの、
「ほんち」つくりのゑだくみが、
かぎり知られし「ばれつ」の、
こゝろいやしき鶯色は。

たゞかりそめに彫らるべき、
色のみ皎き石膏の、

かしらにこむるたましひは、
操賣るべき神の像。

祭りの贅のくさぐさに、
をこのれぎこさたはれ男が、
媚びてはさゝぐ光輪の、
浮きたる戀は寄するとも。

いのちさゝげん桂男の、
雲の通路中たえて、
いたづら臥の枕べに、
涙のつらゝ溶けなくに。

「みるろゝろゝす」色あせて、
春はいにけり「ばり」の里、

「ろーま」をてらす秋づきの、
くもりは長し五百年。

廣寒殿の秋

秋の寢覺の早ければ、
いよゝ冷え行く帳臺の、
几帳の影に夢うせて、
涕に氷る玉枕を、
抱きてわれはありしよな。
圍のさぼそに通へるは、
落葉を載する風なりき、
死けものはいぎたなかりしよ。

棚引きたりし八重雲の、
しばしわが身に宿直して、
磨きぞ成せる蒼空に、
霜よ下界へ首途せよ。

塵はこりなまくづよ埃よ玉屑よ、
降り行く末は臙にて、
蒼なき世の目もほるか。

やをら閉せる窓の戸に、
映りし影のくらきかな、
はやも消るか有明の。

また引きかつぐ夜の衣、
聞くだに憂しや鴛鴦の、

衾ひたひに包むもの思ひ。

額ひたひにかゝる睦言の、
此の曉にいくよろづ、
それも浴るか朝月の、
殘んの光り屋の棟に。

しばしをむ妹が軒、
待たるゝ宵はたのしきを、
雲井遙けく仰ぎ見て、
高く尊く清らけく、
感ひなしさやあがむらむ、
身を焦したる夜なくを。
神さしわれをいほといへ、

獨りぬる夜の夢安く、
人なつかしく思はずは、
髪やわらかき乙女子の、
何にかせまし此の姿。

嫉くこそ見れかさゝぎの、
橋のたもさに戀ひわびし、
天の河原の織姫も、
この文月の逢瀬より、
校の音さへさわやきて。

霜のつかひに雲の侶、
高くも寒き一さ夜さを、
かくて明すはわびしきに、
いつまで來る秋やらむ、

せめてはゆるせまこしへに、
老いぬ乙女の苦みを。

浪

秋風に、
聲のみありと思へるは、
ひがごこならむ、
清く磨ける湖の、
おもてを見よや。

争論無益、
こく出しれ、
ふさばしき、
鏡もあらば、

今この胸に、
大なみ小なみ、
さわぐを見せむ。

常陸へのかへし

今しも渡す大利根を、
吹きす過ぎ行く河風に、
衣手さむきひこり旅。
下總かけて上總路に、
我がさす方は近けれど、
解きもかれたり常陸帯。
思ひづいづる長月の、

雨のなかげにたづねてし、
雲井の橋か桃源の。

借樂園の細ごのに、
萩のうねりをかすふれば、
ゆたかに鳴らす松の曲。

小雨そぼふる北浦に、
折しも船はあらずして、
わが袖さへも煙りにき。

登えて高き鋒杉に、
神代のましの雲ぶすま、
宮居もいととさびけらし。

眺め果なきいさご原、
渚の松に日は暮れて、
鼓か琴が遠の海。

潮來が浦に旅れして、
入江にちかきおぼしまの、
月に聴しはかこがうた。

長き旅路のをちこちは、
方こそかはれ朝夕に、
見なれけらしな筑波やま。

夕雲あかき初日和、
山は臙にむらさきの、
色をばいかに寫さまし。

腰につけたるわが行李に、
さすがに筆はありけれど、
かひなをこゝに棄てばやな。

愧ぢつゝ感ふ折からも、
雲のゆきかふ彼の山の、
かなたに君は在するを。

いかでか秋の一夜さを、
語りあかして口づから、
山の姿を聴きてもが。

霞が浦の秋潮に、
みるめやいかに多からむ、
漕ぎづる舟の楫をたえ。

よるべなきこの賤の女が、
眞菰むしろの章あやをしぞ、
問はまほしくは思ひしが。

翼なき身のいかにして、
雲井を風に翔らんか、
早も月日の待ちたるを。

なれし常陸を跡にして、
都路近く下總ゆ、
歸るに名残惜まれて。

つきぬこゝろを水壅の、
みづかきあさにいばせしが、
あはれさすがに見られしや。

古ささ遠くかへり来て、
もて來し苞をくりひろげ、
まふこは雲を追へりしに。
ふみをし見ればこは如何に、
かざしの花の一枝に、
匂ひもふかき贈りもの。

かりそめならぬ仰せ言、
受けつゝこゝにわれもまた、
酬いんものゝなからめや。

さもあらばあれ古ささは、
月にながめも衰へて、
湖にも氷ささせるを。

せめては胸に立ちのぼる、
炎をうれによそひつゝ、
淺間がだけのうつしゑか。
折からなれやはづかし、
杜にも通ふ木がらしの、
わびしくのこす言の葉が。

秋思客

もこそ是れ載筆觀光の遊にあらず、俗眼俗趾、
借問す這間什麼の感興を得んまかする。

狗兒

晩稻あしな實れる小山田の、
露置く畦も白ければ、

今朝の命は惜まれて、
捨ても得せずは狗の兎よ。

木 犀

小里さびしき長雨の、
ぬかりをたごる旅人の、
笠は管かやまひさしに、
落ちて聲ふし百里香。

鮒

水かさばまさる五百川や、
干沼の蘭草花散りて、
あやなき闇のうばたまに、
陸こそ潮れもみぢ鮒。

水

小溝の堰を放たれて、
落足早し五十瀬川、

柳がもこのうるくづの、
晒にや淀まむ秋の水。

藻刈舟

河づら渡る聲冴えて、
君や足らざるわが舟の、
刈藻をなけば分たんに、
いざ宿せたまへ情郎よ。

鱸

むら雲迷ふ水の上、
蘆分小舟漂ふは、
濁らぬさきの片時を、
鱸の味にさめんさか。

大河

雨を催はず夕闇の、
河は流れのゆるければ、

あらぬ浮名

あらぬうき名の立たば立て、
水より清きわがこころ、
塵のにこりもなきものを、
立つてなごか厭ふべき。

人目をつゝむくらまぎれ、
稻村影やなやのおく、
忍びてかはす仇まくら、
憂かるば人の戀なりし。

五月のそらの長雨して、
濁らぬ水さてなけれど、
岩のほさまや谷のおく、

九十九間は水ながら、
さやかなりけり岸の聲。

栗

こころ墜きしこの畑の、
あるべし許をおこなへば、
きのふ拾ひし山栗を、
すはや煮るなり賤が妻。

葺 狩

行けかし松は若かるが、
落葉朽葉の深からば、
鎌もてかけよばつたげの、
いたいけ笠の落ぬまで。

(前四首常陸にて、後五首下總にて)

苔にしたる清水あり。

わらは愚かの身なれども、
女子の道もいさゝかは、
知りてこそ在れ今更に、
惜からぬ名のあらめやは。

圃の板戸はゆるくとも、
籬はよしやあらずとも、
心にしむる下紐を、
許すこそかはあだ人に。

かりにかざれる笑眉をば、
何と見るらむしれもの等、
柳さうけてわれ在れば、

なめなるこそもいひ出でよ。

憎しやわれをうき草の、
さそふる水のありもせば、
いぬべきものさひたすらに、
うたて心にはかりけむ。

われさへかくてあるものを、
引く手多かる身なるから、
正しき道をさす竹の、
君はふまへり一とすぢに。

よしや曇れる大空に、
その濡衣の干がぬとも、
君さわれさのかくあらば、

あらぬ浮名の立たげ立て。

とこよの關

夏の日よ、
檐の下闇たどりつゝ、
斷崖傳ふ若駒の、
足搖のほごうしづかなる。

行く手をいそぐ道なるか、
たゞしは驛のかへさにや、
荷ぐらにのせしあるトこそ、
しづ心なく居睡るれ。

飽くまでゆるすもろ手綱、

長きうなトをさしのべて、
小草の匂ひ嗅ぎつゝも、
はやさしかゝる棧は、
弱くも常にゆらめきて、
たけば水よりもちひろ。

草かき分けて覗き見よ、
音なき水は淵をなし、
蒼くぞそこに滞る。

底のいさごはほの白く、
遊ぶ鱗の數見えて、
牙えにさえたるきよ水の、
絶えずに洗ふ岩のこけ。

底さへ見ゆる水なれど、

さきわかきわにいやしげる、

木々の隙をばかいくどり、

さし入る天つみひかりの、

岩のたけだに見せつらば、

淺しと見するこの淵は、

底に住へるまが神の、

世にもものなげにたかぶれる、

人てふものを驅らんさて、

かざりかけたるれとし穴、

げにさならむと思ひいで、

立のく足もおのづから、

安からずこそあるべけれ。

人ぞ通れるけはひなり、

いでやまばかりまが神は、

聲うちひそめみな底に、

今こそ影をかくしつゝ、

居らむ太刀をさぐふらめ。

ありまばかりの細みちの、

わけてはこゝに狭まりつ、

四つのひづめをもるこもに、

渡す馬士うまこが常の日の、

心づかひはさはさかや。

暑さにあへく若駒の、

歩みやいと鈍からむ、

鈴の音ひくく稀々に、

鞍に横ふおのが主を、

ひき足こゝに揺りつゝ、

今しも淵の上に在り。

低くぞおさす水鏡、

悪魔のかくこ見ざらむや、

居睡る人は悲しくも、

華胥の國にやさまよひて、

時こそ來れかしこしと、

かのかけはしの其の下に、

もろ手をかけて覗へる、

敵あるぞこは鈴の音の、

かすかに響く夢路にも、

見えやあらむ今そこに、

生なり出でたりしうたかたも、

もろき命のためしをば、

まのあたりには見せつれど。

我がイ、ゼル

つたなき手わざほめたまふ、

君がなさけのあつきをば、

はやも汲みけりさてこそは、

かくまで落つる涙なれ。

かくまで落す涙をば、

女々しき君は見たまふか、

女々しがるらんしかはあれど、

男の子のうちの男の子ぞと、

常にはゆるす身ながらも、

かくは女々しくふり落す、

涙の雨のゆゑよしを、
あはれと君も見給へや。

驚き顔にわがおもを、
守りたまふは其ゆゑの、
わかでおはすぞ覺えたり。

さらばわが君れがはくは、
つたなき繪づら近よりて、
いまひとたびは見そなはせ。

青葉繁れる森影は、
あつき心をそのまゝに、
夏さしかけりその森の、
こなたに立てる男の子をば、

君は誰ぞか見給へる。

われに肖たりその給ふか。

小川の水の清ければ、
冷けさいかに忍ばるゝ、
世には脂も溶けぬべき、
温泉さいふもあるものを、
なごてにかくは冷やけき。

このま清水の冷けきを、
忘れたまふなその水の、
ま中に立てる乙女あり、
そがひになりてありぬれば、
眉目は見えれど黒髪、

かくいつくしく肉付の、
かくもゆたかに見えぬるは、
世にまたありまほえす。

男の子が顔にかぎりなき、
愛さなやみを見給へれ、
今しも動く唇は、
何をか語りかくるらむ。

かたりかくれどこなたには、
何のいらへもあらずとよ、
餘りさいへばつれなきを、
君はいかにさ見たまふぞ。

つれなき人を戀ふる身の、

かれがこゝろの苦しさを、
また悲しさは如何ならむ、
君は清けきこゝろより、
ねるかこさみし給ふかや。

死するはかたき事ならよ、
死するにまさる苦しみを、
拂へもかれてひたすらに、
えさげぬ戀にあこがるゝ、
愚かの彼のあはれさよ。

しれにしれたるしれものよ、
慾より成れるうき世がさ、
悟りてしばし森影の、
こゝらわたりに避けつゝも、

胸のはむらは消えずして、
 わが今かける此繪をば、
 美術の眞にかなはずと、
 こずりてろしるそが中に、
 ひさりほめけむ情けをす、
 せめて半ばは戀の上に、
 分ちてこそむさぼれる。

菩薩面

あら面白のくりごさや、
 われと火に入る夏虫の、
 なく音もいさよふかれかし、
 耳そばだてもわれきかむ。

愚かのものよいか聞け、
 笑みの泉は厚氷の、
 しばし此世の風うけて、
 かたちかへぬるさまぞかし。

かたちのさまは佛菩薩、
 心さながら鬼にして、
 ふからぬものさいふからに、
 さまでに堪へぬ慾なりや。

茨のさげさいふなかれ、
 世にうつつけかる男の子には、
 からき目見するすべにきて、
 われば色香をたまはりぬ。

片頬かなほの笑みにいまし等を、
 いくたびこそはれさしけめ、
 神のめぐみのくしきには、
 われすら胸の安からず。

餘りに事の敢あへなさは、
 あはれささすが折々は、
 思はざるにはあられども、
 かしこ顔する憎さより。

さてもの事はこのまゝに、
 深きならくの奥底に、
 沈みやりてんでさらば、
 一さきは笑みをつくるはむ。

かくとも知らぬかしこさよ、
 君がまことのなさけころ、
 かくいふわれの得たりけれ、
 われこそ得たれわれころと。

石にいろざる戀草の、
 しげきもさに立よれる、
 人はかはれる人なれど、
 わればむかしのわれにして。

ためしものよになきこそが、
 わが友ごちのさるものは、
 軒つぐよばに通ふ風下もの、
 九十九夜までもたばかりぬ。

からのやまこの古に、
史よみてふ史のいづれわが、
女子の史にあらざらむ、
いかに讀みけむ覺束な。

されば男の子よ今ころは、
み空の月の濁り江に、
影をおさすも定れる、
浮世のさがさ悟るべし。

悟らば去りねちち方の、
いましが友の群れつごふ、
闇覺が廳につらなりて、
かたみにかたれ古さこの、
菩薩が慈悲の畏かしこさを。

鏡の淨玻璃

こは恐ろしの執着よ、
もろ手に解きて登れども、
尙ころ包め八重まがき。

霧立ちこむる淺間野の、
茨が末に衣やれて、
風なき朝も白露を、
こぼして松は觸れたりし。

ひさりと聽きて驚けば、
かゝるためしやなかりけむ、
捨つる命にあられども、

さりさて惜しきゆゑよしの、
なくこそ思へ今更に。

心に宿る愁なく、

求むる事も少きに、

不斷ふたんの笑顔有つものよ、

世に恐ろしき靈山を、

ひさりに攀る危さを、

思ふもなれがさいはひず、

こゝらに河もあらざれば、

淵の禍なかることも、

投げなむ帯を待ちあぐむ、

枝はいくらも見えたるを。

聽しがまゝと思へども、

行きす窮る細道よ、

西に東に谷遠く、

なまどひ露るゝ空のさま、

恠ぢけしき木瓜の藪中に、

われたどひさり残し置く、

霧のやごりはいづこそや。

膚破れて血は紅く、

去年の薄の本末もとすえに、

かたみを置くもえにしこそ、

思はん草にあらずとも、

またのあしたの露を得て、

根はわれ知らず嘗めなんか。

頃は卯月の末なれど、

天柱地軸さて置きて、
 先づ覺束なこの軀。
 迂るがまゝに崩るゝや、
 便りもあらぬ焼砂を、
 あぐむば愚か頂の、
 限りてかくも見えたらば、
 憂きはかはらぬ世ながらに、
 きたぶく後ろ見する人、
 行末かけてなかるらむ。
 恠しきものゝ棲むさいふ、
 前掛山はこゝかこよ、
 巖の稜の鋭きを、
 稀しと思ふ人もあり。

銚子が口の絶壁を、
 下りて見ればあな高や、
 ひこやの塀のかくあれば、
 來し方早く目にうせて、
 今こゝろ細れわがこゝろ。
 新に臭ふ硫烟は、
 風のまに／＼往きかひて、
 細きながらに勇み行く、
 たのが心の映りなば、
 顔の色こそ奇しからめ。
 岸に立つ身の鳥ならば、
 高く翔りて直中を、
 底の底まで見なんもの、

疎らに這へる落葉松の、
 芽ざしはいよゝ堅くして、
 谷を迂りし雲積れ、
 跡には臥さぬものもなく、
 千丈の氷さここほに、
 たまらぬ村の脆さかな。
 辛くも死なぬ石楠木の、
 もろ葉は既に凍りしが、
 梢の蓄すこやかに、
 やがて吹き來む春風の、
 下には神のみ恵の、
 あるをたのしむけしきにて。
 悟り顔するしれものゝ、

うへこゝろ歎け折り／＼に、
 樵夫も來ざる常の日の、
 安く静けく穩かは、
 春の假寝の夢まくら、
 寤めずで尙も恐ろしき、
 魔王が腹さ知らざるか。
 見渡すかぎり黒々々、
 ひた續きたる焼石は、
 史に見えたる炎上の、
 いつの名残にあるやらむ。
 いつこも知れぬ大荒れの、
 たさへばけふの只今に、
 ささ吹きいづるものならば、

我を忘れてさし覗く、
聞きしにまさる此穴よ。

常世の國にありといふ、
人煮る釜をさり出で、

かけても見ばやさならずば、
かなたに見ゆる小淺間の、

山を蓋になしぬべき。

湧き迸る雲霧は、

何の力士に投げられし、
我を浮べて此のまゝに、

天つみ國に上らすや。

忽ち煙靡くよき、

見る間に吼る足のもき、

風は穴にぞ分け入りて、

何をあされる震動の、
するかさばかり響きつゝ。

怒れ山神威もあらば、

さく其の髻をふり堅て、

紅き炎の眞木柱、

高く太しく大空の、

外れにかけて樹てよかし。

溶けたる石の雨霞、

見渡すかぎり投げかけて、

網の稻妻うばたまの、

暗夜を晝さふせりしは、

古ごこながら誠さか。

み空を通ふ雲々の、

この頂を事もなく、

過ぐさへ早も興なきに、

初めて來にし賓人を、

いつまでかくはさげすむか。

惜き命をもてばこそ、

十里の外に眺めても、

八重立つけぶり忌はしく、

益なきものさげねささめ、

屍を穴に墮しては、

世に淺間しき姿をば、

見せて泣かさんたらちねの、

親の夢にも立たまふな。

厭ふ甲斐なき世の塵を、

いづこの國に逃ぐるらむ、

かゝらばかゝれ我が衣の、

朽るゝまでは拂はしを、

神と袋をかたぶけて、

心のまゝに試せかし。

八苦の裡を遊ぎ出て、

僅につきし彼の岸ば、

光りさすがに満ちくして、

摘むべき花の玉くしげ、

今やあけなむ嬉みを、

奪はど酷し神々よ。

忍が岡に蒸す雲の、
青きが上に立ち給ふ、
技藝の天女笑ましげに、
さしのべたりしかひなにぞ、
月は羅馬に巴里の花、
輝るや匂ふやさりんぐに、
さこそは心勇みけめ。

忝さにひれふしも、
わが背の上にひさしきり、
吹くや寃風のはじからで、
すさべる聲はいたつきの、
それとも分かね片時に、
われをなしたり羽抜鳥。

起居もかたき身となりて、
再び歸る古さこの、
窓のれきふしさをの、
長きは人のいのちかな。

望みもこゝに絶えし身の、
かりに存生ふ憂れたさを、
語らん友もなき世にて、
一こそ前にちぬの浦、
月澄む里に歸りにし、
友が心を今更に、
水のづさ深く涙みぞする。
歸らば屍かくこそと、
憚りし昔忘れれば、

やれし袴を解き捨て、
親のなさけに美はしき、
衣はさすがにかけつゝも、
心東にゆきゝして。

思の種を見まゝて、
折焚く筆の煙より、
尙果散なきは若人の、
望みの庭の燈火か。

親のなさけの如何なれば、
かくはわが子に崇らむ、
あしたに道を聴くあらば、
夕の死をば厭はゞと、
聖の教さかしまに、

命のみこそ重んずれ。

此世に要もあらぬ身の、
こく遊けかしき思ひしは、
頑なりし昔にて、
死にし望をいつまでか、
戀ふて我から苦しみの、
沖の最中に漂はむ。

此世をまゝになさんとは、
おほけもなしや我ながら、
我身一つを投げ棄て、
世のなすまゝにまかすとも、
浮きも沈みも定れる、
浮世の意に越えざれば、

しまに見ゆる人の上、
またわが上を見られつゝ、
能を枕に小夜更けて、
昔屋の夢の安かれき。

笑みも翠みもまのあたり、
見聞きし上に餘られば、
心にあらぬ鄙住ひ、
かりに暫く嬉しきや。

我が住む家は富ますとも、
足りし衣食を羨みて、
幸ある君さいふ友の、
媚もさまでは憎からず、
所詮は失せし正徳の、

世を罵りて何かせむ、
つれて流るゝものならば、
賤しき黄金ひた愛でに、
こゝろ黒くずほりすべき。

きのふ妙義に攀ぢ登り、
その石門の數々を、
足にまかせて辿りしが、
駕籠に乗りたる富人の、
眼にうつる岩稜も、

さすがに色を帯ふならば、
富も位も人間の、
厭はんものにあらざらむ。
さすが石木にあらぬ身の、

未だに人は戀はれども、
出雲の神のわが爲に、
結びずかけんえにしこそ、
見まほしからめ密やかに。

親の授くる新妻に、
手をさへ觸れて返すとも、
枯れし柳に春の來て、
咲かさむ花のあらめやは。

軒端に來啼く鶯の、
音こそ濁られ梅が枝は、
此まゝ苔に埋れて、
無心の月の吊ひに、
淡けき影をたもたんか。

二十を多く越さぬ身の、
心は早く老いたりな、
路に捨てたる空蟬の、
もぬけの壳の壽命こそ、
長くもよしや短きも、
心の外の數なれや。

木立ぬ山に鳥も來で、
厨の香ひあらればや、
秀でゝ高き頂きの、
神の宮居に近きにか、
心に衣せし偽りの、
褌がれてまたも鮮かに、
昔こゝろを出したり。

靡く煙の末かけて、
 ほのかに見ゆる上毛の、
 遠の山々雪あかく、
 飲けたる岸のかなたこそ、
 今新しき眺めあれ。

巫峽の水に蜀の山、
 あやしき岩をたてならべ、
 ひさりほゝゑむ友ごちの、
 眠りさまさむ料にさて、
 去年の夏よりたくみしが、
 身に一ひらの紙もなく、
 素懷遂げんと思ひきや。
 百年かけて贖せし、

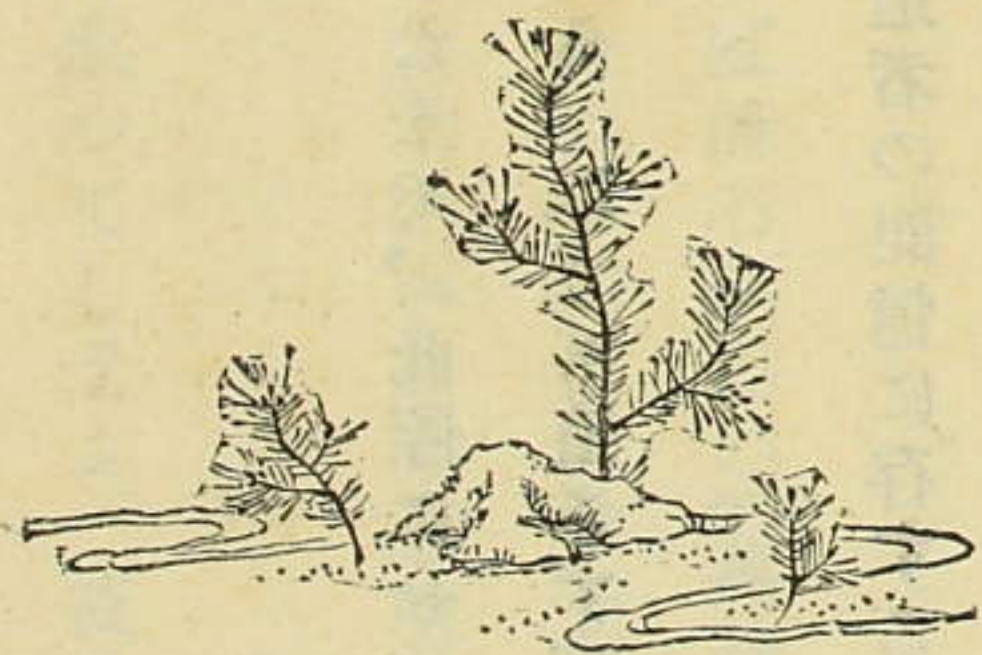
望みの虹の先づ失せて、
 目に見るものは浮雲の、
 過ぎ行く末も暗ければ、
 爰に頼は絶え果て、
 身に賣はらんきづなく、
 捨てなば鯉一つにて。

何さてわれは捨てかれし、
 史に見えたる人々の、
 卑怯を嘲む唇は、
 おのがあるトの耳元に、
 なごでにものを聴かさいる。
 電光石火ありと見て、
 ありやも知れぬ世の中に、

險の前の安きをば、
 何の隙にか偷みにし、
 妻子もあらぬ獨り身の、
 かばかりわれは腑甲斐なく。

思ひぞやらる我邦の、
 こつ邦々此後に、
 事もありなん其折に、
 國を賣るべきしれものは、
 かくいふ我がさあらずか。
 日影のやゝに傾げば、
 吹きこそ起れ越の風、
 うたれて撓む足もさを、
 危くそこにさり止めて、

我に返れば崩れしか、
 崖のかしらは失せ行きて、
 見下す穴は万仞の、
 底へも知れず渦まきつ、
 物狂はしき人間を、
 さくわが口に吸はんぞと思ふ。



鑛脈

(一)

金本位になつて、元の一圓は其まゝ二圓に通用するといふことで、此際にせめて小判の五六十枚もあつたらばと、今更に古人が埋めた養かひの有無を疑ふも、取りも直さず万人の心であらう。

能登國七尾郡に遠山といふ村がある、名物の鹽饅頭が北陸道者の記憶に存するのみならず、並木の茶店で件の饅頭くたんを賞翫する時には、見るともなく前面に驚くべき一構へを發見して、小鳥の巢のやうなこゝら界隈かいわいの民家にのみ慣れたわが眼を新ならしむる筈であるが、其が今はもう『遺跡』といふものになりかゝつて居る。

酷ひたいは其屋敷の荒れやうだ、嚴いひかしかつた土塀がいつの間にか跡方なくなつて、嘗て見越の松となつて居た赤松も、幾十年の不手入に裾枝は残らず枯れて、上の方も疊み付けたやうな宿葉よそはと蜘蛛の巢とにすくめられて、至つて元氣がなく、若枝が自儘なまじの上向なまじに愁なまじつくつた跡

が目について、若し繪かきなどが松の化物といふを書いたらば、丁度其の理想あてに當あてはまりさうな景色で、長家門の家根に満足な瓦がホンの五六枚しかなく、岩蓮華とかいふ怪しい植物が帯のやうになつた茵蔯いんじのあはひに介はさまつてそこに生えて居て、窓と壁の落ちたところと連絡がついて、中に藁屑わらくずと小い枯松葉たばの束たばのあるのを見せて、其影から自在鍵ざいざいが覗のぞいて、櫓はたの烟けむりが細々と立昇つて居る。更に奥を見渡すに、これは又いかな事、さしも嚴いひかしかつた母家おややも離はなれ雲霧と消えて、跡は南瓜の枯蔓と八重葎やまぐさばかり、ズツと向ふに流石切り残しの竹藪が舞臺の書割かきわりのやうに少々ばかり残つて居る。

獸の舎いぐさか人の巢か、殆んど判断がつかぬ右の住居に、覗けば流石無垢の『萬物の靈長』うんたが蠢うごいて居る。誰あらず七尾の長者と言れ、遠山大盡たかと稱たてられた身が、怪しい布子一枚に古手拭ふるしを帯にして、煤すすじみた顔を川口鐵瓶てつびんの時代物の下へさし込で生木のいぶりを吹き付けて、其側わきに五ツばかりの女の子が侍ばんべつて居る。

鹽氣しんきもない粥かゆを一杯づつ啜すつて、子供は晝の疲つかか他愛なく眠ねつてしまふ。夜はやうやう靜しずつて、先の程まで鳴り續けた竹藪の上を通る風の聲こゑさへ斷きれてしまつた。世界に我われ只一人の心

細さに、眠つて居る我子の方へ差寄て、袖をかき合せては見たが、夜寒が次第に身にしみ、殊には万感一時に頭腦へ寄せて、まどろばればこそ。

此時其込入つた感慨の中でも、尤も丈高く抽て見らるゝのは、ツイ今がた戸を鎖やうとして星あかりで目に入つたあの山だ。庚申さまの松の木だけは見えたが、我毎日作業するあの穴は麓だけによう見えて呉れなんだ。ア、考ればどうも、我身の意氣地だけでは此悔恨は抑へきれぬ。

冴えに冴えて恐しく輝き渡つた二ツの眼へ今映るものは、壁でなし、藁でなし、又松葉の束でなし、將た我哀れないとしい娘でもない、それは丁度お寺にある開山さまの御一代記の懸物のやうな………ものだ。

初は彩色も際立つて美事で、我を忘れて見惚れるほどであつたが、どういふものか幕のはりが不思議に劇しく、變るワ、先初から畫面のあらましを言はふなら、第一に自分が十二の年に東京へ出て、二十の年大學へ入つて探鑛冶金學を修めて、其頃學校で抜群の譽があつたといふ事、卒業の一年前親父に死なれて、ツイ學位を得取らずに故山へ歸つたといふ

事、その年相應な妻を迎へたといふ事、子をませたといふ事、大盡の威勢がすばらしかつた事、樂しかつた事、修めた學問を實地に用ゐやうと企て、近所の山を試みに見あるいたといふ事、佐渡の鑛脈が必ず此邊へ連つて居ねばならぬといふ學問上の根據のあることを發見したといふ事、すぐ後の庚申の山が其精を萃めたところらしく目をつけた事、長者議員に選ばれべき筈を切に辭して、只管鑛山計畫にばかりかゝつた事、技師や工夫を澤山集めて愈よ掘つたが三年かゝつて金は愚銅さへも出なかつた事、親類の異見が頗る手厳しかつた事、それを一向用ゐず、どうく妻を奪ひ返された事、それを念とせぬ風を見する爲に藝妓の美しいのを、東京からつれて來た事、それに男があつて少からぬ金をゆすられた事、人の家内に手を出して訴訟に及んだ事、強盜の災難にかゝり、おまけに淫塵子で二年といふもの田の入りあげが皆無であつた事、支配人にいゝやうに掻き廻されて山のやうな財産が煙になつた事、借財の爲に所有の田畑を残らず人手に渡した事、それでも山は止められず、借金をして尙細々とやつて見た事、金は動かず人は來ず殆んど途方にくれ、ツクツク人情を悟つた事、長屋門の詫住居に親子二人で夜具もなく臥るやうになつた事、それでもまだ自信か未練か知れぬものが残つ

て、自分一人の細腕で掘つて掘つて随分掘つて見た事、寒くなるに單衣ひとへの事、折々斷食の事。際限なく廻たまつて見たが、次第に胸悪むねわるなつて来る、是ではいけぬ、もう一度前へ取返してあの楽しい場所を見たいと思ふ、強てさう勵む、僅に門の頂が薄く見える、オ、飼犬が、オオ雇人がもうゝた、弗箱も見えろ、あの千圓の屏風も見えろ、とあせつて居るトタンに小供が心なく咳をする、はつと思ふと同時に、折角つくりかけた其館が音もなく崩れてしまつた。

(11)

滅多に獨語ひとりごとを言つた事のない男が、しかも大聲に『サアけふ一日掘つて出なければ死ぬだ、ヘン死ぬのサ』といひながら、提けて來た手燈てらんづを透すかして見て『油も丁度けふだけだ、成程心細い哩』と詞は可笑しさうだが、其調子のわるさ。

もう三日といふもの飯を喰はぬ、鶴嘴つばしの柄を握る双の掌にも早く瘡を覺ゆる程であるが『へ、けふ一日の生命だ、手足の一本づつ位は折つても結構サ』と一心を腕へ凝り固めて、振り上げまた振下す嘴の先には、いかな奈落の底まで掘り抜かん勢が見えて、烈しく打割る岩の破片かけに膝すねや距あしざらを怪我することも二度や三度ではないが、痛くもなければ又痒くも無い。

掘初めた其時は、丁度蒸氣機關の動き初めるやうに、正しく意志の爲に働かされたのであつたが、もう今は此二本の腕を支配する者が一向行方知れずなつて終しまつた、これを情勢とかいふ由に聞いた。

器械のやうに心なく上下する彼の腕には無論疲勞といふものゝあるべき筈はないが、手燈の油は正直にも次第に嵩を減じ、今しも車くるまのやうに乏しくなり、恰も幽靈の姿を隠すやうにズーツと火影を収めたが、一二度面白くもない瞬をして、ツイ眞黒闇になつてしまつた。

此時初めて今ぶつ付けた鶴嘴のカチリといふ音が耳に入つて、キヨロ／＼あたりを見廻したが、闇の中に見當る者もない儘に、忘れて居た恐しい決心が再び頭腦の中へ戻つて來ると、矢庭にそこへ鶴嘴を投げ棄てて、狼藉たる岩石の上へ打ち倒れ、ア、アといかにも不快げな溜息をした。

(12)

考れば我ながら不覺であつた、子供の始末もせぬ先に穴へ入るといふが第一の誤り、よしんばその誤りはあつたにしろ、それを口實に……あの鞆かたい鞆い自分の決心を齧かして再び此

娑婆へ出て來るといふが一生の誤りだ、臆病神に取付れたとは、爰の事か知れぬ、夫程不覺な人間ではない積りであつたが。

仕方がない、寧ろ此祖先傳來の宅地跡で死んで呉れやう、イヤ待て、死れぬ何かの因縁があればこそ、あれほどの決心がありながら歸つて來た、或はもう一日辛抱して見ろといふ天の教訓かも知れぬ。死後^{しご}れても高が一日の損だ、どうするものか、もう一日掘つて見ろ、精神一到何事か成らざらむだ、ア、此語も今迄幾度繰返して自分で自分への異見の材料にしたか知れぬ、又其爲に幾度死すべき命を拾ひ上げたか知れぬが、ア、よくよく運拙い生れと見える。我子を冥途へ導く辛さ、素知らぬ顔で穴の中へ背負込んだが、子供もかゝる事は幾度もあつたと見え、一里に餘る長い暗がりも平氣であんぶされて居る。

けふの燈は焚火だ、澤山焚いては煙くて困うふといふ慮^{かんが}から、細な鹿朶を少しづつ娘に焚せて例の如く其先を掘つて行たが、どういふものか手が鈍つて、昨日の四半一も働けぬ、これではならぬと氣を取直しても、どうも進まぬ。

三時間ほど掘て見たが、よくよく氣力が盡たと見えて、『もう駄目だ』と言ふが早いか忽ち

そこへ坐り込んで仕まつた。黙つて目を瞑いで一時間あまり恐らく半言もいはずに、娘には自由にクワンな顔をさせて置いたが、何と思つたか、鶴嘴を足で搔寄て、片手で一寸重を引て見たが、忽ち投げ出してまた溜息、暫して目を開くと、いつの間にか一ばいに涙を溜めて、其涙の影から娘の顔をしげくと見て漸く千代やと呼びかけた。

娘を縊つた手拭の兩端はまだ手にからまつて居る、此時彼が腦は半分は過敏に、半分はまた情なく弱り切つて、殺した記憶があるやうな無いやうな、寧ろ残らずを忘れたやうな、曖昧な錯雜な、何とも形容の出來ぬ心の有様である。

これは刹那の出來事だ、何とも言れぬ恐しい響がして、今心付て見れば、我身もいつの間にか三四足こなたへ逃出して居る。今死ぬ身の癖にと自ら冷笑つて振向くと………すぐ目の先に怪い光が………馬鹿な迷とは思ひながら近いて見ると、こは如何に、崩れた断面に現れた金………試に燃さしの枝をさし付けて見るに愈よ間違ひなく金………鑛………の………つ………る………

獄の中で『馬鹿な、よしんば、自分は死ぬにしても、娘まで殺すことは無い、どうにかなるべき筈のものを、エ、氣が違つて居たか』と心付いても、我が殺人犯の罪人たる運命に對して何の益もない。

垣間見

(一)

例へば籠鳥の雲井を翔る心地にて、折から野に咲く糸薄の招くが儘にそらろあるけば、清く匂しき八千草の上風頬を擦りて、暑からぬほどに日は額に射かけたり。

誰人の臥床にやあらむ、頂き缺けたる五輪の塔、菽の繁みの中より見え隠れして、其塚を一めぐりすれば、向ふは一筋の野良道、チヨ／＼と鳴く鵜の一群を前に立て、蒲だらけな小溝をヒヨツと越え、そこは早や人里なれば、此時口笛の音をいさゝか小さくしたり。

山水のみ描けばとて、友はわれに『山の精』てふ渾名を負はせて、譽むるにも毀るにも、とりわけ吾より手痛き批評を受たる折に、その防ぎ矢はいつもこれなり。吾に其長を勗むるの信と、其分に安んずるの節はあるものから、流石また口惜しからぬにあらぬば、ゆめ／＼當世流行のひねくれもの作らん心にあらず、只かの渾名の區域も少し押し擴げんだけの願にて、けふの寫生はかまへて草木に目は呉れまじく、外に何がなあれかしと念じて、先づさしあたり此一群の藁屋が中に獲物あさらむ志なり。

長く短く形姿自然な榛の木立ちし田の畔をあちこちあるきて、やう／＼に村の入口は見付りたり。コツソリと鉛筆取り出して寫生帳の下に取り添へ、其時恰も樹珊瑚の籬の影に鞠つく歌の聞えて、紅き帯などのチラ／＼覗きたれば、御參なれど横へ廻りて、よき形もど見てあるほどに、小供は逸早く見付けて、初は猫を認めし金糸鳥のやうな目付に立揃ひたりしが様子を知りて、キマリ悪げに去りて仕舞ひぬ。

形見せしは愚なりきと悔ても詮なければ、可惜一枚を磨り物として、ツマラなくこゝを立出で、それより生垣ある家を三四軒見てあるけど、ていたらく事の外嚴うて立入るべくもあ

らず。ツク／＼と金出さずモデル求むる困難を嘆きて、餘り勇氣のある方ならずは、尙も其向へ往いて見たり。忽ちこゝに人家斷れて、風に傷みし荷葉の狼藉たるを右と左に、田ならば七八枚ほど見、それより爪先上りに、林といふほどにはあらぬ檜の中を行くに、朗かなる矮雞の聲、道は竹藪の中を廻りて、どうやらこゝは背戸らしし。

無作法なれど、かゝる折の言譯は中々に慣れてあれば、下圖鉛筆の尖ほども臆する心はなく、足音さへ低くはせず、ノサク／＼とツイ物置小屋の此方まで進み近きしが、裏椽のほとりに人のさゝやく聲す。それを立隠す櫻桃の株を避けて傍より覗けば、ことに片足かけたる男、年頃は二十七八、淺黒にて鼻隆く、苦味ある顔付、打扮は紺半被に同じ色の股引、此時眼色少々耀いて、然し餘り酷いぢやねえか、と言ふ。ナニが酷い、と問ひ返すは、百姓向かぬ櫛卷天窓、愛嬌毛フツサリ下げて、唐棧の半天裾長く、身に餘りて、屈み姿の前危く、綿のやうな兩足の指先揃へて椽の外れをシカと抑へり、人を見るに目口の吟味仔細にせねば心濟まぬ我が習慣は、並ならぬ睫毛の長け一番に嬉しく、紅梅の蕾かと思はる其口元に魂心外にゆらぎて、一言御免と云へば、心易くそこを通らるべきに、いつまでといふ限りもなく、其儘そこに立つくす。

に立つくす。

ナニが酷い、お前にも似合ねえ、今更そんなことを言つたッて初まらねえワナ、考へても御覽、全體レコ(拇指を見せて)を片付るッて言ひ出した者はね前ぢやねえか、其時分にヤア、おれだッても夫婦の情てえものもあるし、些とヤ少とは可哀さうなやうな氣がしなかつたぢやアねえが、段々お前に言はれて見ると、成程可哀さうは可哀さうだが、今そんな事を言つてる場合ぢやアねえと思つて此間漸ッてさういふ了見になつたばかりサ、其通り私を仕込んで置きながら、今になつて廢さうとは、お前もまア何といふ魂性骨の弱い男だらう。イ、ヨ、お前が厭なら、どうせ手を下すものは元から私と極つてるから、私が一存でヤツつけるがネ、しかしイザといふ時にヤア私しを教唆とやらしたものはお前だから、それだけはよッく覺えてお出で。

まアサ、さう荒立てるにヤア及ばねえ、何もおれだッて今更廢すといふ了見もねえのだ。たゞ……………

いゝヨ廢す了見もねえものに、どうしてまた可哀さうだノ、酷い事だのッて、男らしくも

ねえ弱音が吹けるんだヨ、糞面白くもねえ、人を丸で馬鹿にし切つて。

オイお貞さん、全體お前は怒つて聴くからいけねえや、あれだつて悪の方ぢやア憚ツちながら梵字の吉だ、男だけにまだお前に負ける了見はねえノサ。成程可哀さうだと言ひは言つたが、それはそのチョツピリ味を付けたままで、ヤツつける覺悟だけは、もう愈よ確かりしてゐるんだから、まアさう案じなさんな、ソレこれだ、

といひながら、袂を探つて何やら薬めきたる一包を取出し、

どうだ、こいつをチョイとやらかすと、直に安樂世界になつて、目出度くかしく、恐惶謹言てゝものになるんだ、昨夜讀んだ小説に、『神ならぬ身のかくとは知らず』何とやらあつたが、先そこいらだらう。

オヤこれがその何だ子。

女は怖々と受取りて顔色初に似ず、そを見て取りたる男は透さず冷笑を呉れて、
だいぶ蒼くなつたナ、度胸がよくつても、女の身の是非もなくといふ寸法か子。

へ、と、これもまた冷笑つて、細工は流々仕上の事サ、お前のやうな氣の弱い虫けらジャア

ねえワナ、しかし子………：チョイと、

といひつゝ、またさし寄つて何やら霎時ささやきしが、男は頻りに點頭きて、これも折々何をかいへど、低ければ吾には聞えず。

ヂヤアよしか、間違へちややいけねいぜ、ドレ宿六の歸らねえうちに行くとしやう、ハイ左様なら随分御機嫌よく氣取られねえやうにヨ。

(一)

納屋のうしろに吾ありと知らず、男はいそ／＼歸り行きたり、吾は暫くそれを見送りてありしが、まだ心残つて、其儘は去らず女はと、再び此方を窺ふに、姿は元のまゝにて、何やら思に沈むさまなり、彼の小さき紙包を掌に載せて。

遽然物音、表の障子の開きたるらし。女はビクとして、思はず一ぱいに目を睜りしが、忽ち包を袖口に込らせて、静々立上る其頃は、早くも頬に一點の紅は浮びて、嬌やかなること辨財天の如し。

(二)

怪しく忘れ難きは彼女が侘なり。時は瞬く間なりしが、ウツとりせる場を驚かされて、我知らず取外せし柔和の假面、見所はたゞ目一つなれど、渾身の毒の一時に映り出し其光り、否たゞ光りのみならば、動物園の狼を苛しても事足るべし、説くに説かれぬ相恰は、げに靈の表現の微妙なる所なるべきにや、いざこの烙印を其まゝ絹にして呉れんと、其後幾日か武者震ひ由々しかりしが、我が美術學校の文庫にラフハエルの『信仰』ルーベンスの『狂舞』ミケラソジローの『噴嚏』を初めとして、名家真蹟の寫眞さては縮圖、くさくさの好粉本ありて、世の常の奇相は考を資るに事缺かねど、我が見し女の眼ほど六づかしきは如何に涉獵れど見えせざりき。こゝが有難し、便るものなき困難はさることなれど、前聖もまだ筆つけぬところ、思へば吾はよきもの得つ。

(四)

十月に餘る經營慘憺をチラと仰ぎしばかりに、太平樂な批評する新聞記者達の忝さよ、さりながら、毀にまれ譽にまれ、あれまでの論議は我繪もさまで輕んぜられぬしかやと聽えて、苦さが中にも、どうやら快きものがあるらしき我がさまなり。

暫く會場へ行かねば、今日とはとて、午少し過る頃谷中の假舎を飛出して、冬空は別けても寂しき大墓地を獨り行くに、出口の茶店より檜南天など投げ入れたる阿伽桶提げて、出合がしらに顔見合せたるは南無明王、けふのけふまで忘るゝ閑もなく、嘗ては我に不眠の病さへ授けたる、あの目の持主、墓參と見るより、ゾツとして、身は王祥の池を借りて裸で寝ねしほど寒く、皇天后土、我が義に勇まざるを宥させ給へ、彼等がやがて賜るべき天網の端を手にする者、天が下にたゞ一人の吾にはあれど、美に奉ずる身の密告沙汰、これ心弱き吾の忍び得るところに候はず。

貧書生

翌は日曜とて、工場も休みなるに、此世に只一人の友の、久しく兵營の裡に籠鳥となりたるが、日ならず南征の軍に従ふべきよしにて、朝まだきより、我が此の詫住居に永別の觴をあげんとて、きのふ通じ越しを待つこと嬉しや。

あたら友との歡會に高樓美酒を呼ぶの豪興は、我が此の今の境遇に、かけても及ばぬ願ながら、せめては淡きこと水の如くとも、いかで我が力に求めたる一盞を願ち仰ぎて、彼が武運を祈らばやと、思は根津の小川の一條に切なりしが、四時不變の貧寒に、かてゝ加へて、此の月末は不時の入用五十錢あまり放ちやりて後、工場より貰ふべき若干すら、尙三日の向ふならでは手に入り難く、茲に懷は缺錢一文返らで、あれまで懇意なる青物屋の嗅京菜一株溢らずにはよこさず、マツチの空箱を朝ごと涼爐の前にあけて見て、詮方なさに寺の臺所に鍋が顔色を犯しつゝ、火種を貰ふ始末、こゝで希望と實行との繋ぎ目をフツ、リ切り放ち得れば格別、さもなくば折角これだけの目論見も徒これだけにて見すゝ掻消してしまふの他なしとは、ツク／＼情なき事どもと、兎や角思案の末の末に、エ、儘よ、何か一つばらして吳ろと、胸どの相談こゝに一先づ落着はせしものゝ、見廻すところ、それでも由緒は紺らしど、いつや隣りのかみさんが鑑定せし飛白の單衣一枚、古色蒼然、ほとんど茶具めきたる天竺木綿の兵見帯一筋、衣類といふては此外に揮一本身にえつけず、外に蒲團一枚、流石第一番の金目なれど、工場の細君が聞えし慈善家にて、無料で貸て呉れし恩義、それに背き

がたし。土鍋桶鉢それ／＼主あり。ハテどうしたものぞ押入を掻き廻せど、新聞紙の破ればかり、愈よ最後に取り上げしは、スケッチブックの翻刻本にデスク一冊、これ失くしては我から希望といふものゝ梢をへし折るも同様、先づ／＼賣らぬことゝ、其まゝ片寄せ、腕組、溜息、誠に詮方なき體なりしが、さりどて友をたゞ歸し、向ふは修羅の巷、それが運悪く忌はしき事でもあらうものなら、一世の心残り也。よし本は又買へる機會もあれ、友が鹿島立はこれ一度ぢやものど、英斷我ながら見事にして、其儘抱いて立出しが、寺の門前にて何となく足とまりて、我にもあらず遅疑、さながら芝居の花道のとつあいつ、夏は寂しき團子坂の夜風今宵は涼しとも思はず、やがて森川町の本屋が許に着きけり。

一バイに頂いて三十五錢で御坐います、スケッチの和本は誤植が多う御坐いましたと冷やか過し面憎さ、三十五錢、待てよ、麥酒が二十二錢かな、残つてざつと十三錢、牛といつても何ほども買へぬテ、では酒は日本酒にしてかな、待て待て、日本酒は嫌だと言ふ不自由な男サ、さては牛を豚に鞍替かな、豚では下卑るが、チャン／＼征伐の首途だによつて、趣向と見せて苦しいところを胡魔化すかナと、店先に腰うちかけて、思案かた／＼直段を押合ふ

ところへ、巻煙草のかをりブンとさせて、店先に立止り頻りと、古本をいぢり返す男ありしが、それに背を見せ居し我の、え、仕方がない、賣らうと叫ぶを、突然うしろより、ヤツ、宮崎、うまいことをやりをるな、といひかけしは、飛んだ悪機會、義理の悪いことをして置きし橋口といふ男にて、銅貨摺むを合圖に、宮崎ちよいと來いと、うぢ／＼する我を急ぎ立て、表に出るや否や、返せ返せ、え、からそれだけ返せといふに。

○なんと詫びても聽かばこそ、現在それそこにありながら返さぬとは、おのれどこまでづう／＼しいかと、大道の眞直中まっただなかにわめき立てて、遂々奪ひとり、後あともよこさにや宥さんぞと念さへ押す。

掌中の珠といへど、それさへ別段の目的なくんば、失ひしは單に珠だけなり。然るに我が今宵調達のマニ／＼たる、血の出るやうな才覺なれど、それは患ふるに足らず、千里遠征の友を送るに、窮すれども流石まだ乞丐とまで零落れねば、無理な工面はしてながらも、一杯の祝酒に、數ならぬと男をつくりたき大事の希望、それを根こそぎ奪ひ去られて、口惜くはあり、腹立しくはあり、友との會合は待つたなしの翌一日、え、金さへあらばと、蹉跎あしせりしての

煩悶、それもやがてぐたりして、悄々然と歸る途は高等學校の横手、何やら知らず下駄に突かけ、星あかりに取上げ見れば、こはそも如何に、女持の紙入、立派なものなり。

淺間しや我は人道の軌を外しぬ。所詮は黑夜壁を穿つ狗盜と擇ぶところなし、あゝ渴しても盜泉の水を飲まずとは、誰しも罪犯さぬ前の抱負ならずや、自ら高しと許す今までの輕卒、たゞし拾ひ物を猫ば／＼にするほどの下司根性とは、我も流石に夢想せざりしぞ。

麥酒三壘、ロース一斤、これ夢ならず、これ幻ならず、正しく我が目前に並び存す、視ざらんと欲して眼は閉づれども、生憎に腦の印象の鮮やか過ぎたり、今更悔いて届け出でんと思へど、費消の痕は癒やすに由なし、懣なまじひ性來の瘡我慢に、つくらでも足るべき男をつくらんとして、却つて根底から男を靡すたらせし事、これが常識あるもの、所業かと、涙に咽ぶばかりに憤りて、覺悟は自首に、酒も肉も庭上へたゞき付けんとする折柄、兵隊靴のゴツ／＼音して、早や入來りし友の笑顔も、けふは中々嬉しからず。

ヨ、麥酒に牛か、大した御馳走だね、奇めづらしく工面がいゝと見える、その工面のいゝとこ

ろへ、難有迷惑か知れぬが、使ひ残りをこれだけ使つて呉れ、ナニ澤山ぢやないさと、富家の息子の、さながら石コロを捨てる如く、向から賤別を置いて行かうと云ふ。多謝、好友、我が心の上の縲紲も頼りて忽ち解けたれば、いざ大白浮べて汝が目出度き首途を祝はん。

『鐘脈』『垣間見』『貧書生』の三篇は嘗て『萬朝報』に掲げたるも

の、今同社の認諾を経て轉載することを得たり、謹むで之を謝す。

山 百 合

餓ゑたる口には食を撰ばず、漫遊に時節などなき者と廣言を吐き散らして、この暑さに酔狂も程がある、霍亂でも患てはと母の諫言を聞き流し、ブラリと出掛けたるは秩父の山中。都育ちの先生ならば、山青く水清くなど、無性に賞むべけれど、信州の山奥に猿の如く育ちし吾れ、箱庭のやうな山川一向に面白からず、これではいつそ平地の方が優しだつたと爪弾し、踵を廻らして向ふは東京の方。飯能といふ所に一泊してどうだ姐さん、此邊はいつま

で行つても小山ばかりで些とも面白くないが、それでも見ていゝやうな所があるか子、と聞けば、給仕め赤頬膨らして、面白くないッて仕方がありません、ハイ御座いませんと取合はず。ハ、ア國を悪く言はれて腹を立てたか、可愛き奴と點頭きて、玉川といふ所は中々景色がいゝと言ふことだが、こゝから何里ほどある子。

玉川で御座いますか、中々よい所で御座いますヨ、上水ツて水を引いて、東京のものはそれを飲むのでムいます、これから鮎が取れました子。マアそれでいゝから何里か教へてお呉れ。エー青梅へ四里ですから、上水迄は一寸五里御座いませう。ア、ソウ、翌は暑くならんうちに掛るから其積りに頼むヨ。

平生朝寝坊の吾れ、旅には起さず、呉れる母なければ、グツスリと寝込みて夜の明るも窓の障子へお日さまの御來訪も一向に知らざりしが、やがて隣室に膳椀の響き聞ゆるに驚き、ムツクリ匆ね起れば日は早や高し、流石に人を叱る譯にも行かず、手ばしこく飯を仕舞ひ、宿より無心したる草鞋の紐の長さに焦れ込みて、番頭に、お静かに入らッしやい、を笑ひながらに言はれ、業を沸して立出れば、夜前の下婢、オヤ貴方玉川はそツちヂヤア御座いませんよ。

これはと額を叩いて路を教はり、此度は落付拂つて立出しが、少時くして面前に大山の立塞るを見る。また山かど舌打鳴らして進むうちに、路は岐れて二つとなりぬ、いづれが本道ぞと、ためつ透しつすれど、生憎あたりに入なく、人家離れし畑の中、また如何ともなし難し。

思案に呉るゝ折りから、鶏の聲の遠からぬ所に聞ゆるに、さては人家ありけりと、喜びて伸び上れば、今迄心付かざりしが、少し離れて、松杉の大木一叢繁りて立てるあり、たしかにかしこなめりと點頭きて、畑の中を横切り進むに、意外に近く出でたり。芝土手高く築きて、孟宗竹の幹太く黄ばみたるが五六株竹垣の外に立ち、正面はだら／＼のぼり、餘りに奥まりて母家は薨も見えぬと、大きやかなる長家門眞白に輝きて、鶏の五六番此のあたりに遊べり、大方何とか渾名つく此村にての大盡の家なるべし。

進み入りて路問はんかと思ひしかど、先きつ日秩父には風舂悪しとて、巡査に咎められたる事、不圖胸に浮び、心臆して、霎時ためらひ居たるに、忽ち足音して、人の立出るけはひ、ハツと退りて上手の影にありしに、やがて顯はれ出たるは一人の乙女、手拭ま深に被りたれ

ど、襟元の白きは蔽はれず、紐もて肩より腋にかけたるは、摘桑の籠、飛白の單衣が鮮やかなるにても、卑しき下婢はしたづれにはよもあらじ。こゝに人ありと心付かずや、背其まゝ見せて、彼方へ歩みさるに、心また急きて、矢庭に走り寄り、帽を脱して慇懃に、少々ものを承はりたう御座いますと呼びかくれば、忽ち振り向きしが、いたく驚ける目付なり、心なしの吾れ、透さず斬り込み、青梅の方へ參るにはどう行きませうかと言へば、忙たしく手拭脱ぎ棄て、さきのケマンな顔遽に笑みて、此先の岐れから、右へお這りなさいませと教へ呉れし其聲は、聞き飽きし機織歌の姦きたぐひにあらす。如何なる咽かやと此時初めて面をよく見つ。年はまだ二八をよも多くは越さじ、酷らしくもかく日に當つるにさても色の白まよ、われに女術おひんの眼なくとも百中に十とあるまじき姿とぞ見る。眼鼻の形容は管々し、總じてくねらず、またあどけなき美しくしさに、時としては泥の如くも濁りかねまじき吾が心も、泉のやうに清く澄みぬ。

山までは造作もムいませんが、嶺がくどうムいます、廣い道廣い道とお出でなさいませと、丁寧ていねいに教へ呉るゝ深切さ。

禮を言ひて八九間先きに立ちて歩みしが、自から何の心とも知らず願れば、乙女も嫣然として此方を見てあり。やがて二三町を過ぎて道は曲りぬ、また願れば、あな憎や、くねりし路に、兩側の桑樹枝伸び繁りて影さへ見えず。

高低遽に急になり、杉檜立籠めて小暗き嶺にさしかりぬ。道さまで廣からざれど、路の小草踏み蹂られて馬の蹄跡少なからず、これならば迷ふ事はあらじと、悠々と登り行きしが、一二町にて廻らしき所に出でたり、行手を見渡せば、道うねくとしていかにもまはり遠げなるに、回める林の中を縫ひて一文字に捷路ちかみちと覺しき徑あり。これ行かざれば悔ゆることあらむと何の思慮もなく進み行きしに、思ひしに似て路や、反れたり。されど言はくこれ頓挫なるべし、やがてぞ出づべきと膽太く持ちて行くこと六七町。

行けどもく、大路に出でばこそ。

尙根氣よく行きしに、又一つの岐路ひたみちあり。斜めに本道の方角を指せり、これ行かば出でぬことやあると、また踏み込むに、霎時にて木立離れ、小さき雜木の間に出でぬ。躑躅萩などの古株、彼方此方と亂れ立ちて、薄また繁く生えるに、路は次第に細まりて、ともすれば見失

はんばかり、辛くもたどりて行く程に、アチ慘はし、路は遂に絶えたり。

困りに困りて、あたりきよろしく見廻すところ、歩まば十か十一にて到り着かんと見らるゝ所に、草も木も一段、段を成したる所あり、たしかに路ならんといと嬉しく、二足半ほどに駆け上るに、これはまた何事、路にはあらざりけり。

失策に失策を重ねて、自分ながら腹立たしくなりて、痛くもなくば散々に撲り倒さんものと憤りしこそ笑止なれ。戻らんにも後へ小一里、疲れ足に容易なことにあらずと、萎れかへッて空打仰ぐに、早や夕立を催すや、西の方より湧立ち来る灰黒の雲、日は蔽はれて檜の下影いや暗きに心細くなり、不憫や吾が兩腋は冷やかなり。

かゝる折柄にも、殊勝に『急がば廻れ瀬田の長橋』てふ歌など思ひ起して、思案に呉るゝ折柄、不圖目に入りたるものこそあれ、あたりは熊笹いたく繁りて腰より下は見えぬと、夏帽子冠りし人一人、向ふの谷に見付たり。

ムツクと立上り、聲を上げて呼びかけんとせしが、遽に心付きしは、あの藪の中にあの様、恠しやいかにも恠し。

眼放たで眺め入るに、不思議や行きもやらす、ひたすらに峯の方のみ見上げてあり、吾れど全じく路に迷ひ、行くべき道を尋ねるにやなど思ふうち、こは如何に遽に帽子脱ぎ棄て、打振りぬ、やがて片手もまた高くさし上げて、何事か合圖するさまなり。

對手は何奴と巖の方見上ぐるに、生憎彼方の岨斜めに這出でたるに、かて、加へて小松彫しく繁りて空さへ見えず。

忽ち帽振るを止めしが、此度は何故か數回頭をうち掉り、やがてまた頻りに點頭くが如し。

怪しからぬことをするもの哉、さては緑林白浪の黨か、將た普通の旅人なるか、万一盜賊などの潛み匿るゝものならんには上なく面白からん、かく思ひて吾が身の苦痛はいつか忘れたり。

再び帽子を戴きしが、熊笹押分け押し分け上り行くさまなり、此時吾は夢中になりて驅け出しが、熊笹の丈け次第に長くなるや、肩隠れ、頸隠れ、やがて忽ち帽隠れて、遂に見えなくなりぬ。

雲時は爪立ちて彼方を眺め入りしが、再び出でず、要なき事に心を費やしけりと省みれば、吾が身は未だ安からず、日は見えざれど早や十二時を過ぎつらむ、腹は減り初めたるに、かく期さねば握り飯の用意なし、こは愚圖々々すべき時にあらず、さるにても下らんか上らんか、戻るは嫌なり、上らん外はなし、此山高が知れたり、一足に踏み越えて山國生れの足のほどこの山神に見せ奉らむと、思案此に初めて決して、心やうやく壯にかへり、藪も茨も、木も草も、容赦なく踏み倒し、自から路を作りて上りに上りぬ。

五六町が程真ツ直に上りけるが、幸ひ道に出くはしたり。山賤やまがたが往來か、彼方に曲り、此方にくねり、短氣の心底嬉しからねど、先きの失敗に懲々して、先づ〱地獄で佛様の御聲を聞き付けたるほどに喜びたり。

此道も近き頃人の通りけるにや、斜めにさし出たる山百合の葩、新たに挫けたるあり。益々行くほどに、とある藪影に生新らしき手拭の落ちてあり、何の心もなく取上げ見れば、白地に焦げ茶もて向梅と、淺黄に篆書の福の字を染抜けり、どこでか見たやうなと思ひしが俄かに浮ばず。

また見付けに来るだらうと、殊更に道の真中にさし出し、其が上に小石一ツ載せて、顧みつゝ、我れから吾が深切を喜べり。

折りから藪鶯の聲峯の方に聞ゆるに、打仰げば、彼方に一ト叢立てる小松ありて、そこは少しく平かなり、草刈童の休み場か、聊か息つかんと急ぎて近くさしかゝるに、

俄然としてどや／＼と走り出る人の足音、流石の吾も意外なれば、ギョツとして思はず一歩退りしが、兎角の思慮もなく洋杖とり直して飛び込みぬ。

走る足音、友摺る草の聲、早や遠く彼方に聞ゆ、されど何者とも分かねば追ふべき限りにあらず。

人あり、木の間に倒れてあり。

さてこそと踵を返しつ、頬を打つ松が枝ビシヤリと折つて後ろに投げ棄て、覗き見てまた吃驚。

結ひ立ての銀杏返しも、今はおどろに亂れて顔は定かならねど、覺ある帯衣服。

いかでか猶豫すべき、轉ぶが如く驅け寄りて、扶け起せば、口には猿轡、手早く外しなが

ら、言葉はしどろ、ナ、ナンとして。

這ひ亂れたる帯取上げて渡さんとすれど、そを受取らん勢なく、悲しげに見上げたる顔のけしき、艶けき瞳曇り果て、色なく、泣き盡くしたる涙の跡か、小草の露の深きも哀れ、されど花は危く散らず、玉は今に全きこそ嬉しけれ、やがて乙女は襟かき合せて額づきぬ、無言に。

あたりは落散る夏帳あり、麥藁製の鏝廣にして、正面には眞鍮製の工の字あり、見覺あるもむべ、過る日川越街道に道つくる土工夫に見たりき。

*

*

*

*

*

彼とは麓にて別れしが、其夜は遂にまた飯能に泊し、翌また嶺を越えたれど、けふは迷はず、玉川の風景を一覽し、八王子より峽中に出で、そここの名勝古跡に杖をとめ、手扣ふくやかに、日を経て東京に出でしが、不案内なれば停車場近きに宿とりぬ。

宿は小奇麗なり、田舎者を侮らず、万端深切に世話し呉れしを嬉しき、まだ早かりければ、同宿の上州とやらの人に勧められて、淺草に行き、夕馬車にて歸りしが、宿には瓦斯燈てふもの閃めきてあり。お早う御座いましたと言ふ下女の聲、どうやら覺ありて顧しに、亭主に

何事か問かくる後姿よく似たり。

されど究めずして二階に上りぬ、觀世物の評判盛んなり、ソレあの玉乗をやつたんが、この御亭主殿に似て御座ると、相客が大きな聲に遠慮なく言ふ折りから、下婢膳を運ぶ。

話しに身が入りて、知らざりしが、御飯をお上りなさいませと言はれて、振り向けば、洋燈の心捻るとて、膝立て、顔さし出したる、と見、かう見、愈々それよ、今更に驚けり。

相客に憚りて一言もせず、彼は如何にと窺ふに、これも折り、秋波——といふては不都合なり、折、吾が顔を竊み見る。

夕飯濟むや否や、相客は芳原へと行きぬ、吾れも誘はれたれど、辭して人を待つ折柄、汲み立ての水コップに入れて捧げ來りぬ。

盆前にさし置きて跡に退り、頭を垂れて一言、先日は、と言ひぬ。面上ぐるを見るに、眼には早や涙、羨れに羨れて哀れいと深し、跡は言ひ得ぬなり。

如何にしてこゝには來給ひしと問へば、やゝありて、涙と共にかく告げぬ。妾家に歸りて、彼の事落もなく父上母上に物語りしが、憎や草刈童の誰彼、妾が勾引さるゝを見たりとて、

人に告げたるに、話しいたくひろがり、清水大盡が娘こそ、鐵道工夫に汚されたれど、傳へて近村までの噂となりしに、父上いたく惱み給ひ、ある夜妾をほとりに呼びて、先きにわれに告げしは偽りならむ、されば包まず告げてよと仰せ給ひたれど、神かけて左る事は侍らずと答へまつりしが、父上の御氣色は日に悪しくなり行くに、母上も亦涙に暮れたまはぬ日とてなく、それさへあるに、噂は高きが上に更にまた高く、果は妾が耳にも入る程なるに、そら事ながら面目なく、家を抜けて參りしなり。一時は縊りて死なんと、抱帯を橋に投げたることも侍りしが、不孝の上の不孝ぞと自から戒めて、惜しからぬ命を存生へて、かくは卑しきみづしめとなり下りぬ。其のかみ、竊かに父上に文を奉りたれど、御答もなし、妾が心のうち汲み給ひてよ。他人は更なり、父上母上までかくの如きが中に、まことを知るはたゞ君のみ、再會は期しがだしと思ひ侍りしに、かく逢ひ奉るは偏に神の御力ならむ。

語りては咽び言ひては泣く。

語り果て、袖に涙を拭ひつゝ、さて吾を仰ぎ見しが、またさしうつむきつ、聲いと微かに、君が前にありてのみ、妾は清き乙女。

既にして彼が朋輩の呼ぶ聲す。覺束なくも應へつゝ、立上らんとしてまた吾を見上げぬ。珠の如き明眸露を含みて稍々輝き温かり、双頬けしきばかり瘖せて、愁に閉ぢたる眉の上に、後れ毛バラリと二三本、吾れもど鐵にあらざ、又石にあらざ。

流水無情

かくて余は遂に叔父上が家に厄介になることと定まりぬ。叔父が家へは道程十里も隔たり、しかも山家のことなれば、今迄互の往來甚だ稀にて、叔父上は此五六年來給ひしことなく、叔母上は去歳の盆のまゝ、余もこれにて漸く三度、母上の如きはまだ一たびも行きたまひしことなし。

叔母上は余が母上には妹にて在せり、母上は外には絶えて同胞といふものなくて在せしかば、さてこそ叔母上は彼の親族會議の中にも、先つて余を引取らんと宣ひたれ。

叔母上の發言には誰かまた異議を鳴らすべき、皆々一様に、御迷惑ながら、何分、どの様

抄なり。叔母上は喜び給ひて、録三よ、かく事は極りたり、厭いとかも知れぬど一たびは先づわが方へ來れよと宣ひぬ。余は謹みて親族の人々に厚意を謝し、更に叔母上へ偏に行末を頼み上ぐるよしを答へしが、かくて母上は余を一室に招きて、さまざま、向後の心得を言合め給ふ。汝にしてよからぬ振舞あらば、叔母は如何に心苦しくやあらむ、たゞさへ彼の酷たらしき叔父なれば、既に充分の氣兼ねるに、されば何よりこゝに氣を配りて、かりにも叔母をな惱ませそ、他人との交際にも慎しみを第一にせよ、従弟同士の心安さに喧嘩せば、風波は愈々多かるべし、如何に心安くとも、いはば彼の家の人々は暫く汝が主人なるを、思ひ悔りて悔をのこされな、別けて言ひたきは、汝がいつもの夜深しと朝寝なり、叔父は書を讀むを喜ぶ人にあらで、寧ろ油の費えんことを厭ふ人なり、よしや好なる道なりとも、書を絶ちて早起するを心がけよと宣ふ。折りから父上の呼びたまふに、母上は立上りたまひぬ。

其夜は心ばかりの宴して、あくる日はまだきに叔母に誘れて家を辭しぬ。今更に睫にかゝる時雨なり、拭ひながらにツと見返れば、母上もまた顔曇らして見え給ふ。父上兄上また愁然として在し、たゞ平氣なるは例の兄嫁なり、如何しても余の有りがたからぬ人なり。

六七里車にて行きつ、それよりは山路崎嶇なれば、下り立ち、叔母上を扶け參らせて歩みぬ。かゝる所に住たまふ故にや、思の外叔母上健脚にて在せり。やがて到り着きぬれば、叔母上は先づ入つて下婢に何事か言ひ含め、顧みていざ上れかしと宣ふ。端居る間もなく、奥の方よりばた／＼とはげしき足音して、走り出たるは欣二といふ十ばかりの従弟なりしが、ヤアといふを挨拶に、早や背にすがりて甘ゆ。後より従妹の來りしが、余が方をちらと見て、何故かまた彼方に退きぬ。其うち叔父は出で來りぬ、いつものいかめしき顔付に、にづともせず、流石によくこそ來つれと宣ひたり。余は胸轟きて挨拶しどろなりき。

やがて奥に導かれて、到着早々、叔父が例の説教を謹聽するうち、次の間には叔母が衣を更ふる氣はいす。其うち、これは餘りになめならずや、他ならぬ録三なるに何事ぞ、と、たしなむ如き聲す。次で何事か訴ふる如き乙女の聲、これは従妹にあらで誰ぞや。

叔母上の座敷に出でたまふとき、従妹も出でともなき風情にて入り來り、無言に余に一禮しぬ。余は憚りもなく、お静嬢、これより御厄介になるべし、と大音に言放ちて、心竊に、先きに叔父に對しての失策を見事回復したる積りにて申さば得々たりしが。従妹は始終あづ

／＼と、頭を擡ぐるや、透さず顔を背けたり。されどこの一刹那に、疾くも紅の如き顔色を見てとりき。余は腹の中にて、女といふものは、かうも臆病なものかと笑ひぬ。

霎時して、従妹は逃ぐるが如く出で行きぬ、其後はたゞ叔母に呼び立てられ、茶菓子を出して來れるのみ。無論直ぐに去れり。

南面の一室を余に授けられたり。されど此室には寢起の外用はなきなり、机もなく、硯もなく、且は第一の好物たる書物なきこそ悲しけれ。やがて古机と硯箱とを叔母より授けられ、五六日の後太閤記を借りたり、されど讀まんとせざりき。母上に戒められたれば、夜は九時を限りに寝ぬ、朝は薄暗きより起き出で、下婢に水汲むでやるまでの働さぶり、案の如く人は喜びたり、叔父第一に機嫌よく、叔母上も嬉しげなり、下婢の勝さへ余を心の底より敬ふ如きさまの笑止や。

日毎に鋤をかたげて野に耕しぬ。小心翼翼たる今日の余は、雇夫共に對しても殊の外慇懃なりしかば、彼等もまた余を邪魔物にせず、余の慣れぬ業は深切に教へ呉れたりしが、果は休憩の折りの馬鹿話しにまで余を仲間とせんと試めり、身分が身分とて口先のみだらさ。

ある時、彼等は余に向ひて、御婚禮は何時あるにや、と戯談交りに聞きたり。余は奇怪なことをいふものかと思ひて、何事と問ひ返せば、彼等は顔見合せて、たゞ笑ふのみなり。夕飯済みて後、雇夫等は草鞋をつくり、繩を糾ふ。獨り余のみは從弟を燈下に招きて復讀を促すこと、これ毎夜の課業なり。余は心の痒焦を抑へて飽くまで深切に教へてやりしかば、從弟は余に懷きて、二なく思ふが如し。今迄邪慳なる兄嫁にいちられて快々たりし余が、今此の愛らしき弟を得て、心晴れ渡り、さしも痼疾の忌々しき厭世の念跡なく消えぬ。それにはひきかへて、從妹は何故か余と親しまず、余もまた強て親まんとせず、互に他所々々しく打過ぎぬ。されど稀には悪口をいひて怒らせつ、夜臥床に入りて、密かに母が戒を想ひ起すことありき。

秋になりぬ。山根の畑には木綿泡を吹きて、さながら白雲の搖曳するが如し。下男下婢も、余も從弟も綿摘に出でぬ、從妹もまた出でたり。持ちたる籠に幾杯摘みしと、かたみに競争する稚なさ。余と從弟とは一ツ籠を擁して、故意に從妹を手ぬるしと罵りぬ、從妹も腹よりか、但しは表のみか、いたく腹立ちてめづらしくも抗辯せり。そのうち余は從弟を犬の如く

けしかけしれば、惴りし從弟は矢庭に姉に躍りかゝり、むしり狂へり。かくて姉弟の戦闘は餘りに劇しくなりければ、余も今は見兼ねて、從弟をたしなめ、兼ねて從妹に詫びぬ。詫びられては怒りもされざりけむ、莞やかに、介意し給ふな、と、いひぬ。續いて二ツ三ツものを言ひ合ひたり。此日は是にて暮れぬ。

翌また畑に行きしが、けふは從妹も余が傍にて摘み、ものさへ言ひかけたり。此日は從弟は學校に行きてあらざりければ、いつもの悪戯の種なくて、眞面目なる話にて持ち切りたり。靜さんはいつ迄學校へ行きしか。妾は去年迄なり。今年はいくつになるや、十五なり、たいし録さんはいくつなりや。余は靜さんより二ツ上なり。小學讀本なやうな問答、先づこんな話しなりき。

其翌日は尙親しく、又翌日は更に親しくなれり。從妹は弟の余が傍にて本讀むが羨ましくなりけるにや、一日妾にも本を教へ給はずやと願ひ出でたり。これは随分言悪くかりしなるべし、語調の恠く亂れたるにてかくは思はるゝなり。余は笑ひて、何の本を讀み給ふぞ、鳩、花の本か、と、いへば、いたく怒りて、そんなら教はりません、と、いふ。無理には教へな

いが、それでもたつた今教はりたいといひしにあらずや。それでも餘り人を馬鹿にし給ふ故。馬鹿にしたりとか、そは申譯もなし、これより利口に致さむ、勘辨せられよ、など、減らず口をたゞきて、結果、高等讀本の七を教へたり。されど、これは彼が一たび讀みしもの故、不満足の色ありしかば、其後町に出でし折土佐日記と枕草紙とを買來て、先づ土佐日記を教へしに、これはさまで六ヶしからずと、僅か三夜にて讀み終り、此度は枕草紙を授けぬ。これは余もよくは得しらず、知らぬ所はい、かげんに譯し聞かせぬ、教ふるにあらで共に研究するなりけり。されど従妹はいと敏ことくて忘るゝことなく、今は畑に出でゝも、春は曙、やうく白うなり行く、など、歌のやうに口ずさむやうになりぬ。

此頃、余と従妹と親しくなりけるを何とか見けむ、下男は素より勝までが可笑なことをいふやうになりぬ。お中よしでお羨ましいとか、御婚禮にはどうぞ澤山御馳走して下さいとか、お子が出来ましたら私に負せて下さいとか、嫌いやがるほど尙付け入りて言ふに、従妹はいたく憤りて、ものも言はず、其後は余といたく隔りて摘み、夜になりても早くは本讀みに來らざりき。後にて叔母に聞けば、其翌日は綿摘みに行かぬと云ひて、宥なだむるに骨折りたりとの

事なり。されど流石余は其原由を叔母上に告げ得ざりき。

雨降り續きて二三日外に出でず。従妹は座敷に衣縫ひ、叔母上は其傍にて何事か小仕事せらる。叔父は村の會議に出でられ、従弟も學校にて留守なり。余はおのが室に在りて友人への手紙など認めてありしが、叔母上の呼び給ふ故、筆を抛ちて行き見れば、叔母上は茶器を拭きて在せり。今茶を入れる故一つ呑みて行かるべし、お蔭にて畑の方も片付きたり、といはる。難有しと叔母上の汲み出し給ふを睨りながら、静さん、衣服がうまく縫へますかと、話しかくれば、微かに、いけませんよ、といふ。叔母上は余に向ひて、裁縫の方は可かなりにやれど、どうも讀み書きの方はまだ疎くて困ると語らる。ナニニ静さんの位出来れば過ぎる位です、どうも女は學問をやり過ぎると、生意氣になつて仕方がありません、嫁に貰もらひ人がなくなつて仕舞ひます、と例の遠慮なしに言ひ放てば、従妹はサツと顔を紅くしてうつむくを見やる叔母上は興ありげに微笑み給ふ。それではお前は文盲もんまうのね神さんを取るだらう子。然しさう一概に仰おつしやつては困ります。叔母上は益々笑ひ給ふ。さて室に歸りぬ。従妹は見向きもせざりき。

其夕晚餐の席に就きしに、従妹の席は余の前面なるが、今宵は何故にや、かゝみ勝にて、絶えて頭を擡げず。妙な所振をするよと思へり。叔母上を見るに、微笑みながら、従妹の方を見、また余を見給ふ。

従妹の余に親しくなりてより、従弟の方は稍々疎くなりたり。これは決して余が故意になせしにあらず、さりどて彼方より遠くしたるにはあらざるべけれど、自然にかくなり行く順序にやあらむ。一る夜従弟は本讀みに來てかく言ひぬ、録さんは妹さんばかし可愛がつて厭だ。余が耳へは百雷の一時に落かゝる如く聞えて、腋の下には冷汗の如く湧けり。

次第に思ひ當りて、余は心苦しくなりぬ、今明らかに思を述べたしと思へど、自惚らしくて愧かしければ、言はで止まむ。

丈夫の決心は千曳の巖といはずや、何者かまた轉じ得ん。余は何等の事情ありとも決して動かざるべし。

年も暮れ、やがて一月になりぬ、余は親族への年賀を兼ね家に歸れり、父上母上の温容はいつに變らず、兄も喜びぬ。二夜三夜明せしが、例の兄嫁のうるさげに見ゆるに心悪しく、

いざこれより親類廻りをすべければと、其よし告げて出で立ちぬ。かしこに一泊、こゝに二泊、泊りを重ねること七ッ八ッにして家に歸りしが、此間また胸苦しさを醸すものありき。

田中といふ所に祖母上の實家あり、こゝにて語られけるは、叔母様はたしかに静嬢をねん身に妻す積りなり、ねん身が家もさまで豊かならざれば、分家するとも充分の資産をよも分ち得じ、それに引かへ、叔母御の方は近郷に並びなき富家なり、四千や五千分つとも何事かあらむ、殊にお静嬢は實によき娘なり、第一氣立よくして、賢くまた美し、眞に御身にふさはしき配偶なり、豚見今少しく年若くんば、余は決して他に嫁を求むることをせず、強ても乞ひ受くべかりしに、また叔母上にさる心あることは、吾初め他の親族まで恐らくは知らぬものもなかるべし、彼の會議の折り、叔母御がおん身を引取りて世話せんと言はれたるに付けて、吾々が頼み參らすると答へしは、婿にし給へといひしに全じきなり、おん身が兩親も想ふに必ず此事を承知し居らるべきも、今は憚りて尙うちあけて語らざるなれど、如何におん身の目には叔母御にさる氣色ありと見えずや。かく問はれて、余は何とも答ふるすべしを知らず、先きには従妹を笑ひし身が、顔うち赤めて、たゞ疊の塵を拾ふのみなりき。

かくては果てじ、此時意思を明さずば、いつ明す時あらん。

叔母上はさる心にて在すべし、されど小生は従ふまじ、また従ふことを待ず。そはまた何故にや。容易に御胸には落ちまじけれを兎に角一通り申上ぐべし、小生實は従兄妹の婚姻をいたく嫌ひ候ふなり、成るほど彼は温順にて、且は愚かならず、醜くからざれば、もし他人ならば小生喜んで申し受くべけれど、かゝる事は倫理上生理上忌々しきこと、聞及び、小生も深くこれに服し居り候ふなり、これは令息よりお聞きありて、よくお譯りになる事なれば、小生は深く入りては論ずまじく、たゞこの一事は甘諾出来ぬよしのみ申上置くべし、さりながら夢々彼を厭ふわけにはあらず、永くも御覽あれ、いつかは彼が爲に力を盡しやる事も候はんをと言ふに、主人はいたく驚きたる様にて、それは途方もなき不了簡なり、お静嬢を嫌ふならば詮方もなけれど、とて、それより續きて鋭く叱り責められけり、訥辯の余、充分に胸中を展開し得で、はふくゝに逃げ歸りぬ。

其夜と其次の夜と家に泊りて、また叔母の家に歸りぬ。心ありて見る故か、叔母上の待遇はまことに意味ありげにて、余はさながら針の筵に坐する心地なり。されば従つて従妹とは

前の如く親しくせず、成るべく避くるやうになし、が、神ならぬ身の、従妹は余が心を知らず、馴々しきこと日に増り行く。叔母上はまた、今のうちに事ありては容易ならじと思はれけむ、注意おさゝゝ怠りなく、従妹の臥床など、初めは余が室に遠くもあざりしが、此頃遽に所を變へたるやうなり。余は其頃叔母上の深慮を計り得ず、人にこそよれ、此の吾れにいらざる用心をなさるゝよ、たどひ一つ衾に臥さしむるとも、心を亂す吾かは、と、嘲み思ひたりき。

されど叔母上が例の心有ちて在するとは、益々蔽はれざることにて、今は余が口よりして、行々は此家の婿ぞと名乗るとも、恠しうあらじといふ程になりぬ。余は頻りにおのが思に責られて、けふもあすも鬱ぎ勝なれば、叔母上は早や病なりと覺されてか、忽ち藥など賜はる。従妹もいよゝゝ余に深切なり。その後余は感冒に罹りて、うち臥したることありしが、従妹は朝まだきより夜かけて枕邊に侍り、何くれと世話をなし、頭など摩り呉れたりき。余は鬼に責めらるゝ心地なり。

鬼といへば、世話に鬼も十七といへり。従妹もはや年頃なれば、そら賞めならず、美はし

くなりたり。余は嘗て家にありし折り、郡長様のお嬢様美人の尊高きを拜みしが、今若し余に向ひて、單に美の點に就て上下をなせと言ふ人あらば、余は躊躇ふことなく、先づ從妹の方を取るべし。元より田舎娘なり、美人とは行くまじけれど、露ほども厭みなく、見飽きせぬこそ愛らしけれ。心も行も清淨潔白、眞に姿と好一對なり。されば從妹にして他人なる余が配偶となるといふ譯ならば、余は恐らく何故にかくまで果報よきかを怪しみて、迷と知りながらも三世相を繰りかへして見る氣にもなるべし。

されども余は斷じて彼を娶らざるべし、よしや余が持論に多少の誤見のあらばあれ、男子一たび心を定むれば容易に動かすべからず。今若し區々たる情實に拘泥して腑甲斐なく腰を折りなば、たとひ他人には何と言はれずとも、自からちのが心に對して愧ぢざらめや。我れから豆腐の如き軟物となるは心外なり。よしよし首が飛ぶとも應ずまじ。

然れども余は誠實從妹を愛するものなり、若し不思議に思ふ人あらば試に考へても見るべし、鄙に育ちて言語に訛りはありとも、女禮式くさからずして、進退度あり、其しとやかなるは都人の故らに品つくるひたるに劣らず。心また柔しく長閑にして、學問こそ未だ深からね、

機を織り衣を裁ち、三味持つすべ、舞の手ぶりは知らねども、家政の道には年にも増していと長けたり、口開きて笑はねども擧は稀に、怒ることなくして常に凜たる威嚴あり。父の酷に逆はず、母の慈悲にはそれにも増して孝順なり。弟を愛し、下婢下男をいたはりて、他人には禮をつくす。尙とりたて、言ふべきは、身は素封の家になりて人々の愛敬うくるも知らず顔に、父母の恩賜は財囊に溢るれど、白粉胭脂に錢を投ぜず。他人の面前にかしこ立てせぬつゝまじさ、世の空想に耽る人、かりに腦裡に佳人を描くとも、恐らくこれ迄ならむを、これを見、これと語り、苟もこれに交際ひたるもの、誰かまた一片愛憐の情なきを得ん、况んや連枝の親、同根の愛、思は人に増りて更に深きものあるをや。

たとひ星降り、海天に上ることありとも、余は彼を娶ることあるべからず。されど余に一つの願あり、かくも可愛可憐なる從妹は、世の俗物に與へて光りを糞土に埋めしむべからず。爵位官祿は、そはうはべの彩色のみ、いかで才學秀で、一藝に堪能に、德行いみじからん男子を撰びてこれに嫁せしめたきもの、處女として飽まで女らしき彼は、人に歸ぐとも尙女らしからん。既に貞順溫柔の妻たらば、などかまた賢良慈愛の母たらざるべき。かくて琴瑟

調和、一家温かに日を送らば、よしや日輪の如き光榮なくとも、よしや飛鳥落す權勢なくとも、既にそれにて足れり。余は満心の至情を捧げて愛しぬる従妹にして、愛の極りなる結婚をなし得ざることとなれば、これをせめてもの楽しみとして、常に心にかけて願ひ居るなり。夏になりしが、また少しく用事ありて家に歸りしことあり。三日の滯留の間、母上の仰せにはまたもや胸に浪たせたり。汝も少しは悟りつらむ、叔母は汝を以て靜が婿たらしめんと思ひ居るなり、明らかにいひはせぬと、歷々見ゆる言葉のはしく、やがて我れにも心中明す折あらむ、汝は果報ものなり、其心して勵めかしと、これ平常思慮深くて、一言苟くもせざる母上の御言葉なり。

今更考ふる迄もなし。母上、兒は其事のみは應じ得ず、理由はかくくとなり、先きに田中の大爺よりも聞くところありたれど、その答もまた母上への答の如し、また此事のみほどのやうに強ひ給ふとも、たとひ兒は不孝の子となるまでも従ひ奉ること能はず、兒よりは言ひ悪くし、やがて叔母上の御發言あらば、何とぞ母上より躰よく斷り給はれ。余は心にも増して鋭く言放てり。言葉も珍らしく淀みなかりき。母上は案の如く呆れ給へり。かくて幾度か

の問答ありて後、余が憚りなき多辯に敵せで、母上は遂にいひやみ給ふ、いかにも失望し給ひしが如し。

母上の不機嫌に勇氣沮みて、此上は父上兄上と一議論する勢もなし、匆々に家を辭して叔母が家に歸りぬ。僅かに四夜の泊も、待つ身には長かりつるにや、歸りし夕暮より夜半まで従妹従弟共に余が室に来て語り戯れ、やがて叔母上の臥せと呼び立て給ふ頃にも、まだ去りどもなき様子なりき。

余は其後叔母上の身にのみ心を置きて、戦々兢々たる日を送りしが、八月も末になる頃、一日、叔母は早天に身仕度して余が室に來り給ひ、汝が家の方は盆になれば、けふはわれ行かんとす、何事か傳ふべき事もありや、と、宣ふ。余は餘りの俄さに驚き呆れしが、否格別いひやりたき事も候はず、しかし今迄さる御沙汰もなかりしが、俄かの御志にや、といへば、叔母上笑ましげに、まこと俄かの思ひ立なり、四夜五夜は泊りて歸らむ、留守を頼むなり、と、言ひすて、立出られぬ。

跡に余は考へ込みたり、叔母上は余がもの心知り初めてより、三とせに一度とは來給はざ

りしに、去歳の盆にも、且會議の折にも來給ひ、今また行かるゝは、其間の例に似ず短し、これには仔細あらずや、若し果して仔細あらば、これこそ容易ならぬ事の出來したるなれ。久しく乾きたりし火藥の箱にあはや火は移らんとす。

ふさぎ込みて言葉も自づと寡く、起居さへ力なくなりしに、従妹は氣遣はしげに、屢々來りて問ひかけたり。余は顔を覗かるゝことの何より辛くて、此深切もさまで難有く覺えず、果は夜になりて來りける時、邪慳に言ひ放ちぬ。お嬢様、お親切は忝けなし、然しながら、けふは母上のお留守なり、深夜にかく對坐する、人は何とか見ん、少しく慎しみ給ふこそよけれ。言葉はかくもすげなし、加へて其言ひざまは吾ながら餘りと思ふ程に強かりければ、従妹は初めのうちはあつけに取られしやうなりしが、終には打ち臥してさめくゝと泣きぬ。

余はどこ迄も無情を裝ふ積りにて、これ位の事に泣くとは餘りに女々し、さまで吾が言葉を否まるゝならば、吾もまた更に覺悟する所あるべし、いざ出で給へ、いかにいで給はぬか、出で給はずばそれ迄なり、と言棄て、疊を蹴立て室を立出でぬ。庭に下り立ちて、其心もなく花を眺む、耳聳て、従妹がけはひを窺ふに、籬にはなれし牽牛花の中々に立ちも上らず。

但し甚だ幸なりき、叔父の居給はざりしが。

余はかくの如く無情にもてなす事の、却て双方の爲ならんことを思ひたるなり。世情に疎き乳臭兒は、此外に何等の策をも案じ得ざりしなり。

されど其後日毎に従妹の悲しげなる顔を見ては、流石余とて木石にあらず、無情は一時の鍍金なれば、忽ち剝け落ちて無垢の吾に返り、先づ詫び、次には慰めたれど、今度は先方にて中々解けざりき。後には余もさもあるべき事と思ひて、實際何分か悔いたり。

かくて叔母上歸り給ふ。余は此時如何ばかり苦心したるか、人真似の形容をなさば、骨も碎くる思ひとか、斷腸とか、穴にも入りたきとかいひもすべし。恐るゝ叔母上が容子を窺ふどころ、果して事ありげなり。叔母上は素男魂の在せば、今迄大事ほど固く包みて容易に面にあらはし給はざりき。かゝる氣質の叔母上なれば、面には平和の象の満るとも、うかど心を安んずべからず。思ふに叔母上は胸中を母上にうちあけ、母上また余が心の程を告げ給ひしならむ、其時叔母上の失望は如何なりけむ、母上もなんぼう氣の毒に思ひ給ひしならむ、應對は如何なりけむ、舉動は如何なりしか、初は如何、終は如何、思考に思考を重ね、臆測

に臆測を重ねて、余が胸中には幾千の魔物來往し、東奔西馳、心は吾にして身は吾ならず。

今叔母上の心に應じなば如何、四方八面皆幸福の門内に入りて、いつとも至極平穩ならむ。愈々背きなば如何、怒濤も逆巻くべし、暴嵐も吹き立つべし、種々さまざまの悪事は擧つて來襲せむ。總別結果はよきを求めて悪きを避く、これ人情なり。さるを悪きを招きて善きを遠く、違背もまた甚しからずや。一面を顧れば、滔々たる天下從兄妹相婚するもの殆んど數を以て記しがたし、而して誰かはまたこれを非難せし。今や妻たるべきの從妹は賢なり美なり、他日の所得たるべきものは多々豊富、幸福といふ幸福は一時に余が面前に來迎すべし。天下好事は稀なり、逸せしむべからず。否、々々、これ大に然るべからず。余は飽まで此幸福を避けん、これ決して醉狂にもあらず、また好事にもあらず、己むを得ざればなり。

余はそのかみ家に在りし時より、母や兄に偏屈といはれたり。思ふに偏屈は決してよき事にはあるべからず、されど余は竊かに思ふ、偏屈は持操とは相距る一步のみと、世人動もすれば節操固きを目して偏屈といふ、余豈に自から節操固しといはんや、然し乍ら、これと混雜し易き偏屈と目さるゝは、幾分か自から慰する心地とする。偏屈てふ語は卑下的なれども、

無節操とは何れぞや、よしよしいつまでも偏屈ものたらん。

平時の眼もて見なば、叔母上の面上には恐らく一點の雲もあらざりしなるべし。されど疑心暗鬼を生ずるならひ、亂れたる余が眼には、温和なる笑顔のうち、どこやら怒るが如く恨むが如きさまの見ゆる心地す。余はやがて叔母上に彼の次第を糺問されて、汝は彼を嫌ふが故に言を設けて逃ぐると覺し、寧ろそれよりは男らしく厭なりと斷言せよ、など、迫られなば、何として言譯せんものと、胸は泥田を搔廻すやうになりて、足寒く、頭痛み、續きておのが室にのみ引籠りありき。

あゝ、叔母上は正に溝を持する強弩なり、容易く放たずと雖も、放たば如何に中りや鋭からん。

女ながらもどこまで大量なるか、愚昧の身には量りがたし。叔母上は例の如く來りていはり給ふ。但し心ありてか、將た無くてか、從妹は余に近づけ給はず、手づから湯水まで運びて慰め給ふに、余は心の底にうち泣きたり、此の眷遇に答ふことの叶はねばなり。

万一うまき場合ありて、叔母上にとつくり胸に落るやうに持説を語り參らせば、或は平和

の局を見るべし。されど此話しの出る折あらば、それは所謂手詰の談判の時機の到れるなり、平素訥辯にて普通の對話すら怪しき始末なるに、左様な場合に限り、いかでか懸河の雄辯の出るべき。さなくとも、叔母上に多少の學問もあらば、余が言語以外に悟り給ふこともあるべけれど、それも叶はず。あたりを見れば、従兄妹の結婚は比々皆然り、父母親族また皆敵に加擔す、例を引かんにも遠く西山公に溯らざるべからず、助を求むるにも四面皆楚歌の聲なるを奈何せん。

獨り推想して苦み居るも愚の至りなれば、書を飛ばして母上に様子を聞くところ、果然、叔母上の不興は實に一方ならざりしよしを報じ越されぬ、失望の餘りうち泣かれたりとの文面なり。人間固有の弱點として、余も半ば頼むべからざることを頼み居たりしかば、此一答にはいたくうたれて、今は殺して呉れる人さへあらば、つやく死も厭はむといふ程にうち沈みぬ。且頼み甲斐なき母上かな、と、思ひき。

五六日過ぎて、舊友の某より手紙を送りぬ。久しく疎遠なりしに何事をかひおこせしと訝りて讀み行きしに、これはまた驚き入るなり、とこより嗅ぎ付けしか。君が勇氣は實に感

嘆の至りなり、滔々たる天下甘んじて此鍋（鍋音弊に通ず意味ありげなり）中に煮らるゝ中に、卓然高踏、聊かも情の爲に意志を曲げられざる段、小生初め友人一同深く感服致居候、庶幾くは君が此一舉後進輩が好模範たるを得ん、との文言なり。余が決心は此に於て益々といふ二字を加へざるべからず。

叔母上が黙し居たまふことのせめて嬉しと思ひしは、初めの中なり、十日過ぎ、廿日、一月に及びては、苦しみの長きに堪へず、たとひどのやうなりとも、疾く言ひ給はれかし、と思ひぬ。騷り殺しのやうな辛き目や。

十一月になりて、あのやうな事情にて家に歸りしことは、諸君が知らるゝ通りなり。其前、たしか十月頃の事と覺えたり。一日、髯を生やした、先づ郡會議員でもやらうといふ位の人、懇懇に名刺を通じて、叔父に面會を求めたりしが、それより如何なる話のありたるか、余はちのが室にのみ籠り居し故、一向に知らざりしが、夕飯後従妹と従弟とに讀物を教へ果て、十時になれば寝ぬんとて廁へ行きしが、其歸るさに座敷の方に、叔父上と叔母上が高聲にいひ争ふを聞きぬ。まことに珍事なれば驚き入りて、進退出入は後の事、まづ様子を聞かんと襖に

耳を寄せけるに、叔父が腹立聲として、このやうに結構な口やある、取外さば再びは得がたきぞ、と、きこゆ。其尾に付き、よき口にはあれど、静は妾に見込あれば、尙暫く縁付くるを見合せ給へ、これは叔母上の聲なり。慄然として余は逃ぐるが如く室に歸りぬ。跡は聞かずともなり。

見込、見込、叔母上は、見込あれば静は霎時縁付けじとこそ宣ひたれ。

雄々しき叔母上は、余が辭し去る折りにも、さまでの異状を見せ給はざりき、これに引きかへ、従妹は酷くも羨れたり、眼も何となく露けかりける。

かしこの門口を出しときは、さながら重荷を下したる心地したり。實家には邪慳なる兄嫁のあれど、あの頃の苦しみに比ぶれば、これは苦しきにも辛きにもあらず。

歸りて後も、可憐なる従妹が事のみは、常に念頭を離れざりき。諺に舊夢を語るといふ事あり、今甘んじて其愚をなさば、思ふに笑を免れざるべけれど。ある夜の事なりし、處は正しく叔父が家なり。銀燭煌々たる所に於て、余は娶妻の式を擧げたり、既にして來賓皆散じて在るは余と花嫁のみとなりしが、やがて花嫁は自から其被ざし帽をとり去りしが、こは如何

に彼は正しく従妹なり、嬌々として花の如き顔ばせに、余は恍として一切他を忘れ、私語いと濃やかに過去を語る。おん身は余が叔母上と行きし折には、なにとてあのやうな所振をして見せしや。またいつぞや怒りしは、果して心底よりか。下男下婢に黽られし時の心地は何如なりし。木綿摘みに行きて喧嘩もしたりき、など、余は興に入りて語り進みしが、果は、余は其初め馬鹿々々しき考に耽りて、従妹と結婚するは非常の悪事のやうに心得、お身が熱き情も、叔母上がおん慈も、いつも他所よそにのみ見てありしが、あのまゝ馬鹿になり通さば、如何でか今宵の歡を享け得べきとまでに言へり。これはいふ迄もなく夢なり、夢は何故に生ずるや、無學の余は知り得ざれど、萬更心に跡なき事は見ざること、既往に徴して思ふ。その翌日は非常に不快なりき。

それより學資の出所ありて、出京したることも君等の知らるゝ通りなり。商業學校の學窓に書を読むこと一年、余も十九なれば、従妹の十七は無論なり。美は一層美を増すべく、心も年経て尙さがしくなりぬらむ。さきには飽まであどけなかりしが今尙然るか、想ふに生なまこころ心つきて却つて耻ぢはづかづるとも、お轉婆には構ひてならじ。何等の報もなければ、まだ嫁せざ

るならむ。彼が心には余を欲するや否や。また叔母上の御心は今如何、尙いつまでも我を待ち給ふか、余が心は到底變らじ、あたら娘を埋木にし給ふは情けなし、さりどて吾より注意も出来がたし、人にや頼まむ、いと愧かし。あはれ心を通はすすべもがな。月の夕、雨の夜、珍らしからぬ思を繰返して、只管世の儘ならぬを悲しみぬ。

七月になりぬ。試験は二三日の中なり。平素怠りもせざれば、落第することはあるまじけれど、さりどて油断すべからずと、暑苦しき南面に、汗になりて晝物を覗き居しに、兄より手紙をおこしぬ。また例の事柄ならむと直には見ず、彼の書此の書手當り次第に讀みて、頭も追々に重くなりし頃、燈の下に煙草吹かしながら、封きりて讀み下せしに、寢耳に水とは正に是。叔母上よりも兼て報知は有之候はんが、お静事、三月以來肺病にかゝり候處、漸次衰弱、既早餘命も多からぬやうに見受られ候間、時節柄御多忙には候はんが、直に御歸り成さるべく候、どの事なり。雲時呆然として、知覺も殆んど失ひたり。叔母上より何等の通知もなかりしが、と、思ひ起したるは、餘程時過ぎての事なり。

兄も兄なり、手紙書くだけの手は不自由ならぬに、なにどて疾く告げざりし。

かく忙はしくはあれど、これは格別なれば、急ぎて届書を幹事に差出し、其夜九時最終の列車に乗じぬ。心も心ならざれば、其の煩悶は一方ならず。窓を覗き、座に復り、立ちて見つ、腰下して見つ、驛毎に時計を眺め、時間表を見、分り切つた里程を人に問ひ、終には、十一時といふと餘程遅いでせうか、と言ふほどに心亂れぬ。

停車場より直ちに腕車を雇ひて五里を飛ばし、その向ふは山路なれば、是非なく徒歩せしが、心は益々急き込みて、足のまゝならぬがもどかしく、石につまづき、溝に落ち、辛うじて叔母が家に着きたるは、夜の三時少し過ぐる頃なりき。疲労などは平時の事なり。満身の力を腕に籠めて、碎けとばかり門を叩きぬ。五ツ六ツに及べども、誰とて應ふものなし。看病疲れにいざたなきにやあらむ。されどさやうな事を考ふる違はなし、憤り胸に満ち、果ては叩きながらに、大聲擧げて叫びしかば、やう／＼微かに應へぬ。さて待てども／＼出で來らばこそ、餘りに焦れて馬の如く地を蹴たりき。

門を入りて下婢より先きに進み、大音に、録三こそ只今参りたれ、と、呼ばりぬ。言下に、オ、録三か、と、轉び出られしは叔母上なり。叔母上、余はこの一言の他に何事をもいひ得

で、導かれて病室に入りぬ。叔母上は密かに涙を拭ひ給ふ。

叔母上は病人の枕邊に進みて、余が来りしよしを告げ給ひぬ。余も後ろより這出で、言葉をかけんとせしが、餘りの姿に胸つぶれて、言葉はなく、徒らに涙を呑み込みたり。流しかけたる如かりし黒髪は、おどろに亂れ結びて糸屑の如く、温かりし頬肉は酷くも削り去られて骨聳え、眼落入りて凄きまで輝き、余を見て喜ばしげに差出したる双の手は、瘡せに瘡せて、此の世の人とは思はれず。煽るか如き肩息の常住なるに咳き入るさまの世にも苦しげなる、見る目も昏るゝばかり。やがて心落居るに及び、如何に足なりと擦らんや、と、問へば、苦しくもなければ、と、答ふ。遠慮は無用なり、と、強ゆるに及び、さらば給はれ、と、いひぬ。折から叔母上心付給ひて、忘れ居たり、嘸や餓えつらむ、何なくとも夜食を認めずや、と、勧めらる。否、と、答へぬ。快く咽に通るべきや。

其夜は眠らで看護したり。人々皆眠り果てし頃、従妹は苦しき息の下より、録さんに逢ひたるが何より嬉し、と、母に向ふてさゝやくに、叔母上は僅かに余の方を顧て泣き給ふ。頻りに悶え苦しみが、やがて疲れて病人は眠りぬ。叔母上もまた其傍に轉び臥し給ふ。

長の月日の事なれば、如何に疲れ給ひけむ、御顔の瘡せにても著かりき。されば余は未だ眠からず、腕拱きて病人が顔を見入りしが、瘡せも瘡せたり、寢れも寢れたり、眠れど息は變はらず急はしくて、密かに脈を窺へば、躍るが如き其中に時々の間斷あり。素人ながら知り得たり、疑ひもなく死期の近づきしを。人目なければ憚らず泣きぬ。

夜明くるや、余は恨めしきこと限りなきまゝ、など此大病を知らせ給はぬ、と、叔母上を責めかけたり。幾たびか知らせんとは思ひしかど、今の汝は昔の閑ならず、一日一時も惜しからんと思ひ汲みて、忍びて今迄告げざりし、悪しうな思ひを、と、謝し給ふ。

せめても病人を勵し、叔母上を慰めて、其日を暮らししが、いつまでもかくてあるべき事ならず、如何せましと惱みしが、其夜叔母上は、逢はで果つるともそれ迄なるを、たどひ一日一夜なりとも親しく見て、看護さへ受けたれば、彼も早や思ひ置くことあらじ、學業を妨げては心がゝりなり、翌は疾く歸り給へ、といはる。余は此時も腑甲斐なく決答をなし得ざりき。

一夜を煩悶に明かして、漸く其朝、さらば小生はこれにて歸り申すべし、と、いふに、此時

には、叔母上却りて何とも宣はざりき。ろれのみか、病人は重き頭を僅かに擡げて、あはれけふ一日は留まり給へ、と、いふ。逆ふに忍びずしてまた其夜も泊りぬ。

二日過ぎなば試験は始まるべし、心も心ならず、あはれ分身の法もがななど、出来得ぬ事を願ひつゝ、かくて夜はまた明けたり。けふは如何なる故障ありとも歸らざるべからず、半日後れなば一年を誤るべし。されど人間の弱きは情なり、早朝には流石に忍びず、八時と過ぎ、九時と来りしかど、今や立たんといふ折もなし。時に叔母上は従妹の枕邊により居て、かくの事情あれば、録三は是非共けふ歸らねばならず、また歸さねばならず、快癒さへなしなば、いくらも逢はるべし、心を得たりや、と問はれしに、従妹も流石に潔く、歸し給へ、と、いふ。余も心にもなき嘘言ながら、せめてもと、寢れはしたれど、まだ充分に頼みあり、よく療養して、此次の歸省には達者な顔を見せられよ、などいふ。

十時となり、十一時となりぬ。今はとて先づ病床に近づきて、さらばと告げしに、またもや心變りけむ、従妹は痛々しげに擷みながら、余には答へず、叔母上に向ひて、母上、録さんをもう一日留むることは出来がたきや、と、いふ。聲は聞えぬまでも皴枯れたるに、えも

言はれぬ悲しき調を帯びて、余が胸底まで浸透れり。叔母上も流石恩愛の情に脆く、余が方を顧て、出来がたきや、如何しても出来がたくば、それ迄なれど、出来得ば彼もかくまでいふものを、枉げてもう一夜を明かし給はれ、と、宣ふ。その聲音はさながら哀訴をなすが如し。出来得ることならば無論なり、仰せなくとも留まり候はむ、されど眞實詮方なし、余もまた哀訴する心なり。

留まらじといはれて、従妹は望を失し、眼さへ閉ぢぬ、涙は睫を傳ふて枕に移り、正に萎れし花の風まつ風情なり。叔母上もまた悄然として言葉もなし。此の境を切抜け出る余が心は、そも如何ばかり辛かりしぞ。

あゝこれは餘りに残酷なりし、吾ながら餘りに無情なりし、よしや試験に逢はずとて、一年待ち合さんと断念せば何かあらむ。逝く水は再び歸らず、死者はいつの世かまた逢ふを得べき。試験はまことに重し。されど生死の重きに比しては如何。况んや他ならぬ従妹なり、たとひ戀にはあらずとも、それにも増して愛したるさへありしに、彼も亦吾に疎からざりしをや。知らざる人は余を木か石の如く思ふならん。

木か石かとは情けなし。木の端はしや石の片かたならば、なぞて熱き涙を降らすべき。無情と知り、残酷と悟りて、尙其無情と残酷を甘んじ行ふ、余が心の辛つらさ切せつなさは、嘗て一たび余が如き境遇を経しものにあらざれば知り得じ。

叔母上は屢々言ひし如く、並ならぬ堪忍を有ち給へり。されば余が幾度となく危ぶみしに拘はらず、未だ彼の一義を口に出だし給はず。されど心の底には如何に余を恨み給ふらむ、たとひ一時は包むとも、余が心にして翻らずば、遂に包み課おぼせずして綻ぶることあらむ、今從妹の病篤く、やがて果てもなしたらば、其折こそは如何に叔母上とて黙しては居給はじ、何事か宣ふに極りたれ。思ふに世界にありとあらゆる辛さを一團となしぬとも、この怨言を聞く辛さには及ばざるべし。苟安を貪る余が心は、まことに卑しくもあるべけれど、詮方なさの窮策たるを知られなば、諸君も強くは咎め給ふまじ。

歸りて二三日の後、二封の手紙の一時に机上に落つるあり、開き讀むまでもなし、これは兄と叔父とより來れるなるが、いづれも一樣に封皮の脇付に凶報の二字を書き付けたり。今迄悲しといふことを幾度か言ひたれば、今またいかに悲しといふとも、余が心に思ふ程

に諸君の胸に感ぜざるべし、冀くは各々假に余が身となりて考へ見給へ。

冬季の休暇に歸省せしが、一月になりてゆくりなく叔母上の來りたまふに會ひぬ。此時余は如何に面目なかりしや、叔母上は余が吊辭に對し、殆んど前後を忘れて泣き給へり。やがて宣ひしは、いかに残り惜しかりけむ、末期までねん身の傍になきが憾みなりといひ續けたり、彼もかの如くに慕ひまつはりけるものを、と、あゝ此一語は千万無量、余は正に生ながら殺されたり。

ぬかり道

世界に女夫めうとの数も多いが、恐らく我ほど自分の細君に惚れ抜いて居るものも少いだらう、ナニ新婚したばかりには誰もさうだと、否々さうでない、我の惚れ方に至つては決して其やうな輕はづみの惚れ方で御座らんテ、細君もまた亭主が惚れてるからいゝわと言つて、透あたらさず天窓の上へお臀を据ゆるといふやうな流義では無いやうではあるが、何にせよ、こちらからお膝元へ畏かしこつて、こゝをね尺さしなされと唇から上をさし出すといふ次第だもの、我なが

ら中々ね廉くないことである。

右の通り、皆様には頗るね聞悪い我々の交情で御座れば、強ち一菓の微も煩つて食べたといふ、昔のさる天子様ばかりか惚い譯ではないと自も考へて、果は妻があつての我であるまで逆せ込んで……全く甘んじて逆せ込んで居る。人が見たらば定めて笑止がるだらうとも心配はして見たが、妻と他人の口との輕重は權衡にかけるまでもなければ、遂に外見は一向構はぬといふことにして終つたが、爰に少々心がかりなことがある。

有様はかうである、物語らう。

無妻といふも事も面白さうだなど、考へて居るところへ、

『ヤ久濶、こりや 噂だが、君の親御は近頃頻りと奥方の詮索をなさるといふ事をチラリと聞いたが、どうだ、いゝのが見當つたやうかね』

と寒暖さへ述べずにもうこのやうな話を初める。

『ハ、ア聞いたか、見付けては居る様子だが、然し此頃やう／＼初めたのだからね』

『然し見付かつたか』

『サ、やう／＼初めたばかりだから、まだ見付かる筈もないだらう。』

『成程、成程』

とは言つたが、どうやら『やれ嬉しや』と云ふやうな風が見えて、『ヤ失敬』と言つたぎり、フイと歸つて仕舞つた、可笑しい男サ。

これが僕の莫逆刎頸の隨一人で、手塚といふ男である。

ある時、少々の用事で手塚を訪問したところ、生憎の他出だといふ、『それは弱つた』と言ふと、母君が『直に歸つて参ります、少々お待ち下さいませ』と座敷へ通して、新聞やら茶菓やら出して呉れて、何か仕かけた事があつた様子で『少々御免遊ばして』と言つて下つた。新聞を半段ほど讀んだ頃、襖をあけて入つて來たのが手塚の妹である、鐵瓶を提げて來て茶を入れかへて呉れた。

『お信さん何か出來ますか』

と話しかけると、

『遊んでばかり』

と言つて例の耻かしいといふ風をして見せる、これで話も途絶えた。

『どなた？』

と勝手に下女が怒鳴つて、續いて『アハ、、、、實にアハ、、、の次第だ、狗でも主人の足音は知つとる哩……………何、武田君が、ウン、待つて居る？ウン、信は居たが、ウン、ヨシヨシ』といひながら主人公の御歸館だ。

『ヤ失敬待たせたね』と軽く挨拶して、更めて妹の方を眺めたが、『菓子をもう少し氣の利いたものを買はして呉れないか』と吩咐いひつけて、『お前のおとりもちヂヤ随分武田君をヂラしたらう、チエ君』とまたこちらを顧た。『アハ、、、』と武田君は、
用向は二ツ三ツ話し合つて直ぐ片付いた。

『少し君に聴きたい事があるが』

『何か』

『君は一番詳しく知つて居さうだから聴くがね、弓町の大村の娘、アレを貰はないかと此頃勸めた人があつて、そこで母の曰く、手塚さんは大抵御承知だらうから、お前伺つて見ると、かういふのだが、どうだらう』

『さうね』の氣の乗らぬ返事が氣遣しいから、

『いかぬか』

といへば、今まで下げて居た天窓あたまをムツクリ擡げて、如何にも狼狽あはてた風態で、

『ナニいかぬことはない』

『いかぬことはない？ヂヤアいゝのかち、性質はどうだらう』

『性質は申分なしだ』

『餘り當世風ぢや母の氣に入らんが、ねどなしいか』

『おとなしい、極くおとなしい』

『陰鬱ぢやないか』

『ナニ陰鬱なことはない』

これから年齢、學問の有無、容貌の美醜など聽く事あつて、

『それぢや申分がないやうだが、然し君はどうやら思はしくなさうだが、君、僕に取つち
ア一生の大事だヨ、包まず話して呉れないか』

と云へば『飛んだ事ナ』とヤツキとなつて、これから急に多辯になり、

『第一性質、これは僕が固く保證を置いて不都合は無いと明言する、年齢も十九だから丁度
だらうし、容貌も慾には切りがないが、君の目にだって醜くは恐らく映るまいヨ』

と言ひかけて、襖の方へ向いて大聲で、

『チエお母さん、大村のお清さんは随分美しいです子』

と云ふ。

『さうとも子信なぞが並ばうもんなら、丸でお姫様とね三どんのやうだヨ……………』

と母が襖越しにいひかけた(後に考へると此の調子がどうやらまづかつた)

『餘計なことを』と手塚は透さずたしなめて、更めて余れの氣色を窺つたが、これは流石『耐
忍』といふものに於ける女性と男性との力量の懸隔であらう。

『學問も跡見女學校を卒業したさうだし、其他でも歌だの縫物など稽古したさうだから、先
づ先づ足りるといふものだ、それに身躰も健康であるから、殆んど當人の身の上に容喙す
る隙がない』

『ひどく褒るぬ、ぢや君は僕が若し其娘を貰うとすれば、(此時手塚は目を圓くして余れの顔
を見詰めて居た) 賛成するぬ』

『賛成とも』と手塚は苦しく片唾を嚙み下して、『無論賛成だ』と漸く明晰に言うて退けた。

*

*

*

*

*

手塚、同じく母、お信嬢、うち揃つて玄關まで見送つて呉れた。僕が靴を穿いて居たとき、手
塚の妹は『武田さん、大村の嬢さんは私も存じて居りますが、大層いゝ方ですヨ、お貰ひな
さいナ』と言ふ、其時丁度穿き終つて見ると、先刻のやうな人見知でなく、極く無邪氣な顔
色で、莞々と余れの顔を眺めて居る、然し什麼の理由か手塚の母は獨り淋しいやうかまた嚴
しいやうな恐ろしく澄し切つた様子で、例の愛相が露ほども見えて居らぬ。

手塚、これは例の如くで別段異状はなかつたが……………

大村の娘といふものに就いて仔細に探究をしたが、少く思はしからぬ事柄を發見して、一先づ見合はせといふ事にした、これを手塚に話したが、定めて残念がるだらうと思の外、『さうか』と言つたばかりで、『ナニニ世界は廣し、細君の候補者位はあたり近所にゴロ／＼轉がつて居るさ』と笑つて居る。

『ヘエそんな事が御座いましたか』と發見の新事實に合槌を入れて、『一向存じませんでした』と手塚の母もけふは例の通りに懐しい顔をして居る、ハテあの日は癢でも起り氣味であつたか知ら。

『武田さん、まア静にお探しなさる方がよ御座いますヨ、後で取返しが付きませんから』と、母が注意して呉れる傍から『無論の事サ、ネエ武田、聴くまでもない事だらう』と手塚は冷笑つて『ナニニ僕がいゝのを見付けてやるサ』

またの日、此の日は手塚と母だけで、お信嬢は居らなかつたが、何かの話しの序に、

『どうです、お信さんにもいゝお婿さんが見付りましたか』と問ふと、『ヘイ』と溜息をついて、母は息子の方を顧したが、此時丁度息子もまた母の顔を見て、所謂親子顔を見合せてかたみに言葉はなかりけりであつたが、暫くして、

『どうも……長し……短しで……』と、母はまた溜息をついたが、手塚もまた黒くじを嚙んでうつむいて居る。

さて遂に妻を娶ることになつた、披露をするに方つて、手塚は無論、母もお信嬢も、殊にお信嬢は妻の學校友達であるによつて、是非來て呉れるやうにと招いたが、生憎其日は母が持病が起つて臥つて居、私しもまだ手が離されないから、失禮ではあるがと手紙を兄に托して断つてよこした。

披露に招いたは、姻戚やら、知己やらで、二十人足らずあつたが、此日手塚は一大白だと言つて頻りに飲んで呉れた、平生誠に酒量の小さい男で、一合位で潰れるのであつたが、けふはいつかな酔つた氣色が見えぬ、飲めば飲む程顔は蒼くなつて、但し歌も謠つたが、禮は

聊か紊さなかつた。

二週間の新婚旅行を終つて歸つて見れば、手塚はあの夜から大病で、此頃やうく枕が上つたばかりだといふ、蓋し飲み過ぎたのである。

*

*

*

*

*

ナンと心なして余れはあつたらう、利慾を離れて、彼の男ならば娘を呉れてやりたい、是非妹の夫として見たいと思ひ込んだ人の情といふものは、結句余れに取つて世に有り難い一ツの知遇といふものである、五斗米の爲に膝を屈するを屑しとせなかつた昔の勇士すら、眷遇の淺からぬに絆されては甘んじて馬前の座を拂つた。然るに何といふ馬鹿の日本一であらう、我は知遇を得て悟らず、眷顧を得て眷顧に答へなかつた。

手塚は男子である、女々しい繰言を夢更我に聽かせせぬ、否尙舊に因つて洒々落々たる風をして見せて居る、其の風をして見せらるゝだけ、我に取つては一倍の苦痛である、樂しからぬ顔をして居らるゝ彼が母君にも、思ふに一時は癢を重からしめたことであらう。

尙疑はしいはお信嬢である。別段かはつな様子もないがせめてもの心安めではあるが、神

にかけ、佛にかけて、我は既往に彼の乙女の胸に己れの姿の映らなかつたを願ふ。

ねくたれがみ

一

畜生、どうして呉れやうと蹉跎して、涙ぐみし目を少し輝きし手の甲にて邪慳に拭ひつ、平生ならば一定可愛らしかるべきを、思ひ切つて耳の際まで釣り上げ、それにて空の片隅を睨みつ、ホツと熱き息を吐く。

お近お近と呼はる聲紙氣少き毀れ障子の中より聞えて、其の劇しさ火の付くやうなり。されど聞えぬか、但し聞えても聲の調子悪さを氣遣ひてか、返辭なかりしが、うちには愈々急くらしく、返辭せねば飛んでも出づべきけはひなるに、アイよと今度は應へぬ。言葉はよくつくりて、曇りの耳に立つまでならねど、眼を放せし前垂は少なからず濕ふてぞありき。

へん面白くもねえ、泣ッ面をしやがッて忌々しい畜生だ。銃の野郎が十日や半月來ねいか

らッて、そんならうぬは切ねえか、鴛鴦や雞ぢやアあるめえし、日が日ンからへばりついでるやつがあるもンか、コレ聞け、おれはナ、われが、お袋を廿二の年に渾家にして、廿六の歳にア間男をしやがッたンで追ひ出してからこッち、いかな事、女郎買一ツ、後家さがし一ツ仕ねえで、今まで結句辛抱して來たぞ。酒い飲むッて皆に嫌はれるが、自慢ぢやねえが、色事にかけちアそりやア奇麗なものだ。うぬらとてもおれが真似いしやうたッて出來アしめい。ナニ出來る、ウハ、、、畜生負け惜みいやがるない。マア酌をしろ、ナンだまだ泣いて居やがる、コン畜生、泣虫と助倍と蕪アおれが大禁物だ、大抵で黙りやアがれ。

へ、どうせ私しやア泣虫サ、どうせ私しやア助倍よ、お爺さんは廿二のとしに渾家をとッて、廿六の年に退出して、そりやアもう御手柄さ、しかしねお爺さん、私しもかう見えてもザラにあるたのの新造ッ子ぢやアねえよ、憚りながら此かいわいで今お金と評判をとッた近ですよ、お爺さんの前で自慢ぢやないが、育ちに似合ねえ堅い娘だと人に言はれて、現在の爺親には、ヤレ泣虫だの助倍だのといはれるが口惜しいから言ふんだ、お前の目にやアそれほど私しが男にのろいと見えるかい、思ましいこッた、成るほど私しや、今泣きましたヨ、

泣いたにア違ひはないが、これでもまだ男が戀しくッてメン／＼するほど筆碌はしやせんよ、私しだッてもお前からいへば一人ツきりの娘ぢやないかえ、その一人ツきりの娘がよ、お前が押しつけたやうな道理な有田といふ野郎に、さん／＼氣を揉ませられた揚句の果てに、腐れ草履かなソのやうにおッばかされたがお前は嬉しいか、自分の天窓の上へかゝつた事でないから、そりやアどうせ口惜しいの切ねえのといふどこまで行く道理アねえが、せめて馬鹿にするだけは見合はして呉れてもいゝぢやないかね、他人でさ………

コ、コレ、ヤイ黙れッてば黙れ、それぢやアなにか、うぬは愈々銃の野郎に見棄てられて悲しいといふんだナ。

誰がお爺さん、いつ誰が悲しいといひました、それほど私しもお姫様ぢやアねえと、さつきから言ッてるぢやアねえか。

ヤイ、黙れ、ウン、悲しかねえんだナ、それでもさつきから啼えつゝけぢアねえか、ウ、それぢやア手前の涙ア嬉しい時に出るナ、ホ、オ今のは嬉し泣きか。

嬉し泣たアいくらお爺さんでも餘ンまりだど、お近は親の顔を鏡の如き兩眼にて睨み詰め、

ナニもお前に厄介になるといひやしねえよ、いらざるお世話だ、大ていでそツちから止し
てお呉れど、半ば鼻聲に言ひ終りて、火箸で一心に爐に文字かくは、うるんだ顔を見せまい
どの用心、たゞし涙は用捨なく大粒にポタリ／＼と灰に落ちて、お近がそのあとを埋むる手
つき忙がし。

親爺は此間無言に娘が天邊のあたり望みながら、手酌にグヒリ／＼、こゝ暫し睨み合の姿
にて、双方とも相手が口たゝかん様子の少しなりと見えもしたらば、透さず此方からも驚し
かけて呉れんと、手ぐすね引て待つらしき互の心中、寂しく氣味わるきものなり。

昔しは頗る氣取つたる分にて『家内浪風立たず』ぐらゐなりしが開け行く世の有り難さ、
それすら『温き家庭』とやら小六かしく改名して、手品の傳授でかなんかのやうに。また植
木室でも造り立る如く、『温かなる家庭をつくる法』といふやうなもの、そこゝにて拜見致
すことあり、家庭といふ庭は木配りや石配り、どのやうのものか聞かまほしけれど、朝寒の
襟元具合わろく、寢所で床離れを斟酌するところへ下男が來てストーブ焚き付けたる如くに、
れいそれと暖くなるものならば、それこそ世間に風波の種盡きて、離縁の勘當のと藥にした

くもなくなるべけれど、まさかにかさうもならぬを見れば、此傳授も縁日で買つて來た種本で、
ものは試しをやるやうな結果と見えたり。熟々惟るに、美しくしき錦魚といふ魚は好んで死水
に住むが如く、家庭の守護神はれない無精のものと見えて、兎角『遊ばせ』づくめの第宅
を嫌ひ、そこにてすなる晩餐かた／＼手を引き合ひての散歩、湯治ついでに一家擧つての名所
廻りなどいふ結構なる御馳走を振り棄て、詰らぬ賤が伏屋の鼠矢だらけな神棚に鎮座ま
し／＼、失禮だらけ不行儀づくめな男女の氣風を何よりと満悦まし／＼給ふやうなり、申さば
絹ぐるみの令夫人が三ツ指ついでに『あなた』よりは、髪はおどろに、飾りといふは油じみ
たる黄楊の櫛、盥褌の錦の膝は小兒の溺りに伽羅立のぼる女房が、折り／＼の『野郎』よば
はり、差引てまだ残りあるべく、主じが常住の醜聞、聽て聽かず、慎み畏みて飽まで貞女と
すまさんよりは、たまさかの遅歸りを鵝鳴り付けて、亭主が天窓碎れよとくらわする方、ま
だ／＼幾何の立まさりぞや。夫か妻か、妻か夫か、親子兄弟無差別な言語行爲に、自然と籠
る慈愛恩情、きのふの喧嘩はけふの睦み、朝の角突は夕の寛ぎ、氣まづきことはツイと忘れ
て、忘れぬ恩愛は凸凹なしの一すぢ、彼の一夜の孤枕終年の隔てとなり、一場の怨言三世の

別れとなるやうな下手な真似は可笑しき過ぎて氣の毒なり。元來家内の和合といふは、隔てなきに基くところ聞け、それに何ぞや、我から好んで、虚禮の隔て、外見の中垣、よからぬものせつせとつくり、口先ばかりの虚仁義で、それが錢金づくや道理づくで圓くうまく治るものならば、如何に酒色に荒んでも、滋強丸さへ味まば壽命長久の道理ならずや、誰が爲の見てくれ、要らぬ禮式とつと、棄て、無垢圓滿、それよ水入らずの家庭なんどつくる氣はなきや。

此の爺娘、餘りといへば餘りの心安さ、平生のものいひさへ、影で聞かば如何な大喧嘩の始まりしぞと思はるれど、腹からの親しさ、心の殊勝さ、畜生といふ言葉も莞々として飽を合んだやうな口より出てはさまでわるからぬものなり。親は用の序にあたりのお店で一杯やれば、獨り榮華は親なればとて濟まぬ事と、態と肴は残し、無きときは娘が好物の烏羽玉といふ菓子、酒歩蹠跚たる歸りにも忘れずに買ひ、手拭にくるみ、頸にしッかりいはひ付けて歸れば、娘も折々は親が歸りの早からぬを氣遣ひ、僅かな道なれど態々迎ひに出て、手取り足取り扶け歸るほどの心行き、互に嫌といふ心どうして起きやう筈なく、たまさかの言争に、

親は生來の聲高、娘も口は人に劣らぬ方、しかも荒育ち、傍目では死に合ふかとも思はるれど、消炭の火氣一時にて、いつといふことなく仲直り、見れば娘は親の肩を擦つて樂しげに昔し語り聽く様子、けふの治りもまたこの邊なるべし。

二

中仙道赤羽といふは詰らぬ小村なれど、新宿への支線さへある停車場の繁昌に、かて、加へて其小高き丘の上には近衛第一兩師團の工兵隊營ありて、休日には無事に苦しむ兵隊さんの朝早々よりゾロ／＼と頰れ下れば、麥酒の空き壺それも澤山は飾れぬほどの安酪酒屋、さては千鳥賊の煮附、豆腐の羹、出來たところで血身過半の鮪ぐらゐが關の山の恠しの料理屋が、兵隊靴のゴタスタ、佩劍の響き、五月蠅きまでの賑ひ、そこにも人を包み切れで、裏手の流れに練習用の艇を浮べて、人音絶し川の最中に靜かに疲れを養ふ弱武者あれば、遠く鐵車を新宿に驅つて、『兵隊さんの晝遊び』に滿腹の銳氣を洩し來る強者あり、さうかと思へば、三々伍々近郊をそゝろあるきして、年來の假設敵なる恠しの源氏名を高呼はりし、彈藥糧米溜らん曉の作戰方畧の攻究に我を忘るゝ軍事執心、梭音床しき賤が家を撰び廻りて、赤い手

柄にざれかゝるまめ男、とりくに遊びはあれど、流石門限に後るゝほどの怠慢なきは、軍隊の貴さなるべし。

去年の新兵に有田銃介といふあり、生れは群馬の甘楽郡とやら、戸籍には十介とあれど、ひねつて銃と直すほどにて、入營後雲時の間に上等兵にまで經のぼり、中隊の人物とたゞへられて、人の目にて立つ男なりしが、例のしやうことなしの散策が種となりて、難なく一人のおもひものをつくりぬ。其頃赤羽に名物あり、お近とて男まさりの闊達娘、ことし廿三まで色白な並優れた顔を男のために笑はず、性を知らずに戯れかゝる男共は、誰彼の用捨なく、思ひ切つての脇あたり、弱しと見えてもむくくど土を擡ぐる獨活の芽の、あのしななくなせる細腰一ツ捻れば、抱つきし男見事拂はれて後へに尻餅搗き、あの逞しからず見ゆる腕のさきに、まさか投げられしといふは懸直もあらんが、確かに押し倒されしぐらゐの若人幾人あるやら、里人むかしの怪力をしのびて、矢庭渾名を語路わるけれど今も金と課はせつ、うつかりするなど途で行き會ひても挨拶に氣を付けるまでの用心なり。其の親爺といふは、これもまた曲ものにて、何も悪氣といふはなけれど、ものを畏れぬ不敵の性根は殊の外、人に疎ま

れ、若きより鰥暮しの見るさへ痛々しけれど、近所の者さへ後難を恐れて嫁要らぬかといふて見るほどの深切をも見合せ、よろづ打絶たる生活なれど、ツイぞ屈託顔を見せもせねば、また腰を屈めん氣色もなく、出で叶はぬ村中の集會には、蓄ひに蓄ひたる毒舌の矢切つて放ちて、村長を始め議員の誰彼をへこませ、立すくませ、一時は村に置かぬまでの衆議なりしかど、きのふけふの風來人といふではなし、今こそ零落たれ、家柄とて左まで下流に立つものならねば、それもならず、障らぬ神に祟りはなし、敬して遠くるが上策なりと、果は一決して、さては秋の夜長に茶飲み話しに来る人さへなければ、妙に不足らしい様子もなく、萱の屋根次第に薄くなりて、雨も此頃はそこへ漏る様子。

銃介のお近に懐みたるはいつよりも知れぬど、あのうちへは兵隊が遊びに来るはどあたりの者も珍らしがり、有田上等兵殿は此頃いつも抜けがけで一ツ方面へ向はると、同班のもの、注意し初めしは半年ほど前の事なり。色は黒けれど、目鼻立ち言ひ分なく、軍服の着こなしどこまでもグニヤつかず、稍々反り過す姿勢の見事さにれのれとうく生捕つたかと、指をくはへて羨ましがる失戀家も、敢て並木の埋伏に遺恨を晴らす勇氣も出ず、イヨ一艶福

家と、これより外に冷かし方も案じ出ぬは、仲間の怯み方も並々ならずと知るべし。銃介勝誇りて霎時は面白く通ひもせしが、戀といふは元來岡染の兎角褪せ易いものにて、此頃どこにか増花の出来しとやら、足退いたぎり、來ぬこと一ト月二ヶ月は愚かなこと、四月といふもの音沙汰なくして、銃介が友の甲乙に頼みて言傳せしことさへ早や幾度となく積れど、性悪男煮えたと沸いたとも返辭を听かせず、ある日用たしに出で、折よく人家も切れし小溝のほとり、道の真直中に出くはしたれば、ごさんなれ、けふこそ舌の根の續くだけ、言ふて言ふて、成らば言ひ殺してと、意氣込み強く馳せ寄れば、男め、卑怯に外づして扇骨木繁れる傍道へ逃げくさる、サアもう戀も醒めた、退ふにも及ばぬ、あのれあのれと、次團太踏んで口惜しがりを、人は情けなきもの、あれお金が通ると、三面六臂にもあらぬわれを、さも珍らしげに誘ひ合ふて、籬の曲りから首出して見る。

さりとは、さりとは、男の愛情どうせ永く續かうものでなしとは、最初嘔き出すほど知り切つたれど、うたてわれは男にたらしられて魂さへ抜かれしよな、今更の憤り遅いやうにはあれど、よもやかほどとは思ひもかけざりしぞ、それもいとささに眩む眼の盲是非か、命も要

らぬまでこのぼりつめし昔もあれども、今となつて考ふれば、ゆうべの夢中に必死となつて悶きしも同じ事、未練も愛着も、もうさら／＼無いぞと、潔くわれは發心したるつもりなれど、意に任せぬ睫のうるほひ、さすが女子の涙もろかりし。

傳へ聞く、石心希代の西王母とやらの桃も、流石三千年に一たびは實る心になるとかや。お近とて、でく人形ではあるまいし、心機一轉の曉には、男の傍妙に蒸熱いやうにもなりて、男といふは強いもの、女といふは弱いものとの浮世のたてわけ、それは誰やら昔しの賢き人が書き残されし帳面の、當座一字の誤りを馬鹿律義にかくは長う傳へたるではなきか、何の男の強からうぞ、それが定なら、何とて其弱い女子に、せめては性れつきの音聲でも言ふことか、甘つたるい、思ひ出すさへ氣色のわるくなるほどの嫌な嫌な聲をして、それも惚れたどか渾家になれどか、手ツ取り早く、いへばいはるゝ満足な口を持ちながら、あれやこれやと根の切れぬ口説き方、譯の分らぬ三ツ子ではあるまいし、好いた人は好いた人、嫌な男はどこまでも嫌、そう諄くた談義を聽かせられずと、ツンと昔に極り切つて居るものを、こちらから嫌だよ、どうでも嫌さど、あれほどきツぱり言つて聽かせて置くものを、三ツ日に

あげずつけまはして、それでもいつかは根氣負けして、靡きでもするかど、ア、五月蠅うて五月蠅うて、蚤なら薬でも買はうもの、これがそもや魂ひのある人間の、たとへばわれ等女子にも出来たことか、意氣地の無いことを女々しいとは癩に障るわ。また男といふ名がどこ迄もたしかに強いといふ事であらうなら、なぜそれを返上してからさうはせぬ、蛆虫め、さまを見ろとせしら笑つて此頃は居られずなり、きのふの行ひ、もうけふは後ろめたく、矢張われは弱いものであつたかと爪をくはへて含羞むは、眉毛の剛くなる年頃ながらも初戀の弱みなり。それ迄は、男の腹の中といふもの、背戸に湧き立つ苦清水の、その溜りよりまだく透りて、骨のあるなし、腹の淨き、穢き、魂ひけふは右へ寄つたか、左にふれたか、咽の底には、ソレしたゝかに言ひたいことの塊りがあること、臍のツイ下には、これから仕向けによつては、追々蔓らうと思はるゝ邪氣の蟠ること、一々手に取る如く、成るほど泥水世界の女共が男を見事に手玉にとるも、それはいくらか修業を積んだこととして、別段感に堪へる程でもなし、手柄とあらばやつても見せんと、始終呑んでかゝつて、世に男といふものほど心安く附合ひに苦勞なきものはなしと、獨り極めして居られた頃は、此近もその昔し聖天さま

へ願絶ちして、芥子喰はぬ身の、涙といふものどういふ拍子に出るものか、人の身の上をかしく眺めて、氣樂千万な身の上なりしが、銃さんとして何も不思議な人でもなく、いはい當り前な男なれど、言ふことなすこと、一々わが胸に心配を轉きつけて、それより世に焦れるといふことを覚え、年頃若い男相手に修業のくさく、根から何の益に立たず、一寸さきは聞とは成るほど胸にも落ちた言葉ぞかし。其間には、無論悲しいこと、あぢきないことの数へ切れず、男のために身も散々糞され、それも毎日逢はれることなら、せめて鬱さも少なからうもの、わづか七日目七日目の逢瀬、六日六夜さを待ちくらし、待ちあかす辛氣さ、やう／＼その日になりて、愚かとは知れど、日もまだのぼらぬうちより、幾度か門に出て、主や遅しと兵營の高み望んでのがれ、憎や男の心なく晝過ぎての一寸覗き、または一二度打ち續けての無沙汰、怨みて聞けば遠くへ演習とやら、それもどうやらと態々他に尋ねて後、やう／＼晴るゝ疑ひ、妬と人の言は言へ、妬の身は人のえ知らぬ苦勞、醉狂に誰とて出来べきか、男のもてなし懇ならば、それも長からじと悲しく、況していさゝかなりと疎いやうすが見えたらば、身も世にあらぬ嘆き、此の心づかひ我ながら仇をろそかな事にはあらじ。さりながら

其後しばしの疎遠も、初めこそ心も身に添はぬまでに悶えて、いつそ耻捨て、營所まで尋ねばやとまで思ひたれ、こゝろ慎み、不義理をわれにする主でなしと、いつに似げなき疎客が一期の不覺、よく／＼糺せば、をかしからぬ不しだら酌さ、えゝわれも愚にかへつたぞ、弛んだ心へ魔がさして、かりにも近郷に謳はれた今も金が、碌でもなき兵隊づれに肌荒らされ、散々に玩弄び物になりくさつたか、えゝ業腹な、業腹な。

とはいへ、あの人の柔しく、どこまでも親切に、真面目過ぎてても、浮氣といふたら、微塵なかりしあの人が、今聞いた事が定か、嘘か、あの真面目くさった、それで柔しい親切なあの人が、浮氣の出来さうもなき、いや仕さうもないあの人が、これが本のこととして夢のやうな、われとても十五や十七の恍惚子ではなし、數へれば愧かしい、男より一つも上の身で、それもあいそれと肌ゆるしたことか、考へに考へた揚句の果て、父親はわれよりさきへ惚れ込んで、どこまでも堅い、素直な頼母しい男と、賞めて、賞めて、賞め抜いた人、いつぞやの身の上ばなしにも、おれは不仕合な獨りもの、一人の叔父があれど、われを甥あつかひせぬほどの大信仰、よろづわがする事に加擔して下されば、お前を連れて歸らうと、ま

たこちらで世帯持たうと、否はどうせ言はぬ、おれは詰らぬ男なれど、我が口よりは言ひ悪いが、これでも人よりは柔かでない積り、うつかり事に乗らぬかはり、一たんかうと思つたら、それこそ命かぎり、旅でこのやうな事仕出來して、餘り奇麗な事は言はれた段ではなけれど、それもたゞの浮氣と思ひたまふな、平生儕輩の色話し、苦い顔で聞いた身が、お前にかう打込んだは、八幡色ごのみでなし、そのすつきりした垢のない氣性が嬉しくて、他人のものとするが嫌さ、それが抑々初り、見棄て、下さるなど、口重な人がいつもより一倍堅苦しう言はれたこと、考へ出せばこれも人の猜みか、たゞし慰み半分には嘘して見るのだらう、いや／＼かう長う來ぬからは、屹度どこにか増花をこさへて、そうよ、あの容子では、こちらからはまらずとも、蓮葉な娘子供や、浮氣な後家なんぞ、随分と引つ張つて、ツイその色にならうよ、そうだ違ひはない、えゝ業が養える。

お近は道に銃介を失ひ、怒氣一時に頭にのぼり、抑へかねし折柄、顛未知らぬ父が折檻に、

こらへ、じやうなくくツてかゝりて、言争ひしが、仲直つて後、父も仔細を聞けば、聞き捨てがたき其始末に、持病の性急嚇と逆上せて、當の相手は、我が娘かといふ見脈、叩きばえもなく、さゝくれし爐の縁を煙管の雁首も潰れるとの打擲、われもそなたに劣らず彼を頼母しがりて、ナンの一ト月や二月無沙汰するともろれは何かの都合、未々愛相づかしするやうな男にわらずとよくよく見込んで、其頃なんともいひはせぬど、そなたが少しの事にも氣を揉むが心で可笑しく、武く見えても女子は女子、心は男の廢棄よりもまだく小さいもの、いづぞやまでの不敵な根性、あれは一時の氣紛れと悟つて見て、それにしてもあの銃介といふ男、天晴な器量もの、兎角がサクとして賢過ぎる當世の若いもの、中に、珍らしい落つきやう、おれの鬱陶しいは持つて生れた質とやらで、今更直さう譯にも行かぬが、全躰おれはあのやうなツツシリした、落付き切つた男が大好なり、話して見れば、飛んだ立派な口も利けど、世辭一つ言はうでなし、元來此の世辭といふやつ、碌でなしの抑々にて、おれは世に何が嫌ひとて、蕪とおへつほど嫌ひなものはない、こゝら界限の腑抜け連中は、イヤ何で御座る、かで御座ると、何かにつけて世辭のいひくら、金がかかるものではなし、唇は袖口より強いも

のと、盛り上げての大安賣、輕薄も輕薄、追従も追従、おれは無學で知らぬことなれど、孔子様も、ホウケンレイシヨク鮮し仁と言はしやつた、これはおへつといふ奴はおれは嫌ひだといふことだど、おれの親爺がいふて听かせた、村長の馬鹿野郎も、一月八圓なにかしのはした金を村から貰つて、いゝ氣になつて威張りくさる、餘り面が憎いから、うぬが親父は人の芋たね盗んで村役所へ二度まで引かれたを忘れるなよといふて呉れたら、八藏の野郎はまた取持心で、あゝまりな事を言はつしやるなど言ふ、何があんまりだ、おれが親父が芋たね盗んで、よし加他人のものを盗んでよ、業晒しな、村役所へ引かれたといふことは、誰れ知らぬえものはねえ話した、嘘だと思やア、そこいらで細かに聴いて見ろ、全躰奴等は村長が取巻になつて、うまく太鼓をたゝさやがる、鯉節の出し殻でも貰はうと思つてたらうが、餘んまり情けぬい根性だど、腹が立つたから思ひさま言ふてしまふた心持のよさ、おれは此通り追従嫌ひ故、そなたはあの小黒い男振りに惚れたらうが、おれはまた何よりあの素ツ氣なしなところに惚れて、見て居る、近メ、あの目付では、今度といふ今度はいくはへ込むぞ、何もおれとて身持のいゝ方ではなし、女と生れた甲斐に一期の手柄をせうといふに、野暮な邪

魔を容れるでもないど、黙つて見て居たわ、それもうさんな男ど、たどひ少しなりと見て取つたらば、此一酷^{くつ}あやぢ、いつかな承知することではなけれど、今思へばこれも何かの罰か知れぬ、生れそこなひのやうな親子が、揃ひも揃つて迷ひ込むとは、よくくゝの因果だと思はれるナ、それにしても、過ぎ去つた事は、何も呆らめて呆らめられぬわけもなければ、それは随分辛抱もし、また我慢も出来るが、欺されたが心外、つくくゝと腹が立つ、おのれ天道様も御覽なされ、此あやぢ、いッかないッかな許して置くこッちやアねえ。

ヤイ近、手前はよくオイ／＼と吼えやがるが、全躰どうする積りで居やがるんだ、いくら罌丸がねえからツて、よくもさうおッ續けて泣かれたもんだ、まア吼えるを見合はせて、ちッとおれが言ふことに挨拶して見ろ。

手前はなにか、どんな業晒しなごまアしても、一度惚れた男だから言分はねえと言ふのか、ウ、怨みは男にねえと言ふのか、コラ泣いて居やがつちやア分らねえや。

あ、あつまり、お父さん、ば、馬鹿におしでないよ、お前に言はるゝまでだと思つて居るのか、野呂馬くさ。

ナニ野呂馬くせい、ウ、おれの言ふ事が野呂馬臭い、よし野呂馬くせいなら野呂馬くせいでいい、しかし、こつちはこつちでまたちッど了簡がある、念のためだ、どうするか言つて見ろ、ウ、どうする。

どうするものか。

どうしやがるんだ。

なんでもいいやな、私しも今お金だよ、あつまりお前の顔も汚さねえやうに、見事ヤッてお目にかけるから、そう案じてお呉れでない、馬鹿らしい、これでもまだ色男の始末までお前にしてもらふほど碇碌はしないんだよ、お氣の毒さまだ。

ウン、御大層な口を聞きやアがる、いゝは、如何にも案じねえで、其の御手際を見せて貰はう。

是非見て戴きます。

見るとも。

屋のしろに鴉五聲、爐火消え盡る六疊に、お近が白き顔のみ暮れのことす。

『進めや進め北京まで』と、小供が謠ふ軍歌の調べは、取りも直さず四千万人が意氣込みにして、此頃は三里が山の奥までも配達が抱へ行く日々の新聞は、ひた／＼と大戦勝を報じ續けて、日本萬歳の聲は舌も廻らぬ二ツ子迄が、守りの背上に片こつ勇ましさを、聞けば今陸は鳳凰城とやら、それも翌の新聞待つ迄もなく、早や取れたるべし。其の時手廻りも其の如く、赤羽の工兵隊も、これより先き出發の命令今や遅しと將校下士卒擧つて待設けつ、日毎に來る攻城畧取の公報に、手柄の地域日一日と他人に狭めらるゝ心地して、さらでも氣あらしき武夫の胸は、踏鞴を以てせめらるゝが如く、熱くなりもなつたり、あらゆる煩悶の仕かたを試みつくして、尙其上の術なき、悲憤の極は自から欺く浴酒三昧、上戸は上戸なり、下戸は下戸なり、それ相應に若干の強えを我からして、けふは恰も日曜なれや、さしにも廣き赤羽が村も熟柿の臭ひに餘地ぞなき。

已にして、夕陽幾里か向ふの雲に落ちて、家々の竹藪に狂ふ雀の姿早や寂しく、漠々としていづこ涯りか、しら驚の聲落し行く青田の葉さき戦ぎ出で、東の空にはそれとも分かれぬ

形ばかりの薄月を見る涼しさ、今ぞ鳴る漁笛の聲は、出るか入るか、入間の里はかなたに遠く、畦に植ゑたる榛の木長く列るそこを透して、近々に見ゆる竈の火は、これも赤羽の枝村にや、河傍ひ堤に螢見えぬ。

けふしも役場に恤兵法の相談ありとて父は羽織かけて出で行きたり。お近は面白からぬ此ごろなれど流石に張りある女なれば、鬱鬱時もあり、泣く折りもあれど、うち沈みて幾日も其まゝはあらず、父のが済みて、やう／＼に身に廻り來し着捨の洗濯、袷を解きて、糊着ひて、やがて張り板を日當りよき軒に立てかけつ、雲を仰いで時刻を考へ、濡れたる諸手を前垂に拭ひて、臼の上なる木柀取り上げ、桶を片手に米櫃へ近づく折しも、踏めばガクリする石橋を越えて靴音庭に聞えたり。戸籍調べはきのふ済んだに、よく來るヲと、知らぬ顔のうしろ向き、五合量つてあどは一攫み投入る後ろに、オ、一人か、お父さんはど、いひかくるは、我折れ、巡查の三橋と思ひきや、先刻獨りでツク／＼と怨み怒りしヤクザな兵隊にてあらんとは。

思はず嚇となりしが、素知らぬ顔を辛くつくりて、ドレーツ洗つてとは小憎かりし。オイ

「あれが来たんだ、しらばくれちやアいけねえぞと、上り端にドツカと腰うちかくる拍子に、佩剣柱にブツカりて、コチンと音しぬ。」

流しへ桶を載せて、さて水となりしが、笑止の事に、水は甕になみ／＼満つれど、それをすくひ出す柄杓がなし、其の柄杓はツイその臼の側に、先きの程洗濯に使ひたりし手桶と共にチャンとあること頗る承知なれど、取るには後ろ向かねばならず、後ろ向くには仔細なけれど、上り端の貧乏神に顔見られんこと忌々しく、霎時當惑の目付してあちこち見たりしが、こはそも如何に、洗ひ桶を無三に甕へ押し込みて、粉糖に甕中の水の矢庭に真白く染れるを見向きもせず、水は汲みたり、得たりや應と、磨ぎ初むる音ゴシ／＼と元氣よすぎるもをかしや。

ハ、ア思はせ振りで御座るかど、いつになき口軽なるも道理、涓滴の量なしと稱して、酒と名の付きたるは甘酒さへ厭といひし男が、何事ぞ、酔顔紅を溶きて、その餘波は手首にまで及びつ、胸先のボタン外さば、そこも無と忍ばれ、仰向きて面白さうに見ながら吐く息のさも熱々しく見えて、五臓は煎え立つ鐵瓶かと思はれ、呂律不たしかの舌をレロ／＼廻はし

て、もう澤山で御座るて、大半も過れば澤庵に劣るかね、それよりどうぞその玉顔を、その少々ばかりこつちへお向け下さる譯には、アハ、ハ、お向け下さる譯には成りませぬかね……コレサお近、ちか、近林曹長、あれが一ツ謠ふぞ、ア、死ぬに枕がコリヤいるものか——て——んだ……何ぞ——恐れんわアれに鎌倉男子あり——てんだ……五月蠅いッたら五月蠅いよと、目に見えるものなら稲光りといふやうな、極めて氣味わるき聲のするよと思へば、桶をそこらうツちやりて、いきなり有田が前に立ち塞がり、うち立ての綿のやうなる右手をあげて彼が頂を丁と打つに、然しながら中途に少しは遠慮の氣味も出しか、又は全く手先の狂ひにか、少しく外れて肩をたゝきぬ。

飛退きて、コラ申戯をするな、打たれに來たンぢやアないんだと、捕へられじとするお近が手をぐツと握りて、先づ久しぶりで其が顔を見るに、眼中の輝き穩かならず、われを死ぬよと睨めり。

カラ／＼と武者笑ひして、何をそうすねるんだといふ頃は、酔も聊かは醒めたるやうにて、顔に品格も復り來れり。此時お近は尙も銃介が顔を見詰めてありしが、其態何となく談判甲

斐のありやなしやと、酔の加減を見定めんとするやうに見えしが、瞬き一つは決意の表現、少しく姿を正して、銃さん、お前わたしの言ふことが譯るかえと、言ひ出せば、酔ふた男は相手の氣色に頓着なく、『馬鹿』の『馬』までいひかけて、更に『篋棒』と直し、篋棒め、おれだつて耳があるぞと威張る。ホ、耳がある、ヂヤア静かに聴いて頂かうネ、先づようぞ御立寄り下さいまして、誠に有りがたう、ネ、いゝでせう、それから聞きたい事があるが、お前はナ、いづぞやわたしに何と言ひましたえ、いつつてもうそれさへ忘れたかえ、情けないねえ、ヂヤア申して見ませう、日は忘れたけれど、一年に幾日もは無い筈だ、其日は丁度紀元節で、お前は禮服を着て來た日だ、親爺は留守で、私しが一人ツきり、なんだとえ、冷かすならいくらでも冷かしなざるがいゝサ、もういくら冷かされても構ふもンか、それからお前が上り込んで、それから私しと話しをした筈だが、サア其時何といひましたえ、ナニそんな話しを一々覚えて居るものかと、オ、精出してとぼけるがいゝ、だが銃さん、お前はあんなことをもうそこいらで幾度も言つたらうが、私しの方では後にも先にもたんだあの時一度だよ、いゝかえ、サア其の大事な話しを、お前は何といつたかえ、それでも思ひ出す位な事は

出來さうなものぢやないか、私しヤアこれでもまだちやんと覚えて居る積りだが、ねえ銃さん、浮氣はいくらでもする、貴様は一ツ時の玩品だから、さう心得ろつて、たしか仰しやつたでせうねえ、えゝえ、それに違ひないンです、誰がまた男の身としてサ、ま、女でも一人前あるものには出來ねえ二枚の舌を遣はれませうサ、えゝえ、だめです、ソンの言譯はもう少し前にして貰ひませうよ、えゝえ、だめですつたらだめです、胡摩化しならもう充分に頂いた、えゝえ、もう澤山です、いつかあの道で逢つた時もよく逃げやがった、えゝえ、う言譯はいらねえ、ヘン私しも今お金だよ、迷ふ時は迷つても、醒る時は醒るンだ、サアかうなりヤア、おれはおれ、手前は手前さ、色でも何でもねえ、赤の他人だ、しかし待つて貰ふよ、どうせ貴様見たいなヘチモクレと一處にならうといふ氣はもう微塵もねえが、おれも赤羽の今お金だ、うぬら風情にたぶらかされて、おゝさうかと黙つちやア世間へ對して居られねえ、欺されただけの方は、逢つたが幸、たつた今チヤンとつけて貰ふから、ヘン糞を喰へ、今になつて迂つたも轉んだもいるもンかえ、サアどうだ、どうして呉れるンだ、間拔え、其のしヤツ面ア何だ、何とか早速に申上げろ。

と言ひ終つて、握られし手を邪慳にぐツと引き抜き、ナニなんだと、これには譯があるツて、譯は追分だ………こん畜生、あれといふものがあるに、ふざけた真似を仕散らかしやアがツて、業が煎えて業が煮えて、どうもかうも仕やうがねえワ、なにを申戯をしやるがんだえ、どこぞそこの後の後家のどこへでもいつてそうしやがれ、止せといふに止さねえか、うぬ。

忽ち腕と腕は空に闕へり、銃介もまた立上らんとして、不運に佩劍をかたへなる俵のあはひに介み、よろ／＼としてお近に凭れかゝるを、逸早くかはせば、そこにて辛く一たび止らんとせし身の、またもや支を失つて、酔體は甲斐なくそこに轉びたり、劍は同時に鞘を脱しぬ。

お近は猛然と走り寄りつ、見れば既に馬乗り踏踏れり。うぬ、ど、いが栗の後頭を抑へて、うぬ、ど、こたびは力を込めて額を地に擦り付けたり、下より何かいへど聞き取れず、この野郎メ、この野郎メ。

戸口は遽かに開きつ、親爺は不意に歸り來れり。かくと見るより、お近は抑へし双の手に

思はず満身の力を込めしが、手近く落ち散る銃介が劍の明晃々たるを目さどく見付けて、一瞬忽ち右手に取りぬ。

待て、續いて、馬鹿阿魔、これは親爺が聲にして、同時に躍つて我を後ろより抱きたり。

劍は危く銃助が襟元に尖頭を觸れて、また忽ち他が手に奪ひ取られぬ。

馬鹿阿魔、危ねえ事をしやがる、ど、いひ／＼、親爺はお近を引立んとするに、構つちやアいけねえツたら………ちツ馬鹿おやぢ、………譯らねえか………お手際を見せるんだ………お近は咽かざり。

銃介、サ早く起ろ、早く、ど、珍らしき優聲なり。お近は崩れ髪も堅てんばかりの勢ひにて、親爺が一心不亂に抱き居らずば、いつ飛かゝらんや知れず、畜生放さねえかと、二度まで父の手へ噛み付きたり。

これサ、静かにしろ、まア／＼と通りたれのいふことを聽け、成る程手前が怒るのは尤で、あれさへ實は手前が餘り腑抜けだと齒痒く思つた位だ、然しナ、こゝだ、こゝを氣をどめて聽いて呉れる、手前も知る通り、今は日本と支那と戦争の最中だ、今迄は運がよく勝ち續けて

来たことは来たが、支那は中々大い國ヂャアあるし、これから向ふどうなるもんか譯らねえ、けふ役場で聞きヤア、この兵隊も近々に出るさうだが、コレマア動かねえで聞け、成る程銃介も憎いにヤア違ちがいねえが、ヤツぱりこれでも日本の兵隊の一人だよ、いろ／＼と皆が工面かづぶをして、金を出すの、物を献上するのツて、軍に勝つやうに心配してゐるに、此の體格のいゝ立派な兵隊をサ、いくら憎いにしろ、いくさもさせねえで殺さうとは馬鹿なこつた、第一國の損てえもんだし、それに人聞きも悪わるくツて溜ためらねえや、おれも性分せうぶんで、かういふ事にヤア人より一倍力を入れるといふ奴やつで、今度の金も娘を女郎に賣つても、コレサ賣りやしねえよ、まアサ話しが、女郎に賣つても七圓は出すツていつたら、皆が魂消たまげやがツた、どうだ、たればさういふ意氣込みなんだ、サアかういふ事を考へちヤア、手前てめもいくら向ふ見ずでも殺しちヤア濟たすむめえ、ナ判つたらう、銃介も銃介だ、かツちで不人情された覺があるだけは、貴様もおれたちに不人情をした覺えがあるにちげえねえ、いゝわ、そりヤアまた貴様あなたがもし息災そくさいで歸つたら、その時しかと埒らちをあけるから、まア一心に働はたらいて來い、ナニこれこれで帳とがを消すツてえんどやねえ、お近もまたもちツと根性こんじやうを大く持つて見ろ、銃介位ぐれの殺しても、

日本が負けたと來ちヤア、根から詰らねえ話しぢやねえか、お、銃介、時間が後れやしねえか、歸るがいゝぜ。

時間の一言は有田上等兵の耳に鋭く徹したり、これより先き、彼は静々と身を起して、身邊の汚れを拂ひ落し、衣紋ゆたかに繕ひ、革帶の向きを直して劍を鞘さやにをさめ、雙手を垂れて親爺が拙こき演説を黙聴しけるが、其時の姿勢は、正しく長上の仰せごとを謹承する如くに神妙なりき。かくて帽子を取り上げしが、何故か尙言葉はなく、一揖して戴き、出んとして、其間に、嘲蔑を意味せる瞳子の一閃をハシコクお近が上に呉れたりしが、冷然として、笑みも響ひびみもなく、今は殆んど平生に戻りし顔色を保ちて、歩武整々と、少しく小刻みに、早や彼の石橋をも越えたり。

親爺は見送り果て、娘をソツと放し、斜に其顔を覗きたりしが、瞬まくを忘れし双の眼はキラリして、唇より血はポタ／＼と零ちぬ、黒髪は亂れ、帯はしどろ、然も尙前のまゝ突立ちて外を見續けぬ。黙つて行きたア太たい野郎だと、親爺も拳こぶしを握りてヤイヤイ呼はれど甲斐なし。

涼風一陣、手水鉢に傍ふて六七竿の背高なる篠ありき、其梢のサラ／＼と鳴りぬ、折しも丘上に喇叭の調べ朗かに聞ゆ、近ければ近衛の方にや。

五

或る夜半、兵營の高みより停車場へかけて、氣味よく揃ふたる靴音して、霎時引きもきらず、やがて天地も轟くばかりに拍手の響き聞えたりき、第一師團、兵隊は素願漸く達して今正に出陣せるなり。

程經て第二軍は無事に花園口に上陸なしぬ、續いて金州城は其手に陥落せられたり。東京附近の人々はちのが子供が功名のしらせに、まづは一時の心づかひを醫したり。

たしかなるしらせに、第二中隊の有田上等兵は、金州城の攻撃に負傷して、廣島の豫備病院に送られたりといへり。

此頃また赤羽の人々は、お近が鎮守の社に日參するを見、日頃に似ぬ未練の事よと罵り合ひぬ。お近が父は、其後心さま換りて、また昔日の如くに暴れずなりしも不思議なり。一宵父娘爐邊にさし向ひて、間違ひといふものはいかねえものだ、手前も濟まぬえ事をしたわと、

愚痴らしく親爺がいひ聞かせしを竊み聞けるものありて、銃介との事ならんと註釋して人に語りぬ。其男は百一といふ有名の嘘つきなれば、人々よきほどに聞きけり。

かくてまた幾何の月日は過ぎつ、世は再び安らかになりて、在清の諸軍ねほかたは凱旋なしぬ。其後ある日の官報に論功行賞の續きを讀み行けば、

叙勳八等賜瑞寶章 陸軍工兵二等軍曹有田銃介

幸に負傷も大事なかりしと見えたり。されば今赤羽の營中にあらんこといふまでもなし、既にお近父子との會見はありやなしや、門の石橋叩けどいらへはなかりけり。

花 一 枝

去る夏は先生に従ひて箱根へ行き、遂に歸省をなさりしかば、正月の休暇を幸に久々にて家に歸る事とはなりぬ。

宇都宮までは午後の瀛車にて充分間に合へば、上野の二番に乗りたれど、赤羽にて車を下

り、友人の工兵隊にあるを訪ひしが、次の列車の時刻を計り、別を告げて停車場に出でぬ。待つ間程なく瀛車は來りぬ。急ぎて改札所を走り出で、窓より覗けば、どういふものか非常にこみ、古い言柄なれど、錐を立てん隙さへなく、當惑してあちこち走せ廻るに、オイ早く乗らんかと驛夫は促す。やがて開けて呉れたりし室へ辛く乗り込みぬ。

こゝは幾分か外の室より客は少なきやうなれど、さりとて見廻すところ、あいた席は一ツもなし。立つてるのかと、思はず眩やく折りから、こちらへお掛けなさい、といふ優しき聲胸のあたりより聞ゆ。難有しといひながら、窮屈を忍びて其處に腰を下しぬ。これは向ひに腰かけし若き婦人が其手荷物をとりておのが膝に上げ、さて其席を吾に譲り呉れたるなり。

腰をかけて態度定れば、先づ仰ぎて彼の深切なる婦人を見つ。ドンナ身装なりしか、武骨の吾は深く氣を留めざりしかば、今記せざれど、羅紗の肩掛に半ば身を包まれ、草色縮緬のお高祖頭巾を冠れり。年は十八九なるべし、色くっきりと白くして、峨眉紅唇、くもり眼鏡をかけたれば、眼はよく分らぬど、すぢ亂れず、二重腮、先づ先づ餘程よき方なるべし。吾に旨い詞藻がなければ如何とも詮方なけれど、今若し吾が胸に残れる其像を寫し取る術あらば、

彼の小説家とかいふ人々に見せたきものなり、定めてすばらしき形容をなすなるべし。

あたりの人々が傍觀するに、先づ席を分ち呉れしは、若きに似氣なき殊勝なり。それも帽子外套打扮いかめしき髯紳士ならば、たどひ後には命から二番目の五十兩をお掬取り遊ばす御方なりとて、先づ十人が十人恭しく奉ずる浮世のならひながら、吾は寧ろ嫌はれざる襤褸書生なり。今の身分には甚しく生意氣な言葉なれど、これ既にいたく心に叶ひたるに、加へてかゝる美人にて吾と膝を交ふるなれば、満腹の愉快はこみあげて危ふく面に顯はれんとせしこと度々なりき。されど非常の辛抱にて、やうく撫で下して素知らぬ顔を入に見せたり。木石ならざるを咎め給ふな。

一事氣に喰はぬは彼の眼鏡なり、これは屢々生意氣な女學生の上に爪弾きしつゝ見たりし面影の今尙残れるなり。

汽車は次第に進みて早や大宮を過ぎぬ。右には眼付忌はしき土方風の男、左は八十ばかりと覺しき老婆にて、其他は概ね田婦村童、さらば異様の日光道者なり。見渡すところ話し相手となすべきは此の美人のみなれど、兎角怯れ勝にて一言も發し得ざりき。

新聞だに欲しと思へど、この邊の驛々には賣子も見えず。是非なく袂より深くは嗜まぬ巻煙草を取り出して口にくはへ、燐燧を一擦したるに、車體の動搖に、付きもせぬに消えたりき。擦れば消え、擦れば消え、空あかに五六本費してけり。焦れながらも尙燐枝を出さんとするに、これはまた困つたものかな。早や絶えてあらず。

空しくあたりを見廻すに、外には煙草を吸ひ居る人も見えず。手首尾懸しけれど、袂に收めんとする折柄、彼の美人は莞やかに聲優しく、お使ひなされませとて、膝の上なる包の端より、舶來マツチを出してさしつけぬ。

こは辱けなしと遠慮なく借り受けしが、此度は不思議なほど移りよく、一本にて事足りたり。禮を言ひて返し、が、美人も此時煙管をとり出して一吹なしぬ。煙草入は襦珍の美はしきものなりき。

かくて美人は道具を包に納め、隣にありける若き女と語り初めたり。余は先きに此女を見落したり、さてこそ田婦村童と、日光道者と、老婆と、土方の外に何もなきやうに書きたれ、疎忽の段は勘辨あるべし。さてまた話の方は、『那方はどちらまで乗りで御座います』を皮

切りに、來し方行くへ、故郷、住家、其他いろくくと込み入りたるやうす。其のまた女は、をかしき島田髻に、白粉濃く、口紅厚く、衣類より手廻まで、卑しきまで派手々々しき、問はでもしるき田舎の藝妓か、さては酌婦なるべし。

美人は語りぬ、眼が悪き爲、一週間に一度づゝ都に出で、さる先生の診察を受くるなりと。さてはさる事情ありての眼鏡なるか、さりとは知らず、輕々しく思ひおとしたる哉と心の裡にいたく耻ぢつ。これにて無垢圓滿の美人なり、眼は分かねど、病だに治まらばなどか鮮やかならざるべき。かくも優しく、かくも深切なり、卑しからずしてまた餘りに氣高からず。吾は彌々氣に入りて、よき女、よき女と、心中に頻りと褒めたり。

さるにてもこれ何者ぞや、風俗の醜くからずして、さりとして派手に失せざるを見れば、良家の子女にやあらむ。さりながら餘り慣れたり、町家などの若細君か、かゝる事に眼を有たぬ書生なれば、それとも分かず、只管に想ひあこがる。

彼の土方風の男は腰をさぐりて煙草を吸ひ初めたり、吾もまた火を借り受けて同じく吸ひぬ。此内美人と藝妓風の女はまだ話しを絶たざりき。穩やかにして滑らかなる美人の咽、か

んばしつて、劍氣多き藝妓の聲、湊合極めて妙など、腹の中にて評を付け、面白がつて聞き惚れぬ。やがて心付き煙草の頭を吹ければ、あはれ火はいつしか消えぬ、願れば土方風の男は既に眠れり。またお貸しなされとも言兼て、其まゝ煙草を膝に落したるに、何の機か、美人は遽かに吾が方を顧みて、此の當惑を知りたりけむ、嫣然また燐燧をとりて我が手に授けぬ。添へていふやう、いつまでもお使ひなされませ、御遠慮なく。これまた吾が直ちに返すを氣遣ての言葉にあらずして何ぞや、吾は無言に一禮、心中に『感謝』

やがて難有といひながら燐燧を返したれど、美人は知らざりき。是非なく其のまゝ包の上にし置きぬ。彼の藝妓風の女は唇さまで薄きもなきやうなれど、極絶の多辯にて、さながら百舌の囀るが如し。美人もまた沈鬱の方にはあらず。されば話しは尙霎時断えてはまた續き、續きてはまた少しく絶てり。

美人は藝妓が身の上の艱苦を訴ふるを聞きて、これに自己の意見を表白し、さては世上の男子をあげつろひ、百方面のしなだめ、縷々として語り進みしが、余は遽に躍り上るばかり愕きたり。其愕きは熟睡を地震に覺されたる如き愕なりき。美人は問はず語りて其身分を

白状なしぬ。ア、右の如くに崇拜したる此美人は、さしも卑しめし彼の藝妓と同じ流れ……
某酒樓の酌婦なりとよ。

如何に世情に疎き吾なりとて、かくまで迂濶なりつるか。硝子を以て水晶とするは、未だ全く愚といふべからず。如何に掬ひはせざりしにもせよ。泥水と清水とを誤りたり、誤りたりと悔ゆる心は、いつしか變じて欺かれしと怒り初めぬ。笑止千万、何時誰か吾を欺きし。

かく思ふては、さしも信仰したる女菩薩の今は見るさへ屑からず、耳に入る一言一句、先きには何より快よく通りしが、今は早や嘔吐を催すばかりになりしこと不思議歟。思ふに其温顔は故らにつくるところならむ、其嬌語は知らず幾何の男兒を迷はせつる、悪魔メ、外道メ。

されど吾とて初めて此種の婦女に會ひたるにあらず、さるをこれに限りてかく不快を感ずるは、正にこれ盛夏浴後の新涼ならむ。

かゝる話がかまへて聞かむと、歩みて窓際に立よりつ、迎ふ山、送る林、鉞をかたげて歸る農夫や、瀛車を待つて日本万歳と叫ぶ小供や、何や彼や、例より心を入れて見つ、辛う

じて思はしき物語りの聲を耳にせざりき。

景色は一變せり、万頃の水田氷に閉されて遠く亘り、白衣をかつぎし筑波嶺は、雲か霞にほの見える、行けども行けどもあたりは田、時しも暮れかゝりければ、山は次第に黒み行きて、行人やうやく稀に、風情はまことに薄し、徒らに俯して唾を吐きけるが、いつとなく思に沈みて、やがて遽に思ひかへしたり。吾ながら餘りに輕躁なりき、よしや泥水にはあれ、清き蓮のなからでやは、よしやまた生ふるは蓮にあらざとも、吾これを手生とし眺むるにあらず、さまで嫌ふことかは。

席にかへりぬ、さてしづかに美人に横顔を竊み見つ、泥水か泥水かと眺めたれども、顔は全くどこまでも清かりき。されど今は愛らしと思はず、たゞ單によき女と思ふのみ。

かくて漚車は栗橋より進みて古河に近づかんすとす、やがて進行は弛やかになりぬ。此時美人は襟などかき合はせ、包みをとり上げしが、上には余がさし置きしマツチあり、軽く手にとりて吾に打向ひ、もう僅かになりましたが、私しはこゝで下りますから、お使ひなされませとて與へたり。余が手にて受けしか、美人が吾が膝にのせて呉れたりしか、どちらか今は

忘れたり。此時は如何に泥水なりとて禮をいはざるべからず、余は形の如く、難有し戴くべしとぞいひける。

然し全くの處をいへば、余は遽に心ドキマキして從來の一切を忘れ果てしなり。

美人は立上りて先づ藝妓風の女に別れを告げ、さて次には余にいひたり。いかにも穩やかに、且丁寧に、失敬したりといふ意味を述べき。間もなく漚車は停車場に着きて全く進行を止むれば、驛夫があくるを遅しと美人は出で去りぬ。違ひて入り来る二三人、扉は音高く閉されたり。

此時余があたりすに拘くわ賊ぞくあらば、余はありもせぬ財囊をやられしなるべし。恐らくはをかしな顔を人に見せしならむ。

諸君は當時余が腦髓に、尙泥水てふ觀念の附着し居たりと思ふや。

漚車は一聲の漚笛と共にまた軋り出しぬ。出で行くこと十間ほどにて、早や辛抱し切れず、窓より覗けば、あたりにまご／＼する人はあれど、美人の影は既にいつくへか去りてあらず。悄然として停車場の色燈影消ゆる迄見送りける。

煙草の吹売一つも、よく千里の野を焼き盡くすといへば、燐燧一箱は、愧かしながらげに悔りがたし。

雲がくれ

月は早や入りて、曉にはまだ程遠し。明星の光り薄雲を被ぎて微けく、木下闇いやが上に黒かりけり、篝の煙火木立隔て、稀々に立上り、非常を戒むる柝の音もやうやく絶えて、修羅闘場の危境にも天地草木は心措かで皆眠りぬ。

梢を拂ふ松の聲も雲時やみて、麓を廻る潺々の響き今更に音を増したる時しもあれ、俄然に耳を貫く銃の響き。

心まで眠らねば、素破やと睡眠摩る違もなく大刀押つ取り、同時に立上る陣々の將卒、夜討か、裏切か、所はいづこそ、狼狽へな、惑ひそ、馬曳け、槍取れとかたみに罵り叫きてかけり廻る。其が上に馬さへ驚きて嘶けば、こゝかしこに起る響は、さながら百千の雷が一度に

落ちかゝる凄みをなして、さしも閑寂なりし世界の夢を破り、走せ交ふ松火は東西南北、程近の出丸に固むる敵兵共は定めて膽を冷やしたるべし。

茶臼山の本陣には翌の寄場を如何にせんとて、頭人の輩皆大御所の膝下に集ひて、更くるまで軍議を凝らし、が、評定一決してやがて各々退散せしは、早や子の刻過ぐる頃なりし。其夜宿直の輩には究竟の勇士共百人あまり、門々厳しく守らせて、やがて大御所も雲時まどろまる。

大御所は老躰の間もなく厠に起き出で給ふ、近習の士、一人は燭を取りて前に在り、一人は大刀を捧げて後邊に従ひぬ。

厠はや、隔りたり、雲時渡殿を傳へば、御目を慰めんとて移し植えけん、南天燭の丈け高く茂りて黄ばめる實のいとよく着きたるが手水鉢のかたへに立ち、雨にうたれて蒼く鏽たる銅燈籠の明り微けきが平たき石の上に住へり、若松の繁りては芝生の如く、名も知らぬ虫の孤り鳴くなどあはれなり。かくて大御所は厠を出で、手水鉢のほとりに立寄り給ふ時、忽ちに風を切つて飛び来る彈丸あり、全時に響く筒の音、大御所は射られやしけむ。あつと叫び

て伏し轉び給ふ。狼藉者あり出合／＼と呼はりながら、近習は心利きて二人して大御所をかき抱きて急ぎ内に入りぬ。されど追ふ者もなかりし。

此聲はよし聽かずとも、陣中にあるまじき筒の音をなどか疎畧に思ふべき、追取り刀にかけり來る宿直の士等、門々を固むる者共も半は氣遣ふて來り合はす。さゝやかなる南燭天の影には童も忍びがたく、椽の下、木立の中、隈なく探り求めたれど、曲者はいづちに潜みけむ、在らず。

大御所を氣遣ふ餘りに、憚りの關さへうち越えて入らんとするもの多かりけれど、いつも侍る本多佐渡守正信、老功の士にて心賢ければ、此騒亂にも動する色なく、泰然自若と次の間に坐し、禮を忘れし人々を制して入れざりき。

正信やがて渡邊半藏に下知していふ、用心をさ／＼怠りなきに、かくまで深く入り込みたる今宵の曲者はたゞ者ならじ、御邊大義ながら、諸陣の輩集まり來て門のあたり混雜せん前に、此の曲者を狩り出したまへ。

半藏欣然として辭し出しが、やがて高らかなる點呼の聲を聞く。

半時程經て半藏は來りぬ、如何なる奴なりしかと、正信はいそ／＼尋ぬるに、半藏は面なげに、やつがれ計を案し策をつくして隈なく搜し候ひしも、曲者は逃げしか、潜むか、遂に尋ね得ず候ひし、其計策仕方はかく／＼なり、今は途方に暮れて御不興も慮らぬにあらねど、さりどて是非もなければ、あめ／＼かくは參り候ひしなり、よき御計りごとも候ふやといふ。やがて慷慨面に溢れて、本多殿、まことに天晴の曲者にて候。

正信は絶えて怒らず、半藏が述ぶる所を靜かに聽きて、尙首を傾くること暫くして、吐息と共にいふやう、渡邊殿、和殿の處置一々よろし、聊かのぬかりなく聞ゆ、正信とて其外に何事をか案じ得申さん、抑々彼に神變不思議の術あるか、但しは味方に二心を抱くの輩あるか、不思議の術あらば、そは如何に索むるも甲斐なし、反忠のものならんには事は却りて靜かにこそ、さらば和殿は門々に下知して、見舞の輩を通させ候へ、但しいふまでもなく事は嚴かに。

唯々として半藏はまた立上りぬ、去りかけて密やかに問ふらく、大御所は深手に在らずと思ふが如何に、正信莞爾と笑みて、後にこそ分明なるべく候へ、まづそれに近し。

直臣は更なり、上杉伊達の諸侯も今宵の珍事に驚きて、我先にと馳参じぬ、大御所の恙なきを見て皆危みの眉を開くめり。

まこと大御所は爪の跡ほどの傷も負はれざりけり。名將は皆かゝるものか、笑ふて宣はるゝやう、われ初めて彼の如くに轉び叫びて今更傷なしといはれ、汝等は心密かに我を怯とし嘲るべけれども、若し我にして平然たりしならば、曲者は透さず二の丸を繼ぎて我を射倒さんこと必定なり、虎穴に入りたる彼の曲者は必ず死者狂なり、狙ふ我を倒さずば、死すとも止まんや、さるを追ひもせず、重ねて射かけもせざりしは、彼が心には早や我を死せりとし自から安んじられたこそ。人々齊しくあゝと嘆ず。

かくて夜は明けぬ、昨夜の騒ぎに万事合期ガツキせざれば、兼ての約束なりける、けふの城攻は止められつ。

大御所に智者の正信を加へたれば、些の弛みだもなし、表にはいと寛やかに大様を示せど、曲者の搜索はどゞ／＼油断なかりけり。

二日過ぎ、三日過ぎ、かくて既早十日あまりを経ぬ、聊かの手がゝりもなし、流石の正信

も稍々あぐめる色あり。

されど守備は尙固し、大御所のほとりには半藏等恩顧の兵共十人ほど常に侍りて、みだりに人の入るを許さず。

彼の事ありてこのかた、人々言ひ合さねど、心は一樣に、疑あらんを憚りて、未だ一人も外に出るものあらず、雑兵共のうちにやあらんと、監察の智に長けたる某をして、細々偵査せしむれど、今だにそれかと思はるゝ者もなし、状など通ずる事もあらんかと、門を出る折には赤裸にまでなしつ。

いくさはこれが爲に休むべからず、きのふも高麗橋あたりに砲聲を聞きぬ。

ある夜また茶臼山のさわがしくなりぬ、東西に馳違ふ諸陣の兵共、やがて馬を飛ばせて走せ参ずる連枝門葉の方々、將軍の入御を迎へし正信が眼には万斛の涙を堰きたり。

一室の裡に袖を列ぬる人は二三十人にも過ぎたり、さるに寂として音なく、稀に洩れ來るはすゝり泣き、咳く聲。折から風は死して雲動かず、星の一つどころにまたゝく。

雲の如く霞の如き此寄手を引受けては、如何なる孫臋吳起も堪ふべからず。智勇の將士も乏しからざりしが、次第々々に討死して、残れるは大方臍甲斐なき遊食の族のみ、數多かりし出丸さへ今は一つも味方のものならず。肉瘡骨細りたる大阪城は、恰も杖にすがれる餓鬼の如し。

花に咲萎あり、月に滿缺あり、春冬朝暮、あゝ此世は偏に興亡盛衰なり、藤門の繁昌も終りあり、平族の榮華も終には亡びぬ。されば強ちに千代万代とは願はじ、さりながら、聚樂行幸の轍の跡未だ消えず、八道遠征の旗幟やう／＼に收まりしばかりに、人もあらんに、我が天下を奪はんとすなるは、殷湯周武の聖ならで、食言悖德、言語に絶えたる家康づれとは。

落城は目前に迫りぬ。さしもの大野親子さへ近頃は殊勝に愛ひ顔あり、朝な夕な涕に沈む淀殿の御心は何ぞや如何ならむ、秀頼公を取圍みて如何にせむとて泣叫く局供もいと哀なり。城中今は擧げて顔色なかりしも、獨り眞田左衛門佐のみは平然として悲しむ色なく、靜かに帳臺の影に伏し轉び給へる淀殿の傍近く進みて申すやう、かくては既早一日も覺束なくこそ候へ、されど爰に聊か謀の候へば、翌一日はまづ長閑に暮し給ふべし、あはよくば、手の平か

へすが如く勝運に向ふことも候はんに。

流石幸村が言葉とて、皆々うはの空には聽かず、淀殿もやゝ頭を擡げ給ふ。治長は膝進まして、如何に眞田殿、御邊の智略は今に初めず、頼母し頼母し、さて其の謀といふはと思ひ入りて問へば、幸村淋しげにうち笑みて、成りたらばそれにて悟りたまふべく、成らずばそれまで、問ひ給ふ要もなく、また聞かし參らする要もなしと、菅なく應ふ。昔は坊門清忠楠が策を斥けて、南朝遂に榮えざりき。奇々正々、一々の中なしぬべき幸村が神算も、幾度か此の佞人に妨げられけん、恨は盡きじ千々万世、治長佛然として口を襟みぬ。

幸村は持口に歸りて樓門に座を構へ、只管に茶臼山の方を眺めたり。日は暮れ果て、四周の山々闇に隠れ、敵の焚くなる大篝の次第々々に消え失せても、流石に茶臼山のみは斷々續々、尙縷の如き光明を保つを見る。淀川の流れに近く、三ツ四ツ五ツ微かに浮動する燐火の主は先んじ、儕輩にやあらん。かくて夜は明けたり。

大度の幸村も安からぬ色ありしが、それもやがて消えて、彼方を見入ること初めの如し。陣々に鳴り渡る法螺の響は早や眞晝なるらし、日はやう／＼傾きて狭間の眞向を射て來る、さ

れど暑しと惱むけしきもなし。また暮れたり。

幸村忙たしげに大助を呼ぶ。何の御用かと問ふを遅しと、三郎に渡し、狼火は幾つなりしぞ、製作にぬかりはなかりしか、晝のと夜のとをよく言ひ聞かせしかといふ、數は晝三つ夜五つ、品にもつくりにも聊か申分なし、言ひ聞かせしこと勿論に候ふといふ、善し去れ。

腕こまぬきて吐息長く吐く。夜は正に更けて番卒の居眠るらし、巡邏の聲も聞えずなりぬ、梢を渡る颯々の聲かつ強く、銀河横さまに廻つて色次第に淡し。幸村立上りて曉の明星のひとり輝くを仰ぎしが、悄悄として座に復り、やがて我を忘れてどうと倒れ、徹るが如き聲に、止みなん〜。

* * * * *

落日歸らず、さしも鬼神の如くに恐れられし幸村も遂に屍を茶臼山のほとりに曝しぬ。かくて大阪の城も間なく落ちたり。金城湯池といひけん二なき構へながら、朽ちたる樹木の仆ると一様なる末期の悲しや。猛火は炎々天を焦して、櫓に残る旗馬印の色鮮やかに、夏ながらに風を起して火影に翻翻する凄さ。四方一時に擧ぐる鬨の聲。落つるもの、降るもの、死

するもの、城内今は一人の敵だもなく、砲火攻鼓一時に止みて、類火を消し止めし天守の頂に、揚々風に翻るも心地よし、金扇の馬印。

其宵茶臼山には祝捷の酒宴あり、大御所は所勞のよしにて出で給はず、將軍代りて諸侯の賀を受け給ふ。此慶時に何事か在せし、いと〜不興顔にて、さしも大功ありし伊達上杉にさへ感詞も賜はらず、袖ひき合ふて人々いぶかしむ。

あくる朝まだき、表の方に番兵の氣疎き叫ぶ聲するに、半藏等立出で見れば、木立の下に死せる者あり、何者かとひき立て見て齊一呆れぬ。

呆るもことわり、きのふまで變れるけしきもなく、まめまめしく立働きし望月三郎といへる武士、殊にはさがしとて佐渡殿の眷遇厚かりしもの。

正信に告ぐれば忽ち走せ來りぬ、これもまた呆れたり、その呆れもまたことわり、やがて上に請ふて女が婿にせんと兼々志したりしものを。

甲州武士といふは誠か、昵近數年ながら、素性明らかならぬ彼の自殺は正信が胸にひしことたふなり、日もあらんに落城の夜死することの恠しからでや。

それのみか、騒動を恐れて人には告げぬど、過る夜涼みがてらに庭先へ立出でしに、怪しく潜む曲者あり、手捕にせんと進みしに、彼にもまた飛鳥の働きありて甲斐なく取逃がし、が、跡に残りしは、見るも恐ろし、真田が一家に傳ふる南蠻傳來の狼火の筒なりけり。

豊臣氏既に亡びて、諸侯伯皆徳川の威福に伏せば、世は忽ちに太平の象あり。明くる四月大御所薨御ありたれど、胸には絶えず野心の刃を磨ぎながらも、あらはに干戈を動かさんとする者もなし、群雄皆頭を垂れて駕御を待つ。あゝ人は知らじな、人は知らじな、此の間の秘め事は人は知らじな。

秘喪數月、これはこれ神功征韓の故智。

危機逼らんとして遂に逼らず、一家榮を專にすること三百載。



有明月終

明治三十三年八月九日印刷
 明治三十三年八月十三日發行

定價金貳拾五錢

編輯者兼

川上五平
 東京市神田區南甲賀町八番地

印刷者

多田三彌
 東京市麴町區内幸町壹丁目五番地

印刷所

惠愛堂
 東京市麴町區内幸町壹丁目五番地



發行所

内外出版協會
 東京市神田區南甲賀町八番地

著隨天保久士學文

鞋 寸 七

(錢四稅郵 * 錢五拾參金價定)

天隨君の文は雄放にして清新
而して其最も長ずる所は紀行
文にあり此篇君が紀行を輯め
て長篇短篇錯落し五彩陸離た
り洵に是れ綠陰消夏の好伴侶
羈旅枕頭の好讀物

纂編茗醉井河

韻 幽 美 詩

(錢二稅郵 * 錢五十二金價定)

次 目

雲無心	山遠くして雲行客の跡を埋め、松寒くして風旅人の夢を破る、朝、岫を出づるや悠々たり、夕、峰に歸るや容々たり、有情の天地、無心の雲、これ自ら吾詩境。	河井
巖間の白百合	地を海波濼々たる南洋の端に取り、材を呀々たる月蝕の夜に構ふ、珊瑚の船を椰子の樹に繋ぐ處、七百の百合を胸に簪し、ニ一の實を研に供へて々々を祈る少女あり、月滅びて夜の光の長へに去らんさする時、幾千の炬火天を焚きて、露に映る刀槍の光、祭の壇の兵者に開つくらする島王あり、錯綜するに極めて怪奇な孤島の風物を以てし、一篇の長詩始一干行に餘り、一節一句悉く清野の文字を拉し來る、蓋し是れ吾詩界に於ける近時の雄作なり。	醉茗
いてふ集	君若くして敢て都門の塵に入らず、閑に田園の間に性を養ひ、桑を摘み繭を製るの暇、獨り詩書を繕く、鴨脚樹の二葉三葉は愛讀の万葉集にや挿まれけん、誰か拾ひ集めたる。	
吾襦布里	八雲の袖	横瀬夜雨
うらわ加草	春宵臺獨賦	香葉末露
白芙蓉	うつつし	秋櫻木
魂のなやみ	北國磯枕	和秋櫻木
輕風茶烟	白雲青山	山崎紫
夢野の夕風	草苑の人	堀井
今の世の所謂詩人、徒に詩名を售らんことに焦慮して、好んで嘯奇なる調を弄し、滯なる文字を陳ぬ。吾「文庫」一派の詩家は敢て然らず、落花の情、流水の筆、渾然として玉成し、流行の爲に掣肘せらるることなく、名利の爲に筆を枉ぐることをなし、以上の諸篇何すれ凡骨輩の歡迎を買はんが爲に世に公にせんや、聊か吾「文庫」派の爲に信する所あればなり。	夏一奥西堀山す和秋櫻香葉末露	野色原川井崎み

纂編者記庫文

ひふあ水

(錢四稅郵 * 錢廿金價定)

夏は夕あるが故に樂しく、夕は書あるより嬉しきはなし、薰風南より來りて白楊影濃かなる處、請ふ此「水あふひ」と緋け、筆は雲煙と起して字句は葛衣の輕きより軽く、想は風流と盡して情致は泉聲の快きより快く、恍然として詩境に彷徨するの想あらしむ。蒐むる所は青年文士が最近の佳什、自然の美と歌はんとするものと、世相の眞と穿たんとするものと、の孰れと問はず、皆初めて世に紹介すべき榮と記者の手に與へられたるものゝみ。

書叢園年少

訓 年 少

(錢貳稅郵 * 錢五廿金價定)

少年の誠	中村正直
近視眼	河本重次郎
少年讀書の注意	田中稻城
少年の朋友	西村正三郎
少年訓五則	嘉納治五郎
日記の利益	高津鐵三郎
何を以てか此の世を渡る	鈴木力
男兒唯宜しく己を恃むべし	
新井白石の傳	
リンコルン畧傳	
エヂソンの少時	
附 錄	
少年の心に於ける宇宙の變遷	坪内雄藏
并に危険なる宇宙	
孝女白菊の歌	落合直文

著子虚濱高

俳句入門

版四第

(錢貳金稅郵 * 錢拾貳金價定)

八篇に分ち總論に俳句の性質詩としての位置等を細説し次に俳句を解すること俳句作法(寫生頌咏進歩)季切字動不動緩急及び俳句雑話順次に説述して小冊二百三十頁 **俳句入門の實と有す新思想もて俳句と運用せんとする** **の士には必須の書なり** (國民新聞)

此書從來の俳論に比べて遙よ美學的はるかよ系統的入門者よよろしく而して上堂者よも興あり文章また雅馴 (早稻田文學)

俗宗匠輩が或は獨案内と名け或は手引草と號して印行せるものに比すれば固より日を同じくして論ずべきにあらず **我は初めて俳諧の道よ入らんとする者に此書を紹介するに躊躇せざるなり** (帝國文學)

纂編園年少

詩學捷徑

版六第

(錢四稅郵 * 錢五拾貳金價定)

此の寸珍 **丁寧周密**なる圖書の發行を以て名ある少年園よ美本平生の心得を第二篇に韻字箋を第三篇には作詩便覽を第四篇に通用文字を執れ初學詩を學ぶもの爲には必須のもの廿五錢の **決して不廉と云ふ可からず** (毎日新聞)

總クロース製袖珍の美本而も **嗚呼此の書一度出で** **幼學便覽遂に顔色乎** (少年世界)

作詩法を開發教授の精神 **作例清新製本美麗** **最も少年の獨習に適するを** (少國民)

袖珍二百五十六頁の好冊子にして今様に撰しかへたる幼學便覽といふべきもの韻字箋作詩便覽 **詩話詩法**の **興ある節々**を纂輯したる所此 (早稻田文學)

初學の作詩家を目當に編せられし書物 **明瞭簡易**に作詩心從來其の數少からず然れども此の如く **得を説き以て作詩便覽に及びたるものは少なし**是れ本書の特色なるべし (教育時論)

書圖兌發會協版出外内

授教校學等高口山
著一政々佐士學文

要史學文本日

(錢四金稅郵 錢拾參金價定版初 裝和)

語評の者記“誌維立欄京東”

著者佐々氏は現に第二高等學校に在りて日本文學史を教授しつゝある人、本書は氏が數年間教授の經驗の結果を公にしたるものと見るべし。從來我國にも二三種の文學史なきにあらざるも、此著の如く善く中等教育程度の學生に適したるはなし。全篇を奈良朝以前、奈良朝、平安朝、鎌倉時代、室町時代及び江戸時代の六章に分ち、各章更に總説、律語、散文の數節に細別せり。總説に於ては各時代文學の特質を略説して當時の文化の有様を知らしめ、更に律語、散文に論及せり。記事の精粗、材料の取舍其宜しきを得、日本文學史初歩としては此上もなき好著なり。附録として文體變遷の略表及び時代文學略表を載せ、一目上下二千年の文界の大勢を窺ふの便を得せしめたるなど、用意周到。

本書は、日本文學の起原、發達、變遷を叙する歴史にして、天壤無窮の帝室を戴き、秀麗なる富嶽、琵琶湖の靈氣に養はれたる忠勇にして優美なる日本國民が、上下三千年の治亂と、漢學思想佛教思想等の感化とに由りて、如何なる文學上の發達變遷を爲し、かは、頗る興味ある問題にして、又國民の知らざる可らざる所也。

書圖兌發會協版出外内

著郎一藤後士學工

書全術眞寫

(錢四金稅郵 * 錢拾五金價定)

寫眞は最良絶好の娛樂にして常に娛樂たるに止まらず又無限の實利實益を有せり宜なり近時靡然として此術の世上に流行するや本書は後藤工學士が淵博の識を擧げて著す所に係り先づ寫眞術の定義より説き起して景色人物其他器械の使用撮影の方法寫眞一切の術を説明し圖畫を附して言の及ばざるを補ふ其叮嚀親切なる尋常射的著書と撰を異にす此術を愛好するの士は一本を購うて益々其精を極むべき也

(東京日々新聞)

此書は重に寫眞の技術を知得せんとする人の爲めに書き著されたる者に一切人物景色の撮影法は勿論萬般の寫眞法より臺紙に張り上げる迄の有名なるレントゲン氏暗寫眞法より寫眞器械の定價表に至る迄丁寧反覆して之を示したる二百七十餘頁の大冊にして文章も又頗る平易なれば何人とも雖も一讀の下に撮影器具及び藥品の使用法等の巨細を理解し得べく特に此道に志せる人は座右に備へざる可からざるの良書なり

(人民新聞)

後藤工學士が多年の修技及び經驗と寫眞術に關する歐米最新の良書を參考せしみに依りて成りし者なれば其説明の詳細密なること多く其比を見ず殊に實用に應せんと欲し成るべく理論を避けたる如く見たりれば寫眞研究者に取りて秋毫も遺憾なかるべし附録にはレントゲン暗寫眞法「エツキス光線」其他の講義あり終りに寫眞用藥品及び原料代價表」と「寫眞器械代價表」とを仔細に列記したり

(横濱貿易新聞)

著三鑑村内

小憤慨録

版參第

(錢四稅郵 * 錢拾參金價定)

次目

- 教育
 - 文學博士井上哲次郎君に呈する公開狀
 - 精神的教育とは何ぞ
- 宗教
 - 宗教の必要
 - 誤解人物の辯護
 - 我が信仰の表白
 - 基督信徒の特徴
 - 永生の冀望
 - 露國美術家ニコライ、ガ
- 文學
 - 文學局外觀
 - 米國詩人
 - 史學の研究
 - 傳記學の研究
 - 西洋文明の心髓
 - 慈善
 - チャイルス、ローリング、
- 時事
 - 簡易なる慈善
 - 日清戰爭の義
 - 日清戰爭の目的如何
 - 世界歴史に徴して日支の關係を論ず
 - 膽汁數滴
 - 膽汁餘滴
 - 不平論
 - 萬朝餘錄
 - 世界の日本
 - 農夫亞麼士の言
 - 農業と社會改良との關係
 - 日本の家庭組織
- 韻文
 - 樂しき生涯
 - 寡婦の除夜

授教校學範師等高
編郎六夷朝

朗吟集

版參第

(錢二稅郵 * 錢拾貳金價定)

萬朝報

和漢の名詩歌を蒐めたるもの上卷は歌下卷は詩にして節操鐵の如きものあり潔白雪の如きものあり悉くこれ金玉の文字學生者流一本を購うて朗吟せば心志鍛練の上に於て益する所少からざるべし

本書は師範學校中學校及び其他の學生をして朗吟せしめんが爲め和漢古今の著名なる作者に就き其最も明倫の要旨を得たる詩歌を採録せるものにして朗吟の際教育上少補あらんことを期せりなきは巧と雖益なきものなれども本書載する所は二者相兼ねたるものなり且本書には作者の小傳を掲げ略ぼ其人と爲りを知らしめ字句の稍難きものは之を標註し特に歌は其大意を解釋せり

國民新聞

上下二卷の小冊子短長歌七十餘和漢古今詩百餘共に吟咏すべきものを蒐集せり鼈頭に字句の註解あり用意周到秋月皎潔明河在天の宵など朗々として吟ずるの好資料なり

書圖兌發會協版出外内

著郎三達村内

内案獨學語英

冊二下上

(錢四稅郵 * 錢十四金價定)

外國語を學修するには最も自助獨立の力を要す自ら教へ自ら學び得たる外國語は自由に之を活用し此書は英語學に志す人々をして自ら教へ自ら學ばしめんが爲めに著したる者なり即ち最も簡明にして最も解し易き方法を以て發音より文法に入り文法を學ぶ間に單語を知らしめ斯くて其文法單語を應用して作文會話を練習せしめ易より難に進み簡より繁に入り遂に全く英語學に熟達せしむ

此書章を分つ凡そ五十每章二日の課程となすに適す故に一日に一章を復習し他の一日にて一**百日間**にして能く實用の英語に通じ普通の書と讀み文と作り會話を爲し得るに至るべし

毎年二月一回改正發行

書圖兌發會協版出外内

纂編園年少

内案學遊京東

版六十第

(錢四稅郵 * 錢十三金價定)

明治二十三年より毎年二回發兌し來りたる頗る便利の書なり上京の準備學費の概算修業の年限より都下學生の學事學校の種類宿所の選定等まで注意周到實に遊學者の指針として着京の注意受験の格周到にし確實なり

例其他學校萬般の景況を詳記したるもの**周到**にし確實なり

地方年少の一讀を要す(毎日新聞)

上中下の三篇遊學者の指針各**丁寧精密**能く事情と盡せり郷曲父兄も亦一本を備ふべきに似たり(日本)

都門の實況及び校則等を掲げ又入學試験問題を詳記す**地方青年の爲には無**

二の**津梁**となすべし(東京日々新聞)

偽本 同名擬似の書あり御注文の節「少年園編纂」の五字に注意せられよ

查明三十三三年六月調査

就業受驗案内

(錢貳稅郵 * 錢拾貳金價定)

試験規則問題全集毎年六月十二月改正發行

次 目

萬朝報

- 高等文官
- 外交官及領事官
- 理事試補
- 海軍少軍醫、少藥劑士、少軍醫候補生及藥劑士候補生
- 海軍水路少技士候補生
- 海軍筆記
- 鐵道書記補及通信書記補
- 稅關監吏補
- 師範學校中學校及高等女學校教員
- 師範學校中學校及高等女學校教員
- 社司社掌
- 辯護士
- 海員
- 獸醫
- 普通文官
- 公使館書記生及領事館書記生
- 主理試補
- 海軍少主計候補生
- 判事及檢事
- 望樓長及望樓手
- 郡區長
- 小學校教員
- 執達吏
- 特許代理業者
- 醫員
- 產婆
- 官國幣社神職
- 公證人
- 水先人
- 藥劑師
- 巡查
- 小學校教員
- 執達吏
- 特許代理業者
- 醫員
- 產婆
- 官國幣社神職
- 公證人
- 水先人
- 藥劑師
- 巡查

『勞働社會就業案内』と共に定期刊行案内書類中の一冊なり彼れは勞働社會の爲め、此れは中等社會の爲め、いづれも有利益利なる案内書なり。即ち此冊には高等文官試験の事より、總て官吏公吏となるの手續に及び、丁寧詳細に説き示したり。

勞働社會

就業案内

(錢二稅郵 * 錢五拾金價定)

萬朝報の『評語』

勞働の業に従はんと欲して世に如何なる勞働の業あるかを知らざる者は本書に問ふべし。諸種の勞働の業に就くべき手續を知らざる者は本書に問ふべし。賃銀の比較、仕事の難易將來の見込等を知らざる者は本書に問ふべし。總て勞働者にして就業の案内を得んと欲する者は本書に問ふべし。本書は定期刊行案内書類の一にして毎年改正せらるべき筈なり。

文庫

文庫は明治廿二年の創刊にして隆替常なき**文學雜誌**中
最古く**最堅固**に**發行部數最多**く**讀書社會**に
最勢力の雄風を羨みて**模倣者相踵**ぐを以て視るも其版
知るに**本誌の特色**は**虚名**なくして**實力**ある**天**
下の俊才を一堂に招き**凡そ新文士**と待つこと
最自由に**最公平**なるは本誌に**趣味の清新材料**の
豊富亦劣に自ら許**中央文壇**に對峙し**一敵國**をなす今や
す所偏狹なる**第四號面目**を**刷新**して**徹頭徹尾青年作家**
の寄稿を以て充たされ**覇氣**汪勃**熱火**四**天下の俊髦**冀く
は競うて趨り來れ
毎月一回十五日發行○定價金拾貳錢○六册前金六拾六錢○拾貳册前金壹
圓貳拾錢○一ヶ年(臨時増刊四册共)前金壹圓六拾錢○郵稅壹錢宛
見本に**限**郵券代用**六錢**但註文者何號と指定せら
るゝ場合には拾參錢を要す

